

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (18)

東九州自動車道建設（鹿屋串良 JCT～曾於弥五郎 IC間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

天神段遺跡 3

(曾於郡大崎町)

縄文時代早期編

第3分冊

2018年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

総目次

【第1分冊】

巻頭図版 1
巻頭図版 2
序 文
報告書抄録
天神段遺跡位置図
例言・凡例
目 次

第I章 発掘調査の経過
第1節 調査に至るまでの経緯
第2節 整理・報告書作成作業
1 作業内容
2 作業体制
第II章 遺跡の位置と環境
第1節 地理的環境
第2節 歴史的環境
第III章 調査の方法と順序
第1節 調査の方法
1 発掘調査の方法
2 遺構の認定と検出方法

3 整理・報告書作成作業の方法
第2節 層序
第IV章 発掘調査の成果
第1節 縄文時代早期の概要
第2節 遺構
【第2分冊】
第3節 遺物
1 土器（I類土器～XV類土器）
【第3分冊】
第3節 遺物
1 土器（XVI類土器～XX類土器）
2 土製品
3 石器
第V章 自然科学分析
第1節 概要
第2節 テフラ分析
第3節 放射性炭素年代測定
第VI章 総括
【第4分冊】
写真図版

第3分冊目次

目 次

第IV章 発掘調査の成果
第3節 遺物
1 土器
(16) XVI類土器
(17) XVII類土器
(18) XVIII類土器
(19) XIX類土器
(20) XX類土器

2 土製品
3 石器
VII層出土の石器
VI層出土の石器
第V章 自然科学分析
第1節 自然科学分析の概要
第2節 テフラ分析
第3節 放射性炭素年代測定
第VI章 総括

挿図目次

第404図 XVI類土器出土分布図
第405図 XVI類土器 (1)
第406図 XVI類土器 (2)
第407図 XVI類土器 (3)
第408図 XVI類土器 (4)
第409図 XVI類土器 (5)
第410図 XVI類土器 (6)
第411図 XVI類土器 (7)
第412図 XVI類土器 (8)
第413図 XVI類土器 (9)
第414図 XVI類土器 (10)
第415図 XVI類土器 (11)

第416図 XVI類土器 (12)
第417図 XVI類土器 (13)
第418図 XVI類土器 (14)
第419図 XVI類土器 (15)
第420図 XVI類土器 (16)
第421図 XVI類土器 (17)
第422図 XVI類土器 (18)
第423図 XVI類土器 (19)
第424図 XVI類土器 (20)
第425図 XVI類土器 (21)
第426図 XVI類土器 (22)
第427図 XVI類土器 (23)

第 428 图	ⅩⅧ 类土器 (24)	30	第 488 图	Ⅷ 层出土石器 (25)	103
第 429 图	ⅩⅧ 类土器 (25)	31	第 489 图	Ⅷ 层出土石器 (26)	104
第 430 图	ⅩⅧ 类土器 (26)	32	第 490 图	Ⅷ 层出土石器 (27)	105
第 431 图	ⅩⅧ 类土器 (27)	33	第 491 图	Ⅷ 层出土石器 (28)	106
第 432 图	ⅩⅧ 类土器 (28)	34	第 492 图	Ⅷ 层出土石器 (29)	107
第 433 图	ⅩⅧ 类土器 (29)	35	第 493 图	Ⅷ 层出土石器 (30)	108
第 434 图	ⅩⅧ 类土器出土分布图	36	第 494 图	Ⅷ 层出土石器 (31)	109
第 435 图	ⅩⅧ 类土器 (1)	37	第 495 图	Ⅷ 层出土石器 (32)	111
第 436 图	ⅩⅧ 类土器 (2)	38	第 496 图	Ⅷ 层出土石器 (33)	112
第 437 图	ⅩⅧ 类土器 (3)	39	第 497 图	Ⅷ 层出土石器 (34)	113
第 438 图	ⅩⅧ 类土器 (4)	40	第 498 图	Ⅷ 层出土石器 (35)	114
第 439 图	ⅩⅧ 类土器 (5)	41	第 499 图	Ⅷ 层出土石器 (36)	115
第 440 图	ⅩⅧ 类土器出土分布图	43	第 500 图	Ⅷ 层出土石器 (37)	116
第 441 图	ⅩⅧ 类土器 (1)	44	第 501 图	Ⅷ 层出土石器 (38)	117
第 442 图	ⅩⅧ 类土器 (2)	45	第 502 图	Ⅷ 层出土石器 (39)	118
第 443 图	ⅩⅧ 类土器 (3)	47	第 503 图	Ⅷ 层出土石器 (40)	119
第 444 图	ⅩⅧ 类土器 (4)	48	第 504 图	Ⅷ 层出土石器 (41)	120
第 445 图	ⅩⅧ 类土器 (5)	49	第 505 图	Ⅷ 层出土石器 (42)	121
第 446 图	ⅩⅧ 类土器出土分布图	51	第 506 图	Ⅷ 层出土石器 (43)	122
第 447 图	ⅩⅧ 类土器 (1)	52	第 507 图	Ⅷ 层出土石器 (44)	123
第 448 图	ⅩⅧ 类土器 (2)	53	第 508 图	Ⅷ 层出土石器 (45)	124
第 449 图	ⅩⅧ 类土器 (3)	54	第 509 图	Ⅷ 层出土石器 (46)	125
第 450 图	ⅩⅧ 类土器 (4)	55	第 510 图	Ⅷ 层出土石器 (47)	126
第 451 图	ⅩⅧ 类土器 (5)	56	第 511 图	Ⅷ 层出土石器 (48)	127
第 452 图	ⅩⅧ 类土器 (6)	57	第 512 图	Ⅷ 层出土石器出土分布图 (石镰)	128
第 453 图	ⅩⅧ 类土器出土分布图	59	第 513 图	Ⅷ 层出土石器出土分布图 (石镰以外)	129
第 454 图	ⅩⅧ 类土器 (1)	61	第 514 图	Ⅷ 层出土石器 (1)	130
第 455 图	ⅩⅧ 类土器 (2)	62	第 515 图	Ⅷ 层出土石器 (2)	131
第 456 图	ⅩⅧ 类土器 (3)	63	第 516 图	Ⅷ 层出土石器 (3)	132
第 457 图	ⅩⅧ 类土器 (4)	65	第 517 图	Ⅷ 层出土石器 (4)	133
第 458 图	ⅩⅧ 类土器 (5)	66	第 518 图	Ⅷ 层出土石器 (5)	134
第 459 图	ⅩⅧ 类土器 (6)	67	第 519 图	Ⅷ 层出土石器 (6)	135
第 460 图	土製品出土分布图	68	第 520 图	Ⅷ 层出土石器 (7)	136
第 461 图	土製品	69	第 521 图	Ⅷ 层出土石器 (8)	137
第 462 图	Ⅷ 层出土石器出土分布图 (石镰)	77	第 522 图	Ⅷ 层出土石器 (9)	138
第 463 图	Ⅷ 层出土石器出土分布图 (石镰以外)	78	第 523 图	Ⅷ 层出土石器 (10)	139
第 464 图	Ⅷ 层出土石器 (1)	79	第 524 图	Ⅷ 层出土石器 (11)	140
第 465 图	Ⅷ 层出土石器 (2)	80	第 525 图	Ⅷ 层出土石器 (12)	141
第 466 图	Ⅷ 层出土石器 (3)	81	第 526 图	Ⅷ 层出土石器 (13)	142
第 467 图	Ⅷ 层出土石器 (4)	82	第 527 图	Ⅷ 层出土石器 (14)	143
第 468 图	Ⅷ 层出土石器 (5)	83	第 528 图	Ⅷ 层出土石器 (15)	144
第 469 图	Ⅷ 层出土石器 (6)	84	第 529 图	Ⅷ 层出土石器 (16)	145
第 470 图	Ⅷ 层出土石器 (7)	85	第 530 图	Ⅷ 层出土石器 (17)	146
第 471 图	Ⅷ 层出土石器 (8)	86	第 531 图	Ⅷ 层出土石器 (18)	147
第 472 图	Ⅷ 层出土石器 (9)	87	第 532 图	Ⅷ 层出土石器 (19)	148
第 473 图	Ⅷ 层出土石器 (10)	88	第 533 图	Ⅷ 层出土石器 (20)	149
第 474 图	Ⅷ 层出土石器 (11)	89	第 534 图	Ⅷ 层出土石器 (21)	150
第 475 图	Ⅷ 层出土石器 (12)	90	第 535 图	Ⅷ 层出土石器 (22)	151
第 476 图	Ⅷ 层出土石器 (13)	91	第 536 图	Ⅷ 层出土石器 (23)	152
第 477 图	Ⅷ 层出土石器 (14)	92	第 537 图	Ⅷ 层出土石器 (24)	153
第 478 图	Ⅷ 层出土石器 (15)	93	第 538 图	Ⅷ 层出土石器 (25)	154
第 479 图	Ⅷ 层出土石器 (16)	94	第 539 图	Ⅷ 层出土石器 (26)	155
第 480 图	Ⅷ 层出土石器 (17)	95	第 540 图	Ⅷ 层出土石器 (27)	156
第 481 图	Ⅷ 层出土石器 (18)	96	第 541 图	Ⅷ 层出土石器 (28)	157
第 482 图	Ⅷ 层出土石器 (19)	97	第 542 图	Ⅷ 层出土石器 (29)	158
第 483 图	Ⅷ 层出土石器 (20)	98	第 543 图	Ⅷ 层出土石器 (30)	159
第 484 图	Ⅷ 层出土石器 (21)	99	第 544 图	Ⅷ 层出土石器 (31)	160
第 485 图	Ⅷ 层出土石器 (22)	100	第 545 图	Ⅷ 层出土石器 (32)	161
第 486 图	Ⅷ 层出土石器 (23)	101	第 546 图	Ⅷ 层出土石器 (33)	162
第 487 图	Ⅷ 层出土石器 (24)	102	第 547 图	Ⅷ 层出土石器 (34)	163

第548図	VI層出土石器 (35)	164
第549図	VI層出土石器 (36)	165
第550図	VI層出土石器 (37)	167
第551図	VI層出土石器 (38)	168
第552図	VI層出土石器 (39)	169
第553図	VI層出土石器 (40)	170
第554図	VI層出土石器 (41)	171
第555図	VI層出土石器 (42)	172
第556図	VI層出土石器 (43)	173
第557図	VI層出土石器 (44)	174
第558図	VI層出土石器 (45)	175
第559図	VI層出土石器 (46)	176
第560図	VI層出土石器 (47)	177
第561図	VI層出土石器 (48)	178
第562図	VI層出土石器 (49)	179
第563図	VI層出土石器 (50)	180
第564図	VI層出土石器 (51)	181
第565図	VI層出土石器 (52)	182
第566図	VI層出土石器 (53)	183
第567図	VI層出土石器 (54)	184
第568図	VI層出土石器 (55)	185
第569図	VI層出土石器 (56)	186
第570図	VI層出土石器 (57)	187
第571図	VI層出土石器 (58)	188
第572図	VI層出土石器 (59)	189
第573図	VI層出土石器 (60)	190
第574図	VI層出土石器 (61)	191
第575図	VI層出土石器 (62)	192
第576図	VI層出土石器 (63)	193
第577図	VI層出土石器 (64)	194
第578図	VI層出土石器 (65)	195
第579図	VI層出土石器 (66)	196
第580図	VI層出土石器 (67)	197
第581図	VI層出土石器 (68)	198
第582図	VI層出土石器 (69)	199
第583図	VI層出土石器 (70)	200
第584図	VI層出土石器 (71)	201
第585図	VI層出土石器 (72)	202
第586図	VI層出土石器 (73)	203

第587図	VI層出土石器 (74)	204
第588図	VI層出土石器 (75)	205
第589図	VI層出土石器 (76)	206
第590図	VI層出土石器 (77)	207
第591図	VI層出土石器 (78)	208
第592図	VI層出土石器 (79)	209
第593図	VI層出土石器 (80)	210
第594図	VI層出土石器 (81)	211
第595図	VI層出土石器 (82)	212
第596図	VI層出土石器 (83)	213
第597図	VI層出土石器 (84)	214
第598図	VI層出土石器 (85)	215
第599図	VI層出土石器 (86)	216
第600図	比較試料採取地点の位置	240
第601図	曆年較正年代グラフ	248
第602図	曆年較正年代グラフ	250
第603図	曆年較正年代グラフ	252
第604図	曆年較正年代グラフ (1)	254
第605図	曆年較正年代グラフ (2)	255
第606図	曆年較正年代グラフ (3)	256
第607図	曆年較正年代グラフ	257
第608図	曆年較正年代グラフ (1)	259
第609図	曆年較正年代グラフ (2)	260
第610図	曆年較正年代グラフ (1)	261
第611図	曆年較正年代グラフ (2)	262
第612図	曆年較正年代グラフ (1)	264
第613図	曆年較正年代グラフ (2)	265
第614図	曆年代の分布図	265
第615図	曆年較正年代グラフ (1)	268
第616図	曆年較正年代グラフ (2)	269
第617図	曆年較正年代グラフ (3)	269
第618図	五角形鏃の出土状況図	271
第619図	D~L-22区 土器出土状況図 (垂直分布)	273
第620図	D~N-11~25区 III-V期土器出土状況図	275
第621図	天神段遺跡出土縄文時代早期土器変遷図 (1)	276
第622図	天神段遺跡出土縄文時代早期土器変遷図 (2)	277
第623図	天神段遺跡出土縄文時代早期土器変遷図 (3)	278
第624図	天神段遺跡出土縄文時代早期土器変遷図 (4)	279

表目次

第50表	XV類土器観察表 (1)	70
第51表	XV類土器観察表 (2)	71
第52表	XV類土器観察表 (3)	72
第53表	XV類土器観察表	72
第54表	XV類土器観察表 (1)	72
第55表	XV類土器観察表 (2)	73
第56表	XV類土器観察表 (1)	73
第57表	XV類土器観察表 (2)	74
第58表	XV類土器観察表 (1)	74
第59表	XV類土器観察表 (2)	75
第60表	土製品観察表	75
第61表	天神段遺跡における石材分類	76
第62表	VI・VII層出土石器組成表	76

第63表	VII層出土石器観察表 (1)	217
第64表	VII層出土石器観察表 (2)	217
第65表	VII層出土石器観察表 (3)	218
第66表	VII層出土石器観察表 (4)	218
第67表	VII層出土石器観察表 (5)	219
第68表	VII層出土石器観察表 (6)	219
第69表	VII層出土石器観察表 (7)	220
第70表	VII層出土石器観察表 (8)	220
第71表	VII層出土石器観察表 (9)	221
第72表	VII層出土石器観察表 (10)	221
第73表	VII層出土石器観察表 (11)	222
第74表	VII層出土石器観察表 (12)	222
第75表	VI層出土石器観察表 (1)	223

第76表	VI層出土石器観察表(2)	223
第77表	VI層出土石器観察表(3)	224
第78表	VI層出土石器観察表(4)	224
第79表	VI層出土石器観察表(5)	225
第80表	VI層出土石器観察表(6)	225
第81表	VI層出土石器観察表(7)	226
第82表	VI層出土石器観察表(8)	226
第83表	VI層出土石器観察表(9)	227
第84表	VI層出土石器観察表(10)	227
第85表	VI層出土石器観察表(11)	228
第86表	VI層出土石器観察表(12)	228
第87表	VI層出土石器観察表(13)	229
第88表	VI層出土石器観察表(14)	229
第89表	VI層出土石器観察表(15)	230
第90表	VI層出土石器観察表(16)	230
第91表	VI層出土石器観察表(17)	231
第92表	VI層出土石器観察表(18)	231
第93表	VI層出土石器観察表(19)	232
第94表	VI層出土石器観察表(20)	232
第95表	VI層出土石器観察表(21)	233
第96表	VI層出土石器観察表(22)	233
第97表	VI層出土石器観察表(23)	234
第98表	VI層出土石器観察表(24)	234
第99表	VI層出土石器観察表(25)	235
第100表	VI層出土石器観察表(26)	235
第101表	自然科学分析実施一覧表	236
第102表	調査区層序と試料採取層位	237
第103表	テフラ組成分析試料一覧	240

第104表	テフラ分析試料一覧	242
第105表	テフラ組織分析試料一覧	244
第106表	測定試料及び処理	248
第107表	放射性炭素年代測定及び暦年校正結果	248
第108表	測定試料及び処理	249
第109表	放射性炭素年代測定及び暦年校正結果	250
第110表	測定試料及び処理	251
第111表	放射性炭素年代測定及び暦年校正結果	251
第112表	測定試料及び処理	253
第113表	放射性炭素年代測定及び暦年校正結果(1)	253
第114表	放射性炭素年代測定及び暦年校正結果(2)	254
第115表	測定試料及び処理	256
第116表	放射性炭素年代測定及び暦年校正結果	257
第117表	測定試料及び処理	258
第118表	放射性炭素年代測定及び暦年校正結果	259
第119表	放射性炭素年代測定結果	261
第120表	放射性炭素年代測定結果	261
第121表	測定試料及び処理	263
第122表	放射性炭素年代測定及び暦年校正結果	264
第123表	放射性炭素年代測定結果	267
第124表	放射性炭素年代測定結果	267
第125表	放射性炭素年代測定結果	268
第126表	遺構検出の炭化物の年代測定結果	270
第127表	天神段遺跡の五角形鐵	271
第128表	天神段遺跡出土の土器型式分類と出土点数	272
第129表	Ⅱ類土器胴部縄文施文組成表	274
第130表	Ⅲ類土器胴部縄文施文組成表	275

第四章 発掘調査の成果

第3節 遺物

1 土器 (XV~XX類土器)

(16) XV類土器 (第404~433図 1297~1410)

XV類土器は貝殻腹縁部による貝殻刺突文、貝殻条痕文を主な文様とする一群である。口縁部が外反し、胴部中央でやや膨らみ、平底の底部にむけてすぼまる器形を主体とする。わずかに外傾するもの、やや外反もしくは直口気味に立ち上がる円筒形状の器形のものも含む。文様は多くが口縁部、胴部の2帯構成である。ただし、円筒形状の器形のもので口縁部から胴部下半まで同一の文様構成のものもある。外面には刺突文、沈線文、条痕文等を施す。施文具は貝殻以外のものもある。

本類土器は器形、文様ともに多様であるため、分類の概要を略述する。

まず、器形による大別を行った。口縁部が外反する一群、口縁部がわずかに外傾する一群、口縁部がやや外反もしくは直口気味に立ち上がる円筒形状の器形の一団の3つに分類した。

口縁部が外反する一群は、口縁部に貝殻刺突文のみを施す一群と口縁部に貝殻刺突文以外に沈線文や条痕文を付加し施文する一群の2つに分類した。口縁部に貝殻刺突文のみを施す一群はさらに胴部文様による細分を行った。口縁部に貝殻刺突文以外に沈線文や条痕文を付加し施文する一群は、さらに口縁部文様のモチーフや文様の組み合わせ等による細分を行った。

口縁部がわずかに外傾する一群は、それ以上の細分は行っていない。

口縁部がやや外反もしくは直口気味に立ち上がる円筒形状の器形の一団は、さらに口縁部上位と口縁部下位から胴部下半までの2帯に文様構成が分かれる一群と口縁部から胴部下半まで同一の文様構成の一団とに細分した。

1297~1351は口縁部が外反する一群である。

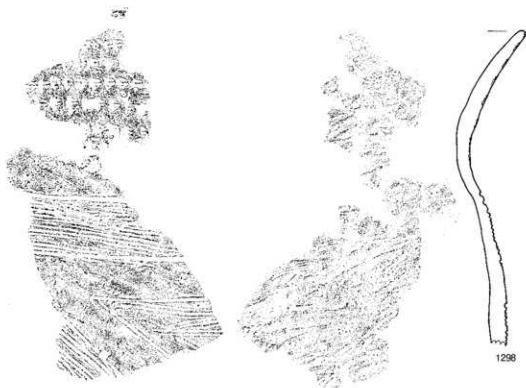
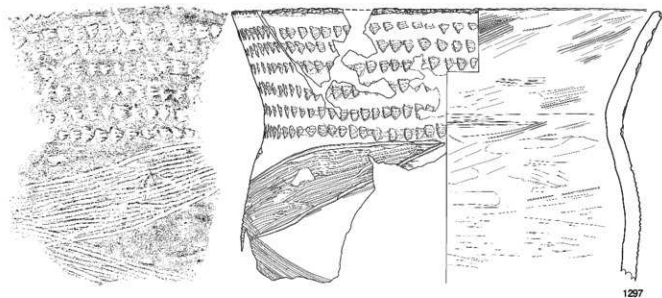
1297~1314は口縁部に横位の貝殻刺突文のみを施す一群である。

胴部文様は貝殻条痕文を施した後、両端に沈線を施し区画する一群、貝殻条痕文のみを施す一群、貝殻刺突文のみを施す一群に細分した。

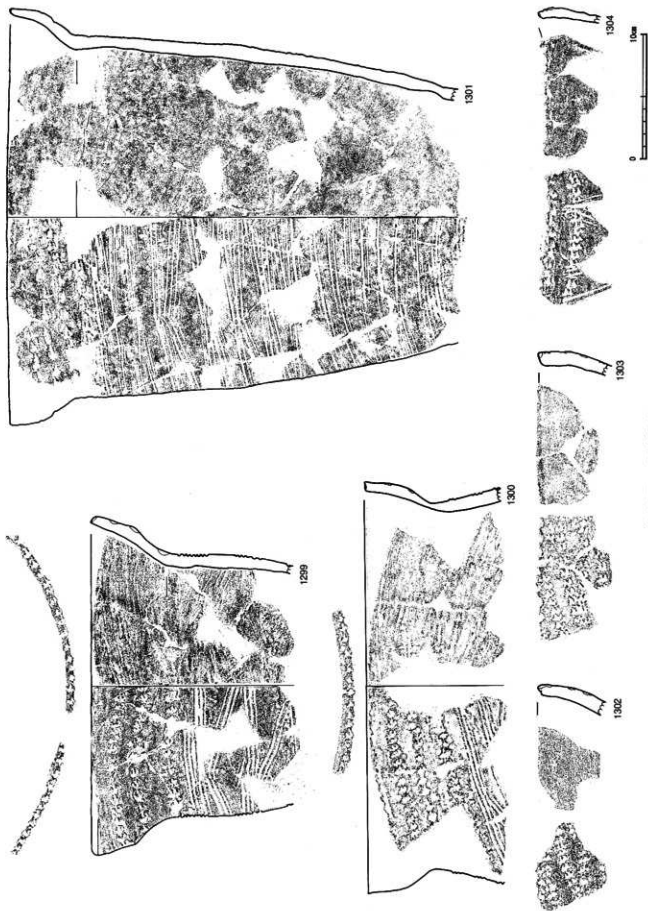
1297・1298は胴部に貝殻条痕文を施した後、両端に沈線を施し区画する一群である。いずれも口縁部から胴部中央付近の土器片である。口縁部に貝殻腹縁部を縦位の状態で器面に対してやや寝かせるように深く押し当て、押しくように横位の刺突を施す。口唇部にも同様の施文具で刻目を入れる。1298は口唇部外端部に刻目を

入れる。胴部は貝殻条痕文を帯状に斜位に施す。その後、貝殻条痕文の両端に沈線を施し区画する。沈線よりはみ出した条痕は、ナゲ消している。1297は口縁部内面に貝殻条痕が一部確認できる。1298は胴部外面に煤状の炭化物が確認できる。

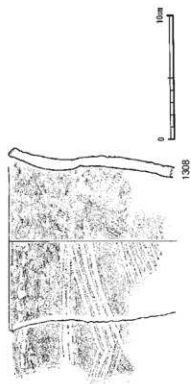
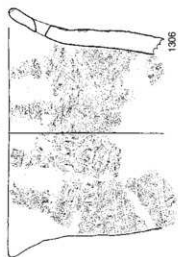
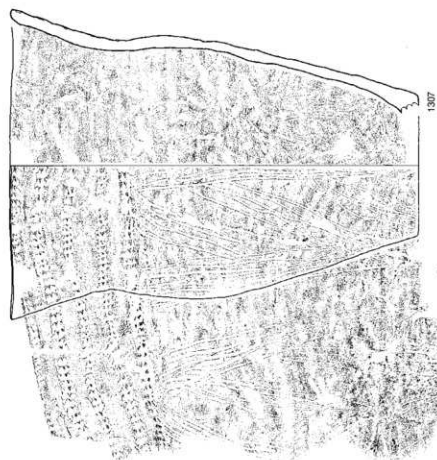
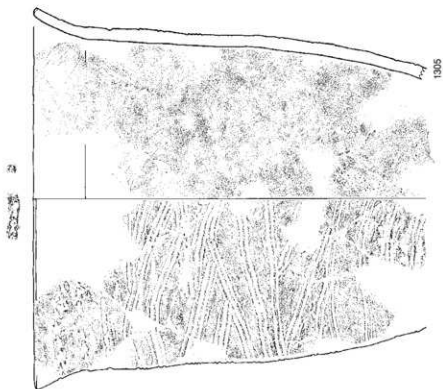
1299~1308は胴部に貝殻条痕文のみを施す一群である。1302~1304は口縁部付近のみであるが、1299等と口縁部形態、文様が類似することから、ここに含めた。1299~1304は口縁部がわずかに屈曲する。1299・1300は口縁部中位、屈曲部、頸部に横位の貝殻刺突文を1段ずつ施す。同様の施文具で口唇部外端部から平坦面に刻目を入れる。頸部と胴部境付近に、貝殻条痕文を横位に施す。1299は胴部に横長の菱形のモチーフを貝殻条痕文で描き、1300も菱形のモチーフの一部と考えられる横位、斜位の貝殻条痕文を施す。いずれも内面にナゲを行っている。1301は口縁部から胴部下半まで復元することができた。口縁部中位、屈曲部、屈曲部下から頸部、頸部に貝殻刺突文を横位に施す。胴部は貝殻条痕文を横位、斜位に施す。内面は口縁部付近を中心に丁寧なナゲを行っている。1302・1303は口縁部に横位、斜位の貝殻刺突文を施す。口唇部外端部に同様の施文具で刻目を入れる。1303は胎土に金雲母を多く含む。1304は口縁部がやや内傾し、わずかに屈曲する波状口縁を呈する器形である。口縁部に貝殻刺突文を横位に施した後、縦位、斜位の沈線を施す。1305~1314は口縁部がラッパ状に外反する。1305は口縁部から胴部下半まで復元することができた。口縁部中央、頸部、頸部と胴部の境付近に貝殻刺突文を1段ずつ施す。口唇部にも同様の施文具で刻目を入れる。胴部は貝殻条痕文を横位、斜位に施す。内面は丁寧なナゲを行っている。1306は口縁部から胴部上半まで復元することができた。口縁部上位のやや下がった位置から頸部と胴部の境付近まで、横位の貝殻刺突文を3段施す。口唇部に刻目を入れる。胴部は横位の貝殻条痕文を施す。口縁部には焼成後に外面から穿孔したと考えられる補修孔が1か所確認できる。1307はほぼ完形に復元することができた。口縁部がやや外反し、胴部もさほど膨らまず、底部に向けて直線的にすぼまる縦長の器形である。口縁部から頸部に貝殻の腹縁部による押しき状の貝殻刺突文を横位に4段施す。口唇部外端部にも同様の施文具で刻目を入れる。胴部は棒状工具の先端を細く加工したもので、底面境付近まで縦位に浅い沈線を施し、器面の割付けを行う。その後、縦位の沈線間と同様の施文具で斜位の浅い沈線を行う。内面は頸部から胴部にかけて、指おさえ痕が多数確認できる。



第 405 图 XV 期土器 (1)



第 405 圖 ⅩⅢ類土器 (2)



第 407 図 瓦師土器 (3)

1308は口縁部から胴部下半まで復元することができた。口縁部上位に貝殻刺突文を1段施す。同様の施文具で口唇部に刻目を入れる。頸部に横位の沈線と2条施し、胴部は斜位の沈線で「V」字状のモチーフを描く。内面は横位のケズリを行った後、ナデを行う。

1309・1310は胴部に貝殻刺突文のみを施す一群である。1310は口縁部付近のみであるが、1309の口縁部形態及び文様と類似することからここに含めた。1309は口縁部上位と頸部付近に、幅広い押しき状の貝殻刺突文を横位に1段ずつ施した後、横位の貝殻刺突文間に斜位の貝殻刺突文で横長の菱形状のモチーフを描く。口唇部にも同様の施文具で刻目を入れる。胴部にも同様の貝殻刺突文を横位に施す。1310も押しき状の貝殻刺突文で口縁部に菱形状のモチーフを描いたと考えられる。

1311～1314は口縁部付近のみであるが、胴部に貝殻刺突文、貝殻刺突を施文する一群の一部と考えられる。1311は口縁部に横位の貝殻刺突文を施す。口唇部外端部にも同様の施文具で刻目を入れる。1312はやや大振りの貝殻刺突文を施文具として用いている。口縁部上位と頸部に横位の貝殻刺突文を施し、横位の貝殻刺突文間に斜位の貝殻刺突文を施している。内面に横位、斜位のケズリを行っている。1313・1314は貝殻刺突文を器面に対して直行するように当て、施文を行っている。口唇部の刻目も貝殻刺突文を用いて施している。いずれも内面はナデを行い、指おさえ痕が多数確認できる。

1315～1345は口縁部から頸部に貝殻刺突文と沈線を施文する一群である。一部横位の押しき状の貝殻刺突文と貝殻刺突文を施文するものも含む。

口縁部に貝殻刺突文を施し、さらに斜位の沈線で直線状の施文を行う一群と沈線等で曲線状の施文を行う一群、押しき状の貝殻刺突文や貝殻刺突文で横位の施文を行う一群、横位の貝殻刺突文と貝殻刺突文を施す一群、沈線等で縦位の施文を行う一群の4つに分類した。

1315～1333は口縁部に貝殻刺突文に加え、斜位の沈線で直線状の施文を行う一群である。口縁部形態と口縁部上位の横位の貝殻刺突文の有無で細分した。口縁部がわずかに屈曲する一群、口縁部がラップ状に外反し口縁部上位と頸部に横位の貝殻刺突文を施し、貝殻刺突文間に斜位の沈線もしくは細条線を施す一群、口縁部がラップ状に外反し、頸部付近に横位の貝殻刺突文を施し、同様の施文具で口唇部に刻目を入れる。さらに口縁部に斜位の沈線もしくは貝殻刺突文を施す一群の3つに分類した。

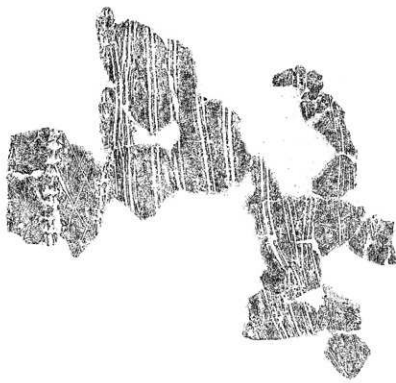
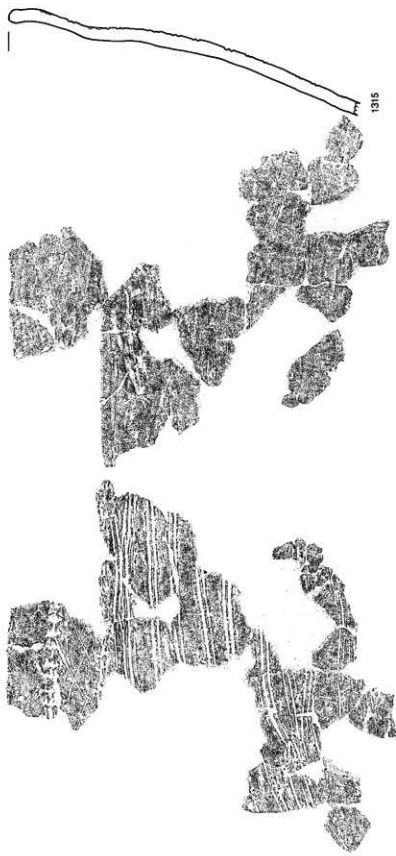
1315～1319は口縁部がわずかに屈曲する一群である。1315は口縁部から胴部下半まで復元することができる。口縁部中位、頸部に横位の貝殻刺突文を1段ずつ施す。その後、貝殻刺突文間に先端を細く加工した棒状工具で斜位の浅い沈線を斜格子状に施す。胴部は横位の貝殻

刺突文を施す。内面は横位、斜位のケズリを行った後、丁寧なナデを行う。1316は屈曲部、頸部と胴部の境付近に横位の貝殻刺突文を施す。同様の施文具で口唇部に刻目を入れる。口縁部は刻目と屈曲部の横位の貝殻刺突文の間に斜位の貝殻刺突文を施す。頸部には先端を細く加工した棒状工具で、斜位の浅い沈線を斜格子状に施す。胴部上半に横位の浅い沈線と貝殻刺突文の一部確認できる。胎土に金雲母を多く含む。1317は文様、調整、胎土等が1316と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1318は口縁部に横位の貝殻刺突文を2段施し、頸部に先端を細く加工した棒状工具を器面に深く押し当て、斜位の明瞭な沈線で斜格子状のモチーフを描く。内面は横位のケズリを行った後、丁寧なナデを行う。1319は屈曲部、頸部に横位の貝殻刺突文を1段ずつ施す。同様の施文具で口唇部外端部に刻目を入れる。刻目と屈曲部の貝殻刺突文の間に先端を細く加工した棒状工具による浅い沈線で菱形状のモチーフを描く。胴部は縦位の貝殻刺突文で器面の割付けを行った後、横位の貝殻刺突文を間隔を空けて施す。内面は横位のケズリを行った後、丁寧なナデを行う。

1320～1324は口縁部がラップ状に外反する。口縁部上位と頸部に横位の貝殻刺突文を施し、貝殻刺突文間に斜位の沈線もしくは細条線を施す一群である。1320は口縁部から胴部下半まで復元することができた。胴部中央で緩やかに膨らみ、底部に向けて曲線的にすぼまる器形である。口縁部上位に1段、頸部付近に2段、横位の貝殻刺突文を施す。同様の施文具で口唇部に刻目を入れる。横位の貝殻刺突文間に櫛歯状工具による細条線で鋸歯状のモチーフを描く。胴部は貝殻の腹縁部による条線を横位に間隔を空けて施文する。内面はケズリを行った後、ナデを行う。口縁部外面に煤状の炭化物が確認できる。頸部でわずかにくびれ、口縁部が外反する。胴部中央で膨らみ、底部に向けて直線的にすぼまる器形である。口縁部上位に貝殻刺突文を1段、頸部から胴部上半に押しき状の貝殻刺突文を3段施す。同様の施文具で口唇部の刻目を入れる。口縁部の貝殻刺突文間には、貝殻刺突文で菱形状のモチーフを描く。胴部中央から下半には、横位の貝殻刺突文を間隔を空けて施す。1322・1323は口縁部上位、頸部に横位の貝殻刺突文を施す。同様の施文具で口唇部に刻目を入れる。横位の貝殻刺突文間には先端を鋭く加工した棒状工具による明瞭な斜位の沈線で菱形状のモチーフを描く。いずれも2本1単位の沈線である。1322の口縁部に施される斜位の沈線は、右上がり施文が先である。1323はその逆である。1324は口縁部上位に1段、頸部付近に2段、横位の貝殻刺突文を施す。横位の貝殻刺突文間には、棒状工具による浅い沈線で斜格子のモチーフを描く。胴部は横位の貝殻刺突文を施す。



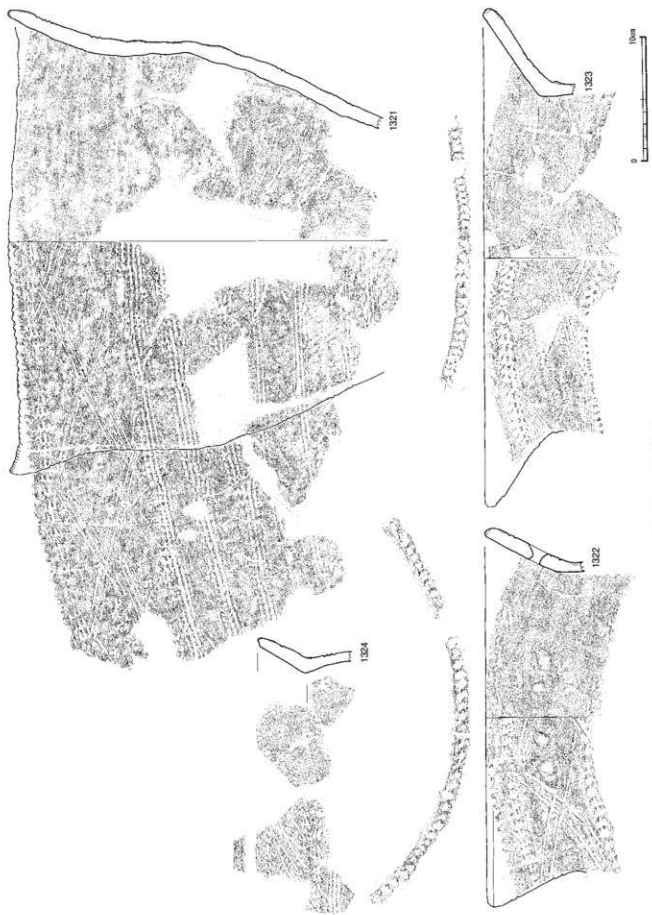
第 408 圖 瓦爾土器 (4)



第 409 圖 ⅩⅢ期土器 (5)



第 410 圖 瓦甎土器 (6)



第 411 圖 瓦器土器 (7)

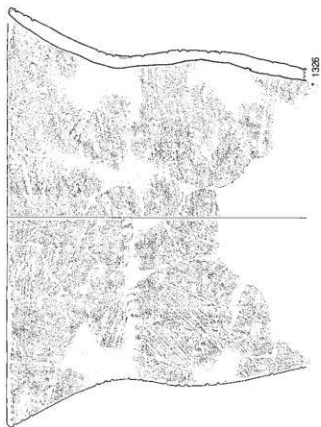
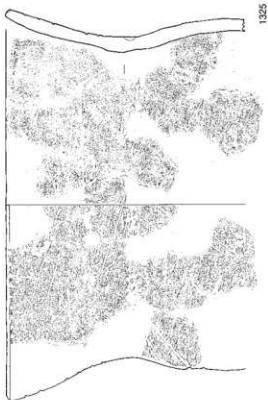
1325～1333は口縁部がラップ状に外反し、頸部付近に横位の貝殻刺突文を施し、同様の施文具で口唇部に刻目を入れる。さらに口縁部に斜位の沈線もしくは貝殻条痕文を施す一群である。棒状工具による横位の刺突を施すものも含む。また、口縁部文様が胴部及び釜ものも含む。1325は口縁部から胴部中央まで復元することができる。頸部に横位の貝殻刺突文を1段施す。口唇部外端部に同様の施文具で刻目を入れる。口縁部から胴部に棒状工具による浅い沈線で斜位の帯状の区画を描く。その後、区画内に斜位の浅い沈線を充填する。内面は横位のケズリを行った後、ナゲを行う。1326は口縁部から胴部下半まで復元することができる。文様、調整、胎土等が1325と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1327は口縁部から胴部下半まで復元することができる。4単位の波状口縁を呈すと考えられる。頸部付近から胴部上半にかけて横位の貝殻刺突文を3段施し、同様の施文具で口唇部に刻目を入れる。口縁部上位に横位の貝殻条痕文を施した後、斜位の貝殻条痕文で菱形状のモチーフを描く。胴部中央から下半にかけて貝殻条痕文を横位、斜位に施す。内面は指おさえ痕が多数確認できる。1328は口縁部から胴部中央付近まで復元することができた。頸部付近に棒状工具による横位の刺突を施す。口唇部に刻目を入れる。口縁部は先端を細く加工した棒状工具による明瞭な斜位の沈線で鋸歯状のモチーフを描く。胴部は横位の貝殻条痕文を施し、内外面に指おさえ痕が多数確認できる。内面に横位のケズリを行う。1329は文様、調整、胎土が1328と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1330は浅い沈線で鋸歯状のモチーフを描いたと考えられる。内面に横位のケズリを行う。1331・1332は口縁部下位から頸部付近に横位の貝殻刺突文を施す。1331は3段、1332は1段である。同一の施文具で口唇部に刻目を入れる。口縁部は浅い沈線で斜格子状のモチーフを描く。胴部に横位の貝殻条痕文を施す。いずれも胎土に金雲母を多く含む。内面に横位のケズリを行い、1331はケズリの後に丁寧なナゲを行う。1333はほぼ完形に復元することができた。胴部中央付近で緩やかに膨らみ、幅狭の底部に向けて曲線的にすばまる器形である。波状口縁を呈すると考えられるが、波頂部等の対称的な部分間の高さが一律でないため単位数が判然としない。上面観は口唇部、頸部内面、底部内面までかなり歪んだ楕円形状を呈し、底部内面から同心円状に広がっていない。外面の文様は口唇部の刻目を除いて、器面を縦位に分割した6割程度が棒状工具を用いた斜位の沈線を主体とした文様で、残り4割程度が刷毛状工具を用いた細条線を主体とした文様である。文様が転換する箇所にも明瞭な割付けの痕跡は確認できない。斜位の沈線を主体とした文様の部分は、頸部に棒状工具で3段の横位の刺突を施した後、口縁部に「×」状のモチー

フを描く。胴部は斜格子状のモチーフを描く。胴部下半の一部に横位の貝殻条痕状の施文を行う箇所があるが施文具が判然としない。細条線を主体とした文様の部分は、頸部に刺突は見られず、口縁部に「×」状のモチーフを描く。胴部は胴部中央付近まで、横位の細条線を間隔を空けて施文する。頸部付近で一部施文の幅が短く、短沈線状の箇所がある。胴部下半は無文である。内面は横位のケズリを行った後、ナゲを行う。

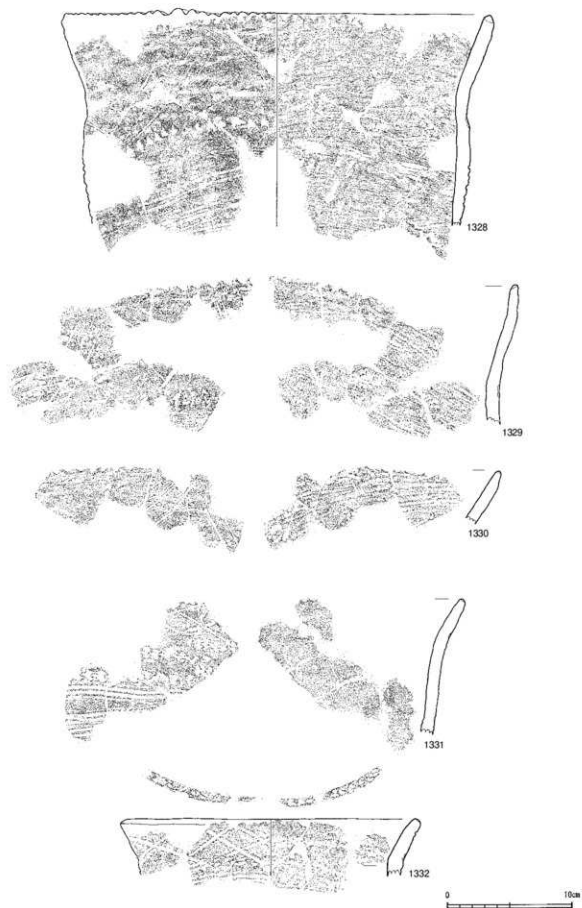
1334～1339は沈線または、貝殻条痕で曲線状の施文を行う一群である。頸部付近に横位の貝殻刺突文を施す一群と口縁部上位、頸部付近に横位の短沈線状の貝殻刺突文と横位の貝殻条痕を施し、口縁部を区画する一群とに細分できる。

1334～1337は頸部付近に横位の貝殻刺突文を施し、同様の施文具で口唇部に刻目を入れる。刻目と横位の貝殻刺突文間に沈線、もしくは貝殻条痕で曲線状のモチーフを描く一群である。1334はほぼ完形に復元することができる。頸部が緩やかにくびれ、胴部上半でやや膨らみ、底部に向けて曲線的にすばまる器形である。横位の貝殻刺突文を口縁部上位に1段、頸部から胴部上半に4段施す。その後、口縁部上位と頸部の貝殻刺突文間に、貝殻条痕文で縦長の楕円状、円弧状のモチーフを描く。胴部中央から胴部下半には、横位の貝殻条痕文を間隔を空けて施文する。底部円盤の外周上のやや内側に粘土紐を乗せ、胴部を輪積み成形したと考えられる。内面はナゲを行う。1335・1337は口縁部から胴部下半まで復元することができた。1335は頸部から胴部上半付近に横位の貝殻刺突文を間隔を空けて施した後、貝殻刺突文間に貝殻条痕文を施す。口縁部は口唇部の刻目と頸部に施された横位の貝殻刺突文間に、縦長の渦文状のモチーフを貝殻条痕文で描く。一部斜格子状のモチーフを描く箇所もある。胴部下半は、口縁部と同様に貝殻条痕文を格子状に施す。内面に丁寧なナゲを行う。1336は完形に復元することができた。口縁部中位、頸部に横位の貝殻刺突文を1段ずつ施す。その後、口縁部に沈線で円弧状のモチーフを描く。胴部上半は縦長の指頭状のモチーフを浅い沈線で描く。胴部下半には、横位の貝殻条痕文を施す。底部円盤の外周上のやや内側に粘土紐を乗せ、胴部を輪積み成形したと考えられる。1337は頸部が緩やかにくびれる器形である。頸部から胴部上半に横位の貝殻刺突文を施す。口縁部は貝殻条痕文で菱形状のモチーフを描き、その内部にも円形のモチーフを描く。口縁部上位に、縦長の円弧状のモチーフを描く箇所がある。内外面に指おさえ痕が多数確認できる。胎土に雲母を多く含む。

1338・1339は口縁部上位、頸部付近に横位の短沈線状の貝殻刺突文と横位の貝殻条痕を施し、口縁部を区画する一群である。施文具が器面を離れずに貝殻条痕文となる箇所もある。口縁部に貝殻条痕文で縦長の楕円形状、



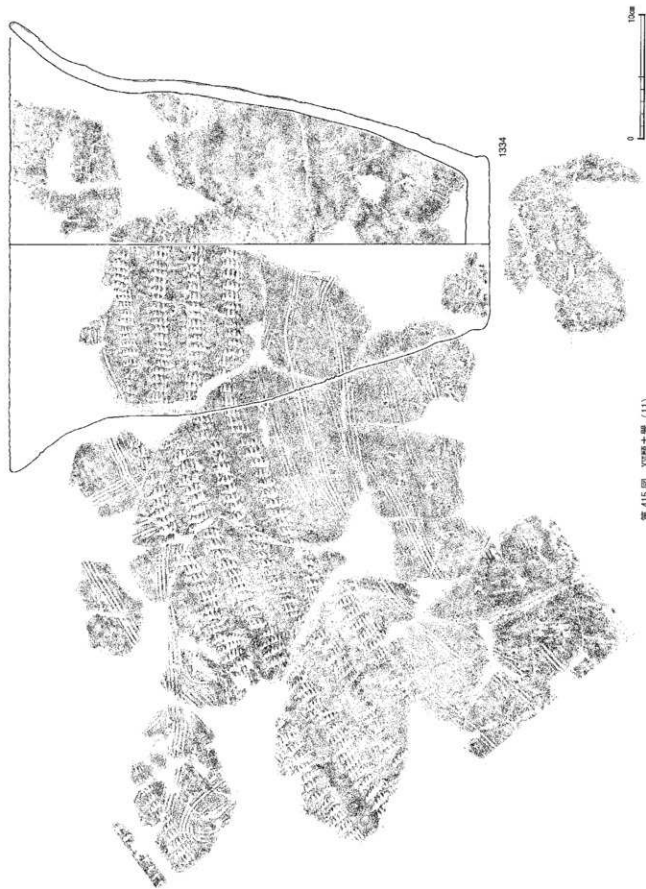
第 412 圖 瓦師土器 (8)



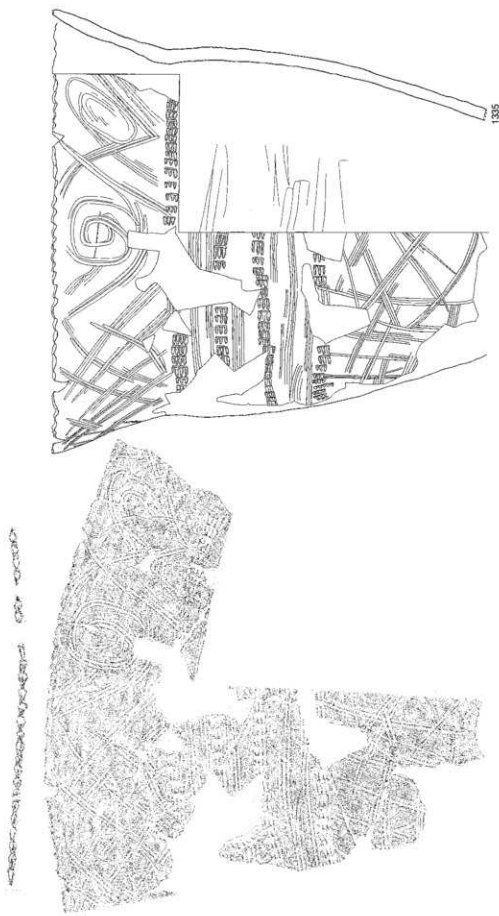
第 413 图 XV 型土器 (9)



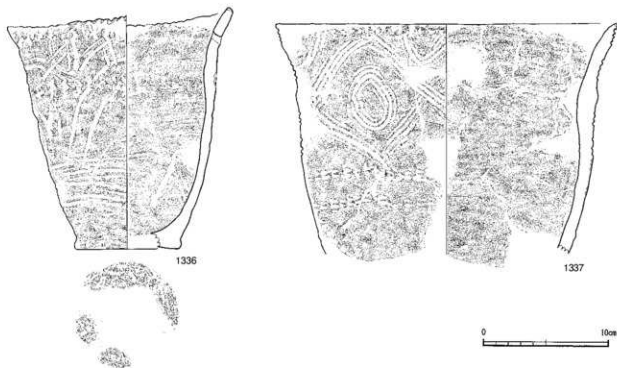
第 414 图 瓦爾士裝 (10)



第 415 圖 瓦城土城 (11)



第 416 図 瓦器土器 (12)



第417図 XV類土器(13)

斜格子状のモチーフを描く。1338は口縁部から胴部下
半まで復元することができる。4単位の波状口縁を呈す
ると考えられる。幅広の口縁部はやや外側に開き、頭部
でわずかにくびれ、底部に向けて曲線的にすぼまる器形
であると考えられる。口縁部上位に横位の短沈線状の貝
殻刺突文を1段施すが、一部貝殻条痕文の箇所もある。
頭部付近には間隔をやや空けて横位の貝殻条痕文を2条
施している。幅広の口縁部は、波頂部下に縦位の貝殻条
痕文で器面の割付けを行った後、貝殻条痕文で楕円形状
斜格子状のモチーフを描く。胴部は貝殻条痕文を斜格子
状に施す。内面はケズリを行った後、丁寧なナデを行う。
1339は1338と文様、調整、胎土等が類似するものの、
頭部は横位の短沈線状の貝殻刺突文で施される点が異な
る。

1340～1344は口縁部から頭部付近に、押し引き状の貝
殻刺突文や貝殻条痕文で横位の施文を主に施す一群であ
る。刺突に用いた同様の施文工具で口唇部に刻目を入れる。
1340・1341は口縁部から胴部下まで復元するこ
とができた。1340は口縁部がわずかに屈曲し、外反す
る器形である。口縁部上位のやや下がった位置から頭部
と胴部の境付近まで、横位の押し引き状の貝殻刺突文を4
段施す。貝殻刺突文は施文具を器面から離さずに施され
たと考えられる。その後、口縁部には押し引き状の貝殻刺
突文を斜位に施す。一部貝殻条痕文状を呈する箇所があ
る。胴部中央から下半は、貝殻条痕文を間隔を空けて横
位に施す。内面は横位のケズリを行った後、口縁部付近

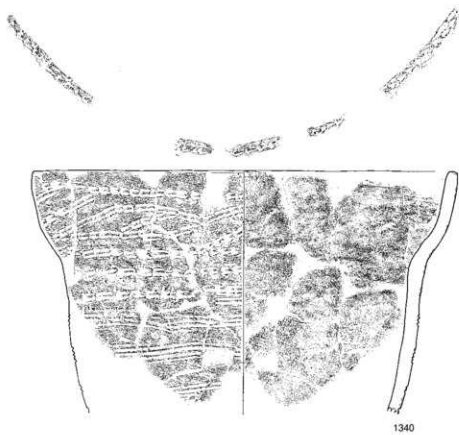
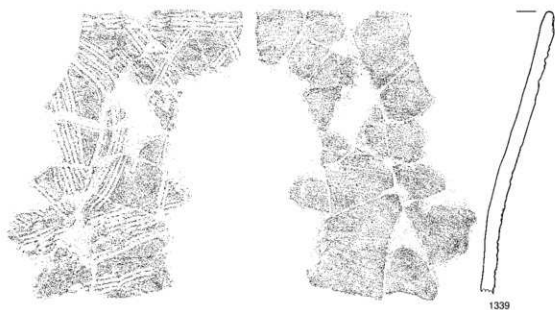
を中心に丁寧なナデを行う。1341は口縁部上位と頭部
にやや明瞭な押し引き状の横位の貝殻刺突文を1段ずつ施
した後、横位の貝殻刺突文間に斜位の貝殻条痕状の施文
で山形のモチーフを描く。胴部上半に横位の貝殻条痕文
を施した後、縦位の貝殻条痕文を施し器面の割付けを行
う。その後、横位、縦位の貝殻条痕文で区画された内部
に斜位の貝殻条痕文を施す。内面に指おさえ痕が確認で
きる。1342は1341と同様の施文を行う。焼成後に外面
から穿孔したと考えられる補修孔が1か所確認できる。
1343・1344は口縁部に横位の押し引き状の貝殻刺突文を
施す。斜位の貝殻条痕状の施文は見られないが、押しき
り状の貝殻刺突文を施すことからここに含めた。

1345は口縁部に横位の貝殻刺突文と貝殻条痕文を施
す。口縁部から胴部上半付近まで復元することができた。
口縁部から胴部まで貝殻条痕文を間隔を空けて横位に施
した後、口縁部には貝殻条痕文間に横位の貝殻刺突文を
2段施す。口唇部にも同様の施文工具で刻目を入れる。内
面は横位のケズリを行った後、丁寧なナデを行う。

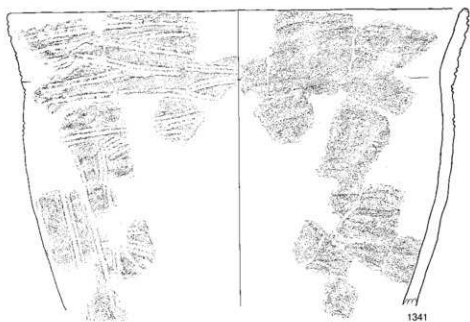
1346～1351は頭部付近に横位の貝殻刺突文を施し、
同様の施文具で口唇部に刻目を入れる。刻目と横位の貝
殻刺突文間に沈線、貝殻刺突、細条線を縦位、もしくは
やや斜位に施文する一群である。頭部に貝殻刺突文を施
さないものも含む。1346は完形に復元することができた。
頭部でわずかにくびれ胴部上半で膨らみ、底部にむけて
曲線状にすぼまる器形である。頭部から胴部上半に横位
の貝殻刺突文を間隔を空けて施す。その後、口縁部に棒



第 418 図 天竺土器 (14)



第419图 XV类土器 (15)



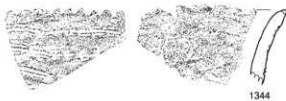
1341



1342



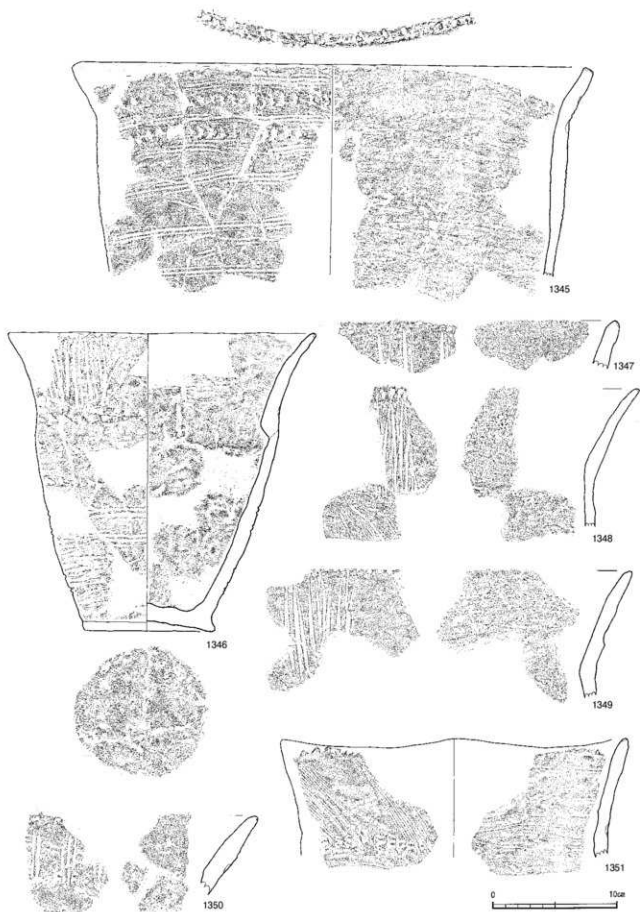
1343



1344



第420图 XV类土器 (16)



第421图 XV類土器 (17)

状工具による浅い縦位の沈線を施す。胴部中央から下半には横位の貝殻条痕文を施す。内外面に指おさえ痕が多数確認できる。胴部は底部円盤の外周上に粘土紐を乗せ、輪積み成形したと考えられる。底面付近には底部から胴部を立ち上げる際の成形痕が確認できる。底部は底部外面から指頭で押し出すようにして、上り底状の底部を成形したと考えられる。内面は反外が始まる頸部付近に段状の内傾接合の痕跡が確認できる。内面はナデを行っている。1349は口縁部に棒状工具による浅い縦位の沈線を施し、口唇部に貝殻の腹縁部による刻目を入れる。内面にはケズリを行う。1348は胴部上半に斜位の浅い沈線を施す。文様、調整、胎土等が1349と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1350は口縁部下に貝殻刺突文を横位に2段施し、縦位の貝殻条痕文を間隔を空けて施す。一部に横位に施す箇所がある。1347は口唇部外端部に貝殻腹縁部による刻目を入れる。口縁部には棒状工具による明瞭な縦位の沈線を施す。内面は丁寧なナデを行う。1351は口縁部に刷毛状工具による斜位の細条線を間隔を空けて施す。内面は横位のケズリを行った後、ナデを行う。

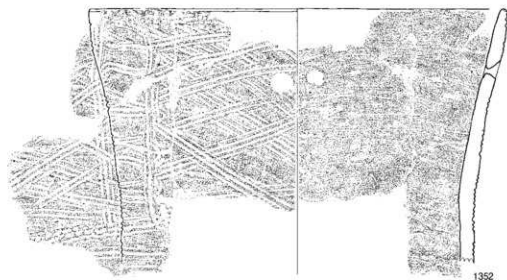
1352～1360は口縁部がわずかに外傾する一群である。1352～1356は口縁部上位に横位の貝殻刺突文を施した後、貝殻条痕文もしくは沈線を施す。1352は口縁部上位と外傾が始まる頸部付近に、横位の押し引き状の貝殻刺突文をそれぞれ1段ずつ施す。その後、口縁部に斜位の貝殻条痕文を斜格子状に施す。一部縦位に貝殻条痕文を施す箇所があるが、斜位の貝殻条痕文を施す順序は同様でない。胴部は横位の貝殻条痕文を施す。口縁部には焼成後に外面から穿孔した補修孔が1か所確認できる。内面には横方向の細い繊維質の擦痕が多く、丁寧なナデを行う。内外面に煤状の炭化物が付着している。1353の内面にも1352と同様の擦痕が確認できる。1355は口縁部上位に横位の押し引き状の貝殻刺突文を1段施す。同様の施文具で口唇部に刻目を入れる。口縁部は斜位の貝殻条痕文を斜格子状に施す。外面に煤状の炭化物が多く付着している。内面には指おさえ痕が確認でき、丁寧なナデを行う。1354は波状口縁を呈すると考えられる。口縁部上位に貝殻刺突文を1段施した後、棒状工具による斜位の沈線で山形のモチーフを描く。内面にへら状の工具痕が確認でき、丁寧なナデを行う。胎土に金雲母を含む。1356は4単位の波状口縁を呈すると考えられる。口縁部上位に横位の押し引き状の貝殻刺突文を1段施す。同様の施文具で口唇部に刻目を入れる。その後、口縁部に縦位の縦位の貝殻条痕文を施す。1357・1358は口縁部から頸部に横位の貝殻刺突文を施した後、口縁部上位に斜位の貝殻刺突文を施す。口唇部には刻目を入れる。胴部は横位の貝殻条痕文を施したと考えられる。1357は口縁部から胴部上半付近まで復元することができる。外面

には横方向のへら状工具痕が一部確認でき、内面は横方向の貝殻条痕調整後、ナデを行う。1358は文様、調整、胎土が1357と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1359は波状口縁を呈すると考えられる。口縁部に先端を細く加工した棒状工具で横位、斜位の沈線を施す。波頂部付近は沈線で「V」字状のモチーフを描く。頸部付近は横位の沈線が確認できる。口唇部にへら状工具による斜位の刻目を入れる。内面は横位のケズリを行った後、ナデを行う。1360は口縁部がやや反外する器形である。口縁部に幅の狭いへら状工具による浅い沈線で、逆「U」字状のモチーフを描く。沈線には細い繊維状の擦痕が確認できる。口唇部に同様の施文具で明瞭な刻目を入れる。内面には内傾接合の痕跡が確認できる。口縁部内面に横方向の繊維状の白い擦痕が確認でき、丁寧にナデを行っている。胎土に白色粒子を多く含む。外面に煤状の炭化物が確認できる。

1361～1368は口縁部が反外もしくは直口気味に立ち上がる円筒形状の器形を呈する一群である。

1361～1365は口縁部上位と口縁部下位から胴部下半までの2帯に文様構成が分かれる一群である。口縁部上位に貝殻刺突文を施す。1361・1362は口縁部から胴部下半まで復元することができた。1361は口縁部付近はレモン形、胴部は円筒形の器形である。口縁部から胴部上半にかけて貝殻刺突文を横位に5段施した後、貝殻刺突文間に横位の貝殻条痕文を施す。胴部下半には櫛歯状工具による細条線を斜位に施す。内外面に指おさえ痕を多数確認できる。内面に丁寧なナデを行う。1362は口縁部上位に貝殻刺突文を1段施した後、胴部下半まで横位の貝殻条痕文を施す。胴部下半に、斜位の細い沈線状の擦痕が一部確認できる。口唇部、内面に丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1363は口縁部上位に押し引き状の横位の貝殻刺突文を1段施す。その後、口唇部外端部や貝殻刺突文より下に横位、斜位の貝殻条痕文を施す。口縁部上位の貝殻刺突文は、下端が波状を呈する。口唇部内面に内傾接合の痕跡が確認できる。口縁部内面を中心に指おさえ痕が確認できる。横位のケズリを行った後、ナデを行う。1364は文様、調整、胎土が1365に類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1365は口縁部上位に横位の押し引き状の貝殻刺突文を施す。1362等と同様に貝殻刺突文の下端は波状である。貝殻刺突文の両端に接するように口唇部外端部付近と、口縁部上位に横位の貝殻条痕文を施し、それより下は、やや間隔を空けて横位、斜位の貝殻条痕文を施す。口縁部内面を中心に指おさえ痕が確認できる。横位、斜位のケズリを行った後、丁寧なナデを行う。

1366～1368は口縁部から胴部下半まで同一の文様構成の一群である。貝殻条痕文もしくは沈線を斜格子状に施す。1366は完全に復元することができた。貝殻条痕



1352



1353



1354



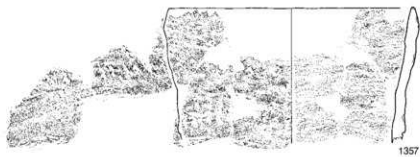
1355



1356



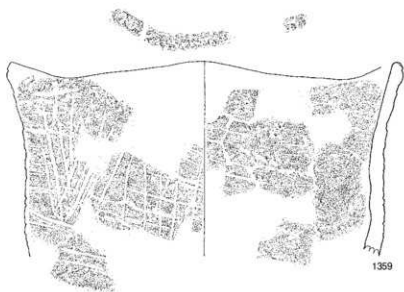
第422图 XV类土器 (18)



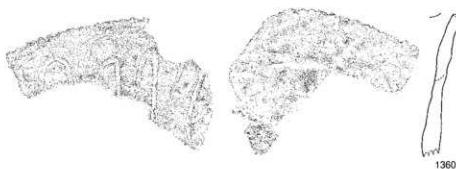
1357



1358



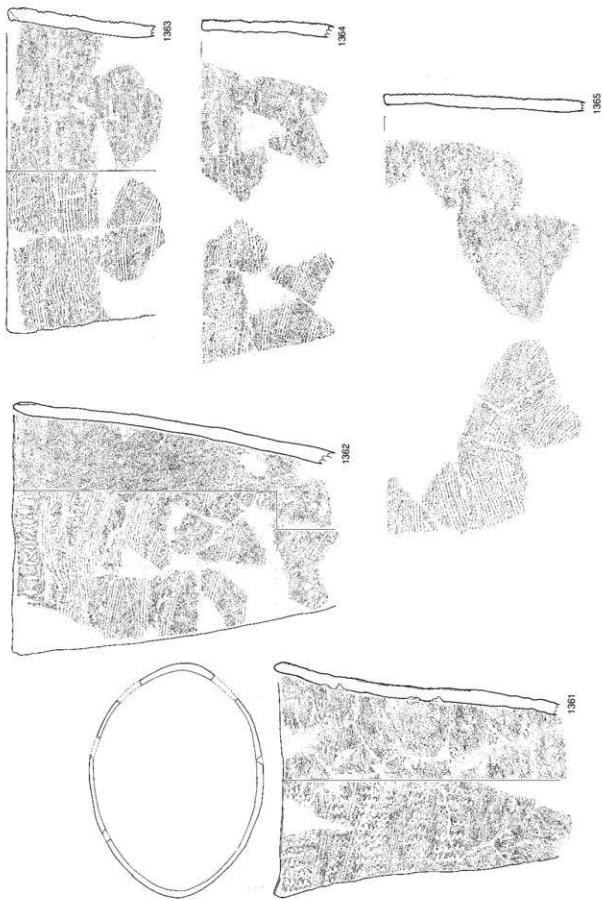
1359



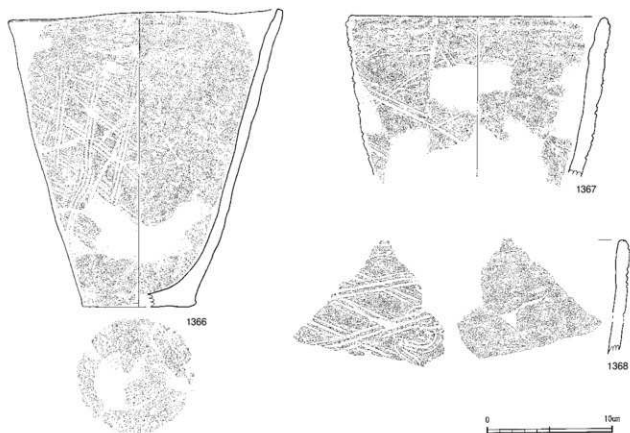
1360



第 423 图 XV 类土器 (19)



第 424 图 双湖土器 (20)



第 425 図 XV期土器 (21)

文を斜格子状に施すが、一部施文が乱れ、斜位格子状を呈しない箇所もある。底部円盤の外周上のやや内側に粘土紐を乗せ、胴部を輪積み成形したと考えられる。1367は口縁部上位より先端を細く加工した棒状工具による沈線を斜格子状に施している。多くが2本1単位で施文されている。内外面ともに指おさえ痕が多数確認でき、丁寧なナデを行う。内面に横方向のへら状工具による調整痕が確認できる。1368は貝殻条痕文を横長の斜格子状に施す。口唇部外端部に煤状の炭化物が確認できる。内面に横方向の繊維状の擦痕が多数確認できる。丁寧なナデを行う。胎土に白色粒子を多く含む。

1369～1397は胴部である。

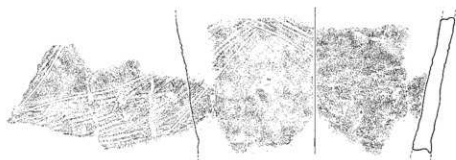
1369は胴部下半付近である。貝殻条痕文を斜位に幾何学状に施文した後、貝殻条痕文の両端を先端を細く加工した棒状工具による浅い沈線で区画する。外面には指おさえ痕が多数確認できる。内面は横位、斜位のケズリを行い、その後ナデを行う。胎土に小礫、白色粒子、金雲母を多く含む。

1370～1372は頸部付近に横位の貝殻刺突文を施し、胴部上半に斜位の貝殻条痕文を施す一群である。1370は頸部から胴部上半付近である。頸部に押しき状の横位

の貝殻条痕文を施した後、胴部に斜位の貝殻条痕文を施す。一部沈線状の施文を行った箇所は確認できるものの、1369のような沈線による明確な区画は見られない。内面に内縁接合の痕跡や指おさえ痕が確認できる。胎土に金雲母を多く含む。1371は口縁部下位から胴部下半付近まで復元することができた。比較的大型の器形である。頸部付近に横位の貝殻刺突文を3段施した後、口縁部に櫛歯状の工具で細条線を縦位に間隔を空けて施す。胴部は横位の貝殻条痕文を施した後、胴部上半に貝殻条痕文を斜位に縦歯状に施す。内面にケズリを行う。

1372は口縁部下位から胴部下半付近まで復元することができた。頸部から胴部上半付近に横位の貝殻刺突文を2段施した後、口縁部に斜位の貝殻条痕文を施す。胴部は斜位の貝殻条痕文で菱形状のモチーフを描いたと考えられる。1373は1372と接合する胴部片である。外面に葉脈状の圧痕が一部確認できる。

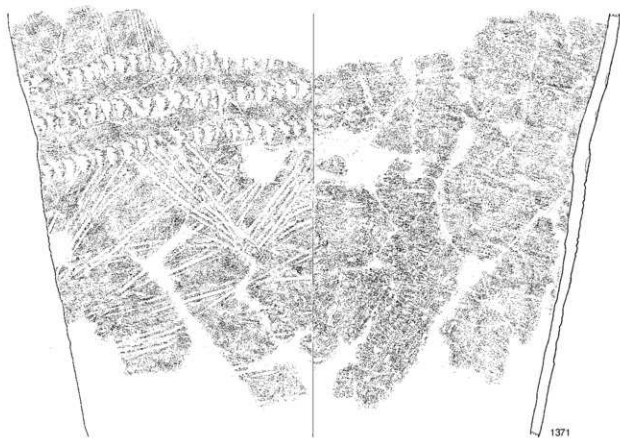
1374～1383は横位の貝殻刺突文と貝殻条痕文を施す一群である。1374は口縁部下位から胴部下半付近まで復元することができた。口縁部に斜位の貝殻条痕文を施す。頸部から胴部上半に横位の押しき状の貝殻刺突文を3段施す。胴部下半に横位の貝殻条痕文を間隔を空けて



1369



1370



1371



第 426 图 XV 类土器 (22)

施す。内面に横位、斜位のケズリを行い、口縁部付近に丁寧なナデを行う。胎土に小礫を多く含む。1375は頸部付近から胴部上半付近と考えられる。横位の押しき状の貝殻刺突文を施すが、下段の貝殻刺突文は一部連続刺突を止め、貝殻条痕状に施す箇所がある。やや間隔を空けて横位の貝殻条痕文を施す。1376は横位の貝殻条痕文を間隔を空けて施文した後、貝殻条痕文間に短沈線状の貝殻刺突文を斜位に施す。内面に横位のケズリを行う。胎土に小礫を多く含む。1377は胴部中央から下半付近まで復元することができる。横位の貝殻刺突文を間隔を空けて施文した後、貝殻刺突文間に横位の貝殻条痕文を施す。下位付近で一部曲線状のモチーフを描く箇所がある。内面は丁寧なナデを行う。1378は胴部下半付近である。横位の押しき状の貝殻刺突文を間隔を空けて施した後、横位の浅い貝殻条痕文を施す。内面に横方向の繊維状の細い擦痕が確認できる。丁寧なナデを行う。1379・1380は胴部中央付近である。横位の押しき状の貝殻刺突文を大きく間隔を空けて施す。その内部に横位、斜位の貝殻条痕文を施す。内面に指おさえ痕が多数確認できる。横位のケズリを行った後、ナデを行う。1380は胎土に金雲母を多く含む。1381～1383は上位に横位の貝殻刺突文を施し、下位に横位の貝殻条痕文を施す。1381は内面にナデを行う。胎土に白色粒子を多く含む。1382は内面に横位のケズリを行った後、ナデを行う。胎土に金雲母を多く含む。1383は円筒形状の器形である。内面に指おさえ痕が確認できる。ナデを行っている。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。

1384～1386は横位、縦位の貝殻条痕文、もしくは沈線文を施す一群である。1384は胴部中央から底部に近い胴部下半付近と考えられる。底部に向けて曲線的にすばまっている。横位、斜位の貝殻条痕文を施した後、やや間隔の空いた中央付近の貝殻条痕文間に縦位の沈線を施す。胎土に金雲母を多く含む。1385は頸部付近から胴部下半まで復元することができる。頸部から胴部上半に横位の貝殻条痕文を施した後、胴部中央から下半に縦位の貝殻条痕文を施す。内面に指おさえ痕が多数確認できる。横位のケズリを行った後、ナデを行う。胎土に金雲母を多く含む。1386は底部に近い胴部下半付近と考えられる。縦位の貝殻条痕文を施し、器面の割付けを行った後、横位、斜位の貝殻条痕文を施す。内面に横方向の繊維状の細い擦痕や指おさえ痕が確認できる。ナデを行っている。胎土に金雲母を多く含む。

1387～1395は横位の貝殻条痕文を施す一群である。一部斜位に施すものもある。条痕状の沈線を施すものも含む。1387～1389は内面にナデを行う。胎土に金雲母を多く含む。1390・1388は文様、調整、胎土等が類似するため、同一個体の可能性が高いと考えられる。1390・1391は横位、斜位に貝殻条痕文を施す。外面に指おさえ

痕が多数確認できる。1392は内面にケズリを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1393・1394は半載竹管状の工具で沈線を横位、斜位に施す。1393は内面に横方向のヘラ状の工具痕が確認できる。ケズリを行った後、ナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1394は底面境付近と考えられる。内面に横方向のヘラ状の工具痕や指おさえ痕が確認できる。胎土に小礫を多く含む。

1395は胴部上半から底部に近い胴部下半付近まで復元することができる。外面に縦方向の繊維状の擦痕が多数確認できる。横位の貝殻条痕文は、繊維状の擦痕の後に施されている。内面に斜位のケズリを行う。

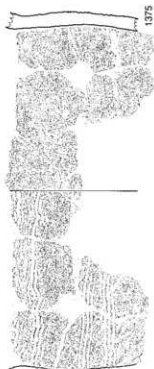
1396・1397は横位、斜位の押しき状の貝殻刺突文を施す一群である。1396は頸部から胴部上半付近と考えられる。頸部付近に横位の押しき状の貝殻刺突文を施した後、胴部上半に横位の押しき状の貝殻刺突文を施す。外面にヘラ状工具による調整痕が確認できる。内面は横位のケズリを行う。胎土に小礫を多く含む。1397は横位の横位の押しき状の貝殻刺突文を施した後、斜位の押しき状の貝殻刺突文部分的に施す。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。

1398～1410は底部である。

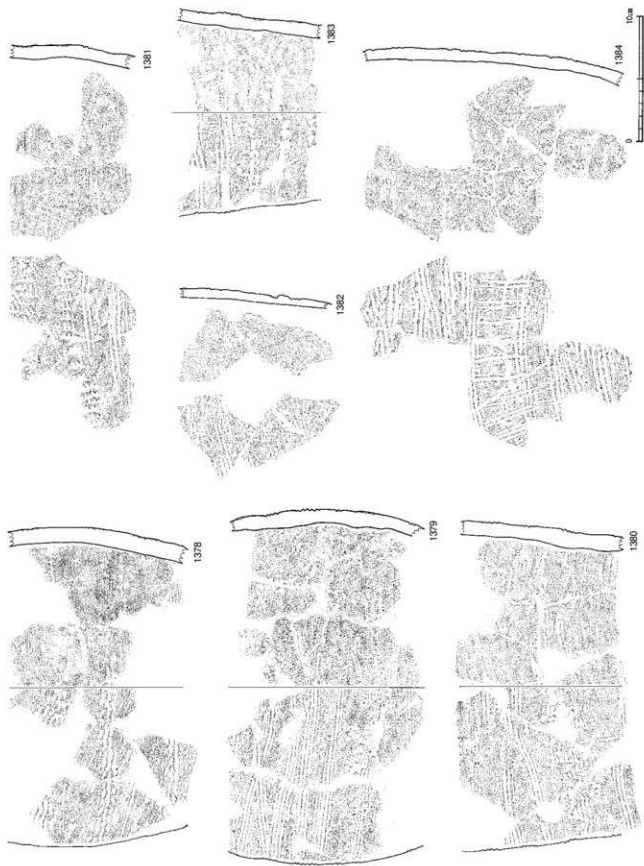
1398～1407は横位の貝殻条痕文を施す一群である。

1398～1403は底面境付近まで横位の貝殻条痕文を施す一群である。1398は胴部中央付近から底部まで復元することができた。底部に向けて曲線的にすばまる器形である。横位の貝殻条痕文を間隔を空けて底面境付近まで施す。上位に一部斜位の貝殻条痕文を施す箇所がある。内面は横位、斜位のケズリを行った後、ナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1399は底部円盤の外周部分に粘土紐を巻き付け、胴部を輪積み成形したと考えられる。胎土に小礫、金雲母を多く含む。1400は一部斜位に貝殻条痕文を施す箇所もある。胴部は底部円盤の外周上に粘土紐を乗せ、輪積み成形したと考えられる。内面は横位のケズリを行った後、非常に丁寧なナデを行う。胎土に金雲母を多く含む。1401は浅い横位の貝殻条痕文を施す。底部円盤の外周部分に粘土紐を巻き付け高台状に成形し、上げ底状の底部を作り出している。内面はケズリを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1402は内外面に指おさえ痕が確認できる。底部円盤の外周上よりやや内側に粘土紐を乗せ胴部を輪積み成形したと考えられる。内面に縦位のケズリを行う。1403は器壁厚が非常に薄い。底部外面より指頭で押し出すようにして上げ底状の底部を成形している。内面にケズリを行う。胎土に白色粒子を多く含む。

1404～1407は横位の貝殻条痕文を施し、底面境付近が無文の一群である。1404は胴部中央付近から底部まで復元することができる。横位の貝殻条痕文を施し、底面境付近は無文で、丁寧なナデを行う。



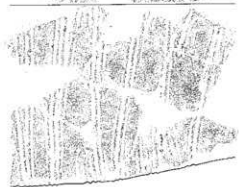
第 427 图 双湖土器 (23)



第 428 图 双湖土器 (24)



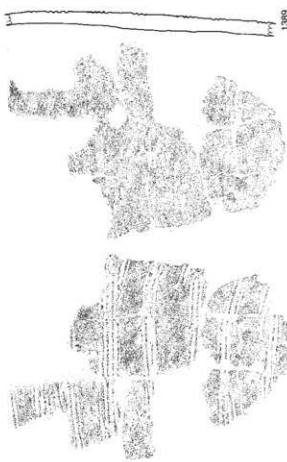
1385



1388



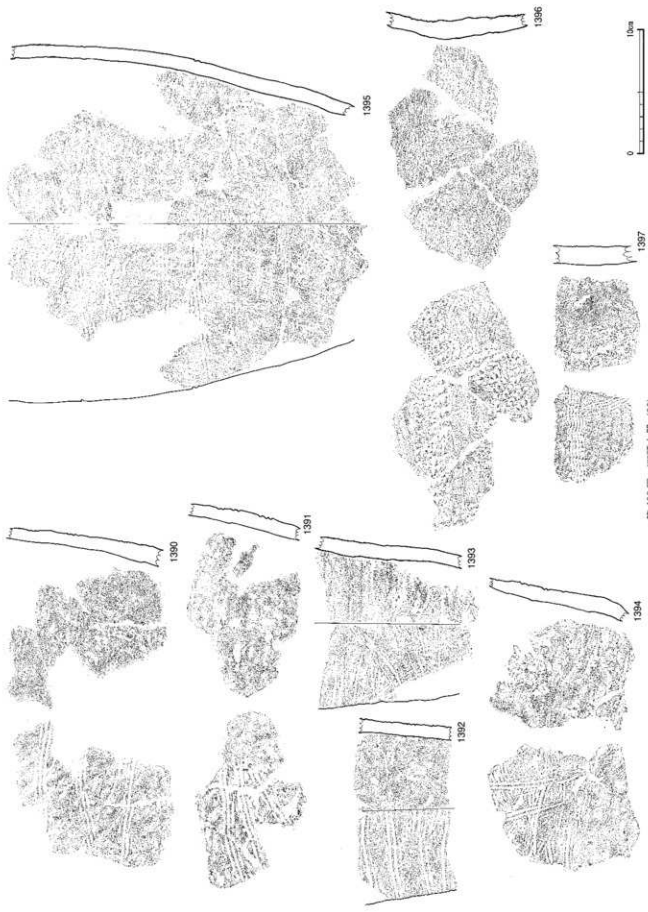
1386



1389



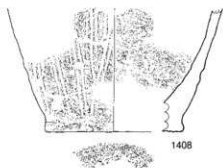
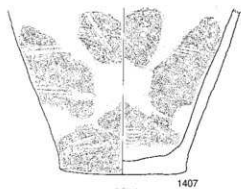
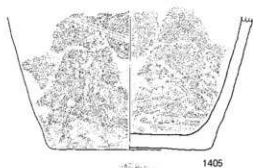
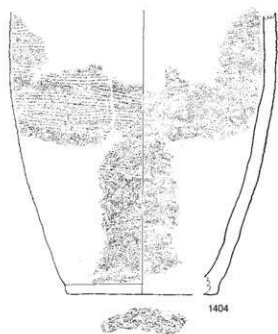
第 429 图 双湖土器 (25)



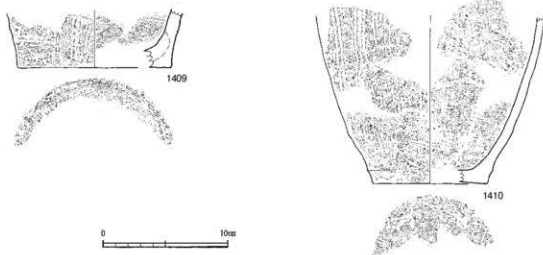
第 430 圖 XIV 世紀土器 (26)



第 431 图 XV 类土器 (27)



第 432 图 XV 类土器 (28)



第 433 図 Xii 類土器 (29)

上のやや内側に粘土紐を乗せ、胴部を輪積み成形したと考えられる。内外面に指おさえ痕が多数確認できる。内面に横方向の繊維状の細い擦痕が見られ、丁寧なナデを行う。1405 は底面境よりやや高い位置で施文が終わり、多数の指おさえ痕が確認できる。底部円盤の外周部分に粘土紐を巻き付け、胴部を輪積み成形したと考えられる。内面に横位、斜位のケズリを行った後、ナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1406 は胴部下半から底部まで復元することができる。底部円盤の外周上に粘土紐を乗せ、胴部を輪積み成形したと考えられる。外面の底面境付近にケズリ痕が確認できる。内面は横位のケズリを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1407 は底部、胴部共に指おさえ痕が多数確認できる。内外面に丁寧なナデを行う。胎土に白色粒子を多く含む。

1408 ～ 1410 は縦位の貝殻条痕文もしくは沈線文を施す一群である。1408 は胴部下半から底部まで復元することができる。縦位、斜位の貝殻条痕文を底面境付近まで施す。底部円盤の外周上に粘土紐を乗せ、胴部を輪積み成形したと考えられる。内面は丁寧なナデを行っている。胎土に小礫、金雲母を多く含む。1409 は底面境まで縦位の沈線を施し器面の割付けを行った後、横位の貝殻条痕文を施している。胎土に白色粒子、金雲母を多く含む。1410 は胴部下半から底部まで復元することができた。縦位の浅い貝殻条痕文を施した後、横位の浅い貝殻条痕文を施す。底面境付近に非常に丁寧なナデを行う。器壁厚さは 0.5 cm 程度でやや薄い。底部円盤の外周上のやや内側に粘土紐を乗せ、胴部を輪積み成形したと考えられる。内面は横位のケズリを行い、丁寧なナデを行う。胎土に白色粒子を多く含む。

なお、1321 に付着していた炭化物を年代測定した結果、7959～7840 cal BP の値が得られた。

(17) Xii 類土器 (第 435 ～ 439 図 1411 ～ 1428)

Xii 土器は外面に貝殻条痕文を施文後、刻目突帯を施す一群である。口縁部が外反し、底部にむけて曲線的にすぼまる器形である。

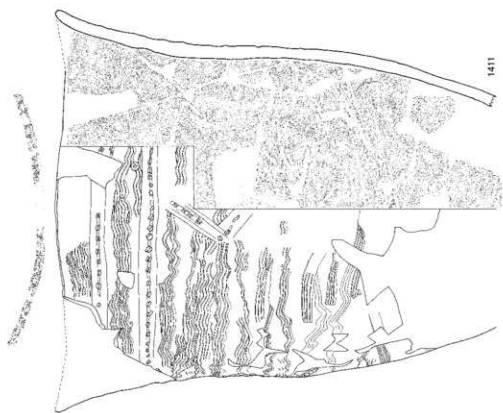
文様には刻目突帯文、瘤状突起、貝殻条痕文、沈線文等がある。

1411 ～ 1417 は口縁部である。1411 ～ 1413、1416、1417 は、口縁部から胴部下半まで復元することができた。

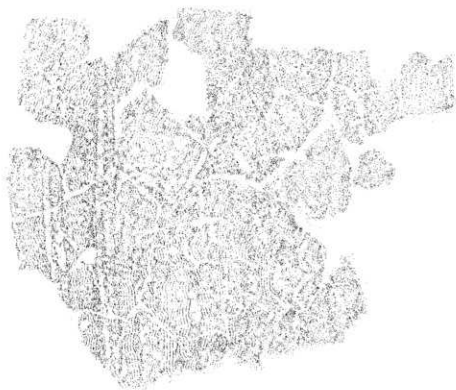
1411 は波状口縁を呈すると考えられる。口唇部を舌状に成形し、浅い刻目を入れる。口縁部から胴部中央付近まで波状の貝殻条痕文を横位に施す。胴部下半は直線状の貝殻条痕文を横位に間隔を空けて施す。口縁部に幅 0.5 cm 程度のヘラ状工具を器面に強く押し当て、横位の微隆起線文を 2 段作り出す。その後、貝殻腹縁部を器面に対して縦位に当て、微隆起線文に刻目を入れる。内面は横位、斜位のヘラ状工具痕が多く確認できる。口縁部付近を中心に丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1412 は 4 単位の波状口縁を呈すると考えられる。外面に横位、斜位の貝殻条痕文を施す。口縁部から胴部上半にかけて波状に施文する箇所がある。その後、断面が三角形を呈する微隆線を口縁部に横位 3 段、胴部には縦位に施す。胴部の微隆線は波頂部の延長線上付近に 2 列施している。微隆線の両端に棒状工具で沈線を施す。胴部に同様の施文具による沈線を縦位、斜位に施す。その後、貝殻腹縁部で微隆線上に刻目を入れる。口唇部は舌状に成形した箇所と、平坦面をやや外傾するように成形した箇所がある。舌状に成形した箇所は貝殻腹縁部

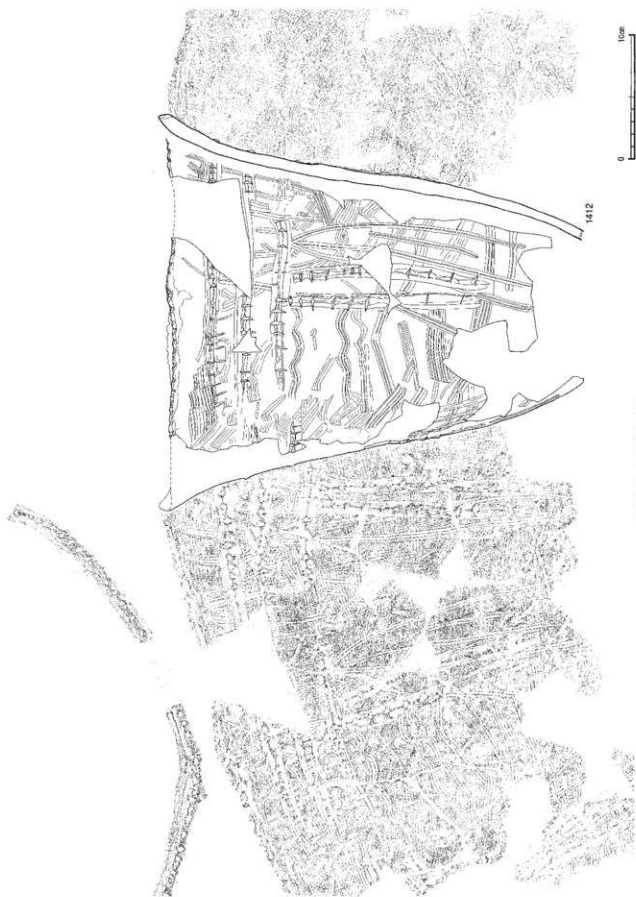


第 434 図 XIV期土器出土分布図

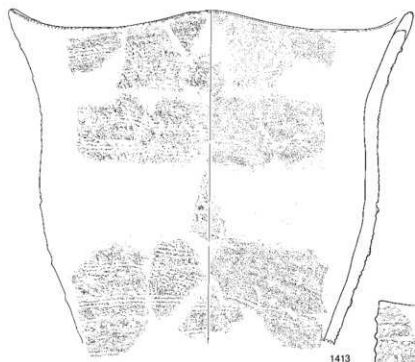


第 435 图 西周土器 (1)

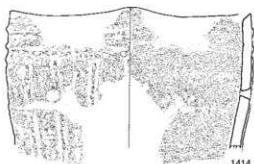




第 436 図 西鎮土器 (2)



1413



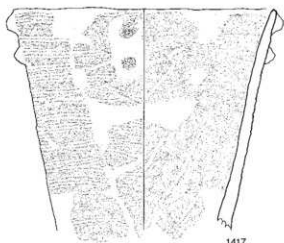
1414



1415



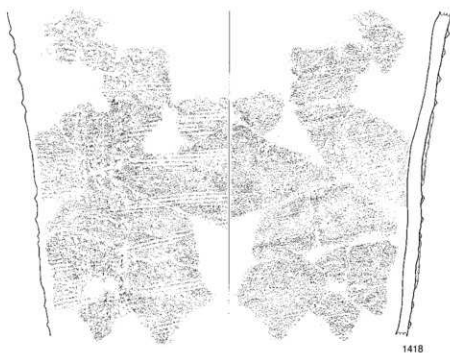
1416



1417



第 437 图 双耳土器 (3)



1418



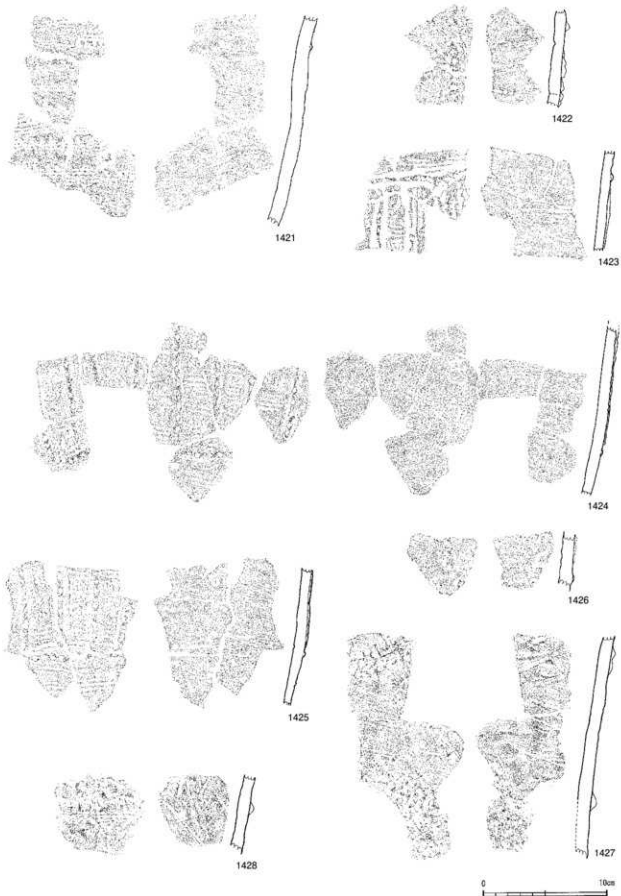
1419



1420



第 438 図 ⅩⅧ類土器 (4)



第 439 图 Xinzhong 土器 (5)

を口唇部の上方より押し当て刻目を施している。一方、平坦面がやや外傾する箇所は、口唇部外端部に刻目を入れている。内面は繊維状の擦痕が多く確認できる。丁寧にナデを行っている。1413は波状口縁を呈すると考えられる。口縁部から胴部中央付近まで押し引き状の横位の貝殻刺突文を施し、胴部下半は横位の貝殻条痕文を施す。口縁部、胴部中央付近に横位の刻目突帯を部分的に施し、両端にヘラ状工具による沈線を施す。口唇部外端にも貝殻縁部による刻目を入れる。その下の口縁部上位にヘラ状工具によるナデを行う。内面は横方向の繊維状の擦痕が確認できる。丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子、角閃石を含む。1414は4単位の波状口縁を呈すると考えられる。外面は横位の貝殻条痕文を施した後、口縁部に横位に2段、胴部は縦位に微隆線状の突帯を貼り付ける。その後、縦位の突帯の両端をヘラ状工具で丁寧なナデを行う。口唇部は平坦面が内傾するように成形する。突帯上と口唇部外端部にヘラ状工具で明瞭な刻目を施す。内面は横方向の繊維状の細い擦痕が一部確認できる。丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を含む。1415は波状口縁を呈すると考えられる。斜位の貝殻条痕文を櫛歯状に施し、太めの刻目突帯を波頂部より縦位に施す。刻目は逆「C」字状に加工した施文具で行っている。同様の施文具で口唇部に刻目を施す。内面に非常に細い繊維状の擦痕が確認できる。口縁部内面付近に非常に丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1416は口縁部が直線的に外反する円筒形状の器形を呈すると考えられる。口縁部に縦位に瘤状突起を貼り付け、その後横位の貝殻条痕文を全面に施す。内面は繊維状の細い擦痕、棒状工具による調整痕が確認できる。丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1417は文様、調整、胎土が1416と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。

1418～1428は胴部である。1418は口唇部は残存していないもの、口縁部から胴部中央付近と考えられる。横位の貝殻条痕文を間隔を空けて施した後、口縁部上位に微隆線状の横位の刻目突帯を2段施す。刻目は貝殻縁部を器面に縦位に当てて施す。口縁部下位から胴部には、口縁部上位と同様の長さ4.0～5.3cmの刻目突帯を横位に2段、縦位に3列の順で交互に施す。内面に横方向の細い繊維状の擦痕が確認できる。丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子、角閃石を多く含む。1419は口縁部付近と考えられるが、口唇部は残存していない。擬口縁部の接合痕が確認できる。外面は貝殻条痕文や押し引き状の貝殻刺突文を施し、丁寧に文様をナデ消した箇所がある。横位に3段の微隆線状の刻目突帯を施す。1420は口縁部下位から胴部中央付近と考えられる。口縁部の横位の微隆線状の刻目突帯を施した後、胴部に縦位3列、横位3段の順で微隆線状の刻目突帯を施す。文様、調整、

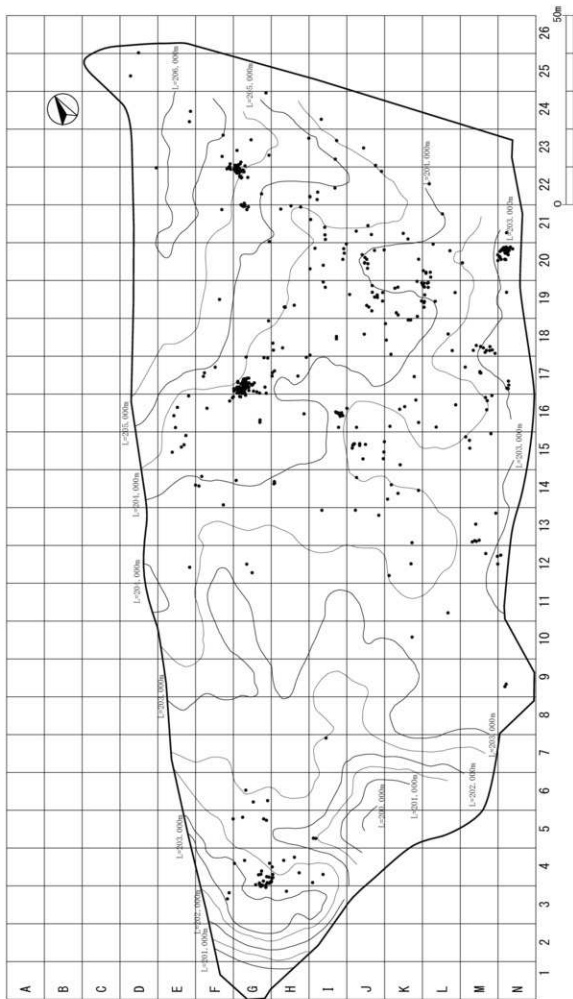
胎土が1419と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1421は押し引き状の横位の貝殻刺突文を施す。その後、刻目突帯を部分的に施し両端にヘラ状工具による沈線を施す。内面は一部横方向の繊維状の擦痕が確認できる。丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子、角閃石を含む。文様、調整、胎土が1413と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1422は外面に波状の貝殻条痕文を横位に施した後、丁寧なナデを行う。その後、縦位、横位の刻目突帯を施す。内面に内傾接合の痕跡が確認でき、ナデを行っている。胎土に白色粒子を多く含む。1423～1425は文様、調整、胎土等が1414と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1423は外面に横位の貝殻条痕文を施した後、横位、縦位の微隆線状刻目突帯を施す。縦位の刻目突帯の両端はヘラ状工具でナデを行う。内面に丁寧なナデを行う。1424は胴部下半付近と考えられる。縦位、横位の刻目突帯を施すが、1423と同様に縦位の刻目突帯の両端のみヘラ状工具によるナデが施されている。縦位の刻目突帯間に貝殻縁部を器面に對して直行するように当てて施した貝殻刺突文を部分的に確認することができる。1426は外面に貝殻条痕文を施した後、横位、縦位の刻目突帯を施す。内面はナデを行う。1427は内外面に横方向の細い繊維状の擦痕が確認でき、丁寧なナデを行う。外面は斜位、横位の太めの刻目突帯を施す。胎土はヘラ状工具により明瞭に施される。胎土に白色粒子、金雲母を多く含む。1428は文様、調整、胎土が1427と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられるが、外面の刻目突帯の下端に沈線を施している。

(18) XV類土器 (第440～445図 1429～1451)

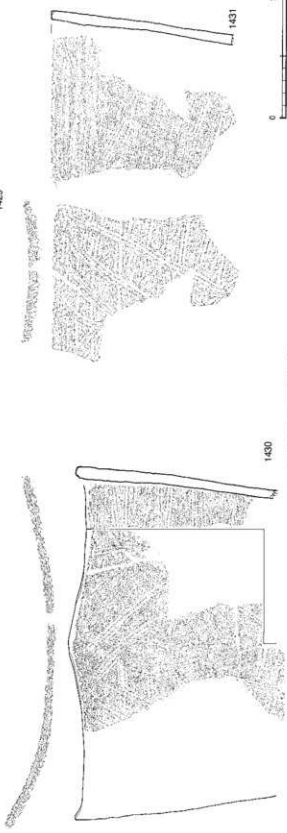
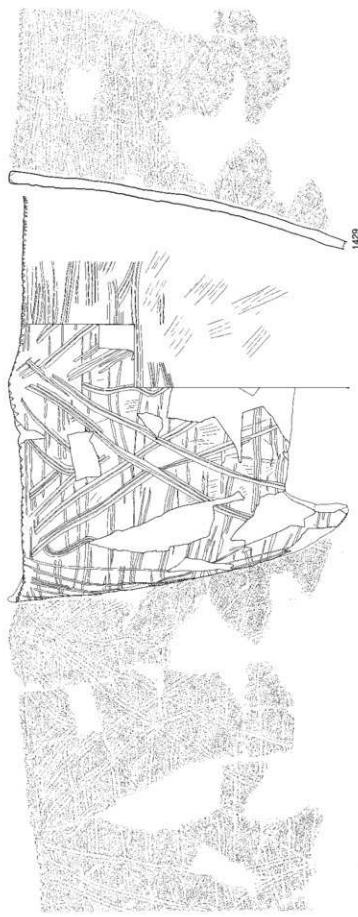
XV土器は口唇部外端に刻目を入れ、外面に貝殻条痕を施す一群である。多くが口縁部が直口もしくはやや外反し、底部にむけて直線的にすばまる器形である。口径に対して底径が極端に短く急にすばまるものもある。内面に貝殻条痕調整を行うものもある。貝殻条痕を模した細条線や沈線も施すものも含む。

文様は貝殻条痕文、細条線文、沈線文、刺突文、微隆線状の刻目突帯等を施す。

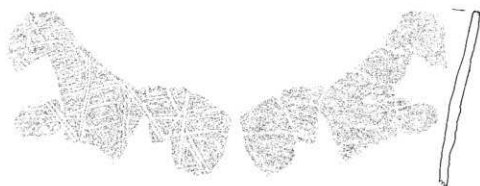
1429～1434は外面に貝殻条痕を横位に施した後、斜位の貝殻条痕文を施す一群である。貝殻条痕を模して、櫛歯状工具による細条線を施すものも含む。1429・1430は4単位の波状口縁を呈すると考えられる。1429は口縁部から胴部下半まで、1430は口縁部から胴部中央付近まで復元することができる。外面に横位の貝殻条痕文を間隔を空けて施した後、斜位の貝殻条痕文を施す。一部曲線状の施文を行う箇所がある。口唇部内外端にヘラ状工具で明瞭な細い刻目を入れる。内面に横位、斜位の貝殻条痕を施す。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1431は文様、調整、胎土等が1430と類似することから、同一個



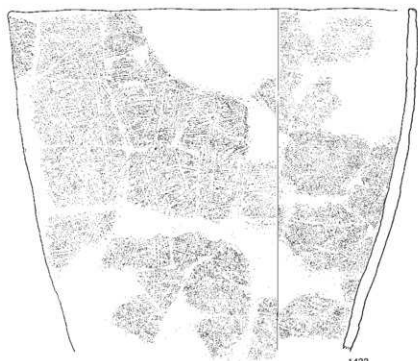
第 440 图 西团土器出土分布图



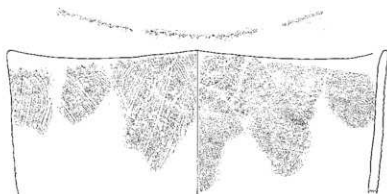
第 441 図 四国土器 (1)



1432



1433



1434



第 442 図 ⅩⅩ類土器 (2)

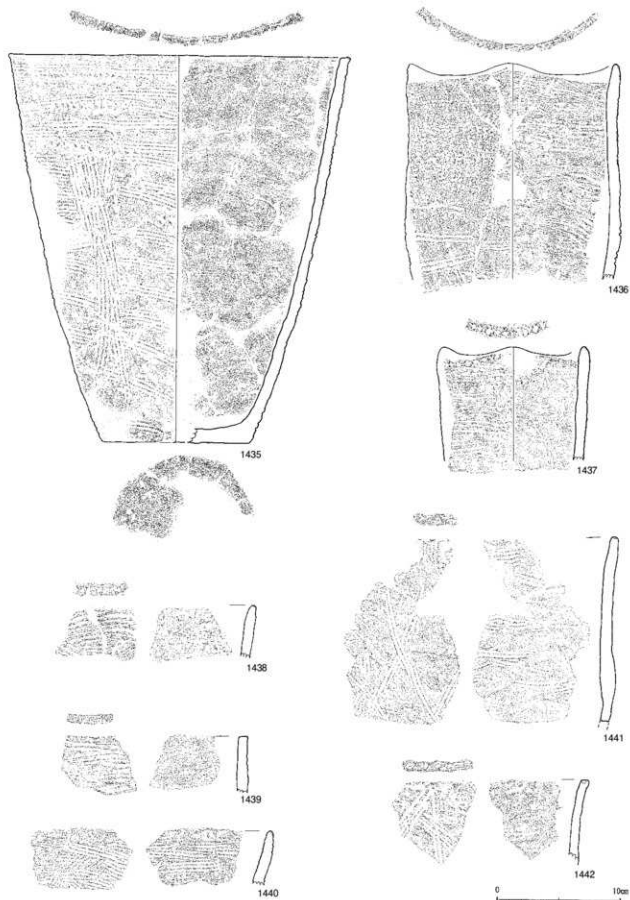
体の可能性が高いと考えられる。1432は口縁部が外反する器形である。外面に横位の貝殻条痕文を施した後、斜位の貝殻条痕文をやや間隔を空けて斜格子状に施すと考えられる。口唇部内外端に浅い刻目を入れる。内面は横位のケズリを行った後、丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1433は口縁部から胴部下半まで復元することができる。外面に櫛歯状工具による横位の細条線を施した後、斜位の細条線を施す。口唇部外端に浅い刻目を入れる。内面には横方向の繊維状の擦痕が多く確認できる。丁寧なナデを行っている。1434は4単位の波状口縁を呈すると考えられる。外面に櫛歯状工具による斜位の細条線を施す。一部曲線状の施文を行う箇所がある。細条線間に貝殻腹線部を器面に対して直行するように押しつけた縦位、斜位の貝殻刺突文を施す。口唇部外端に棒状工具で刻目を入れる。内面は横位のケズリを行った後、丁寧なナデを行う。外面に煤炭の炭化物が確認できる。

1435～1440は主に横位の貝殻条痕文を施文する一群である。一部貝殻刺突文を施すものもある。1435はほぼ完形に復元することができた。安定した平底の底部から口縁部に向けて直線的に広がる器形である。外面は横位の貝殻条痕文を施す。胴部に間隔を空けて縦位の貝殻条痕文を施す箇所もある。口縁部下位付近に微隆起線状の刻目のある横位の突帯が部分的に施される。XVI類の刻目突帯に比べ非常に細い粘土紐を用いている。口唇部は平坦に成形し外端に細い刻目を入れる。内面は横方向の繊維状の擦痕が確認できる。丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1436・1437は4単位の波状口縁を呈すると考えられる。1436は口縁部から胴部上半に押し引き状の貝殻刺突文を横位に施す。口縁部上位の貝殻刺突文は特に密接して施文を行っており、2段目以下との差が明瞭である。胴部下半に横位の貝殻条痕文の間隔を空けて施文する。口唇部外端部に刻目を入れる。内面は横方向の細い繊維状の擦痕が多く確認できる。非常に丁寧なナデを行う。外面文様はXVII類にやや類似するが、口唇部の施文、内面調整等がXVIII類に類似することからここに含めた。1437は外面に横位の貝殻条痕文を波状に施す。口唇部外端に棒状工具で明瞭な刻目を入れる。内面は丁寧なナデを行う。一部繊維状の細い擦痕が確認できる。1438は横位の貝殻条痕文を弧状に施す。舌状に成形した口唇部外端にへら状工具で刻目を入れる。1439は横位の貝殻条痕文を密接に施した後、平坦に成形した口唇部の外端に刻目を入れる。内面に丁寧なナデを行う。1440は外面に横位、斜位の貝殻条痕文を施す。舌状に成形した口唇部外端に縦長の細く明瞭な刻目を入れる。内面に横位の貝殻条痕文を施す。

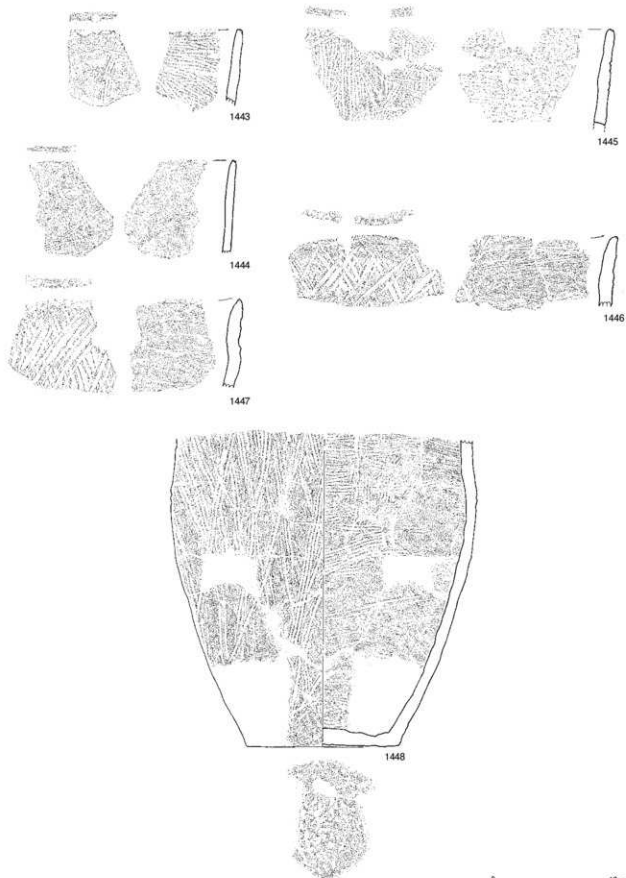
1441～1447は斜位の貝殻条痕文を施す一群である。1441は横位の貝殻条痕文を施した後、斜位の貝殻条痕文

を斜格子状に施す。口唇部に円形の刺突を施す。口縁部付近に煤炭の炭化物がわずかに確認できる。内面に横位の浅い貝殻条痕文を施す。1442は外面に斜位の貝殻条痕文を不規則に施す。口唇部に1441と同様の円形の刺突を施す。口唇部外端部がやや肥厚している点が1441と異なる。内面に横位の貝殻条痕文を施す。1443は外面に非常に浅い斜位の貝殻条痕文を施す。内面には横位、斜位の貝殻条痕文を施す。1444は外面に沈線を斜位に施す。口唇部に浅い刻目を入れる。内面は丁寧なナデを行っている。胎土に金雲母を多く含む。外面に煤炭の炭化物が広く確認できる。1445は外面に縦位、斜位の浅い沈線を不規則に施す。一部櫛歯状工具による斜位の細条線を施す箇所もある。浅い沈線、細条線の施文を行った後、先端を細く加工した棒状工具による明瞭な沈線が弧状に施文する。口唇部外端に浅い刻目を入れる。内面に横位の貝殻条痕文を施す。1446・1447は棒状工具による非常に明瞭で凹部の深い沈線を斜格子状に施す。1446は舌状に成形した口唇部内端に斜位の刻目を入れる。1447は口唇部外端に刻目を入れる。内面は横方向の浅い沈線状の擦痕が確認できる。1446は胎土に白色粒子、金雲母を多く含む。1447は胎土に小礫、白色粒子を多く含む。

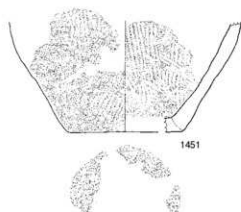
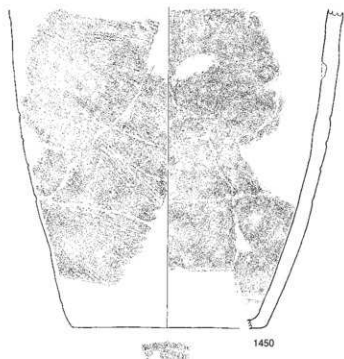
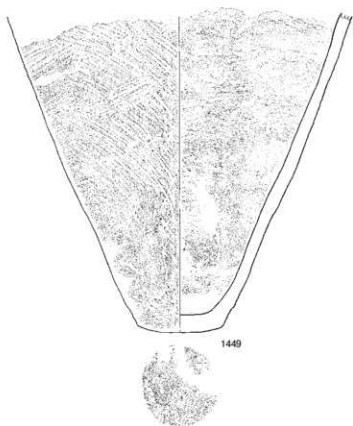
1448～1451は口縁部が残存しないもの、胴部から底部にかけて良好な残存状況を示す土器である。1448は胴部中央から底部まで復元することができる。胴部中央付近でやや膨らみ、曲線的に平底の底部にすばまる器形である。外面は斜位の貝殻条痕文を施す。内面は横位の貝殻条痕文を施す。底面は中央部分が若干内側へ窪んではいるが、上げ底とまではいかない。底部円盤の外周上に粘土紐を乗せ、胴部を輪積み成形したと考えられる。1449は外面が丸みを帯びた径の小さな底部である。胴部は底部に向けて直線的に急にすばまる器形である。胴部外面は櫛歯状工具による細条線を斜位に施す。底面境付近は無文で、丁寧なナデを行う。底部は粘土塊をやや丸底状に成形する。内面をやや凹ませ、底部の外周上に粘土紐を巻き付け、胴部が外傾するように成形しながら輪積みを行ったと考えられる。胴部は内面は斜位のケズリを行った後、丁寧なナデを行う。胎土に白色粒子を多く含む。1450は胴部中央付近から底部まで復元することができる。底部に向けて曲線的にすばまる器形である。外面にへら状工具による斜位の条痕文を施す。底面境付近のみ横位に施す。条痕文を施した後、ナデを行う。底部円盤に外周上に粘土紐を乗せ、胴部を輪積み成形する。内面に横方向の繊維状の擦痕が確認できる。丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1451は胴部下半付近から底部まで復元することができる。内外面に横位、斜位の貝殻条痕文を施す。外面は底面境まで施文が及ぶ箇所がある。断面に接合痕が確認でき、底部円盤の外周部分に粘土紐を巻き付け、胴部が外傾するように輪



第 443 图 ⅪⅧ类土器 (3)



第 444 图 西周铜器 (4)



第 445 图 ⅩⅧ 类土器 (5)

積み成形を行ったと考えられる。内外面に指おさえ痕が多数確認できる。

(19) 双類土器 (第446～452図 1452～1503)

XV土器は無文土器である。口唇部に刻目を入れるものを含む。

1452～1454は口縁部が肥厚する一群である。XV類土器と形態、調整、胎土等が類似する。1452は口縁部上位外面に粘土を貼り付け、折り返し状の肥厚する口縁部を作り出したと考えられる。内外面に指おさえ痕が確認でき、丁寧なナデを行う。胎土に白色粒子、角閃石を多く含む。1453は調整、胎土等が1452と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1454の成形、胎土は1452に類似するが、内面に横方向の繊維状の細い擦痕が確認できる。

1455～1460は頸部で曲線的にくびれ、口縁部が外反する一群である。内外面に丁寧なナデを行う。XV類土器と形態、調整、胎土等が類似する。1455・1456は波状口縁を呈する。1455は内面に指おさえ痕が確認できる。胎土に白色粒子、金雲母を含む。1456は口縁部下位をヘラ状工具でわずかに段を作り出している。1456・1457は内外面に繊維状の細い擦痕が確認できる。胎土に白色粒子を含む。1458は口縁部が大きく外反し、胴部が膨らむ器形と考えられる。口縁部外面に横方向のヘラ状工具による調整痕が確認できる。内面はケズリを行った後、丁寧なナデを行う。1459・1460は内外面の調整、胎土等が1458と類似する。

1461・1462は口縁部がやや外反し、内外面ともにケズリを行った後、ナデを行う一群である。1461は口縁部から胴部下半まで復元することができる。口縁部がやや外反し、底部に向けて曲線的にすぼまる器形である。口縁部外面の上位にわずかな稜を有する。胎土に小礫、金雲母を多く含む。1462は内面に内傾接合の痕跡や指おさえ痕が多数確認できる。

1463・1464は口縁部が「く」の字状に外反し、口唇部に刻目を入れる一群である。内外面ともに丁寧なナデを行う。XV類土器と形態、調整、胎土等が類似する。1463は口唇部に羽状の刻目を入れる。胎土に白色粒子を多く含む。1464は口縁部から胴部下付近まで復元することができる。口縁部外面にヘラ状工具による調整痕が確認できる。内面はケズリを行った後、丁寧なナデを行う。胎土に白色粒子、金雲母を多く含む。

1465～1468は口縁部が緩やかに外反し、口唇部に刻目を入れる一群である。繊維状の細い擦痕が確認できる。XV類土器と形態、調整、胎土等が類似する。1465・1466は口唇部に棒状工具による横位の刻目を入れる。1467は口唇部に縦位の刻目を入れる。内面にヘラ状工具による調整痕が確認できる。1468は波状口縁を呈すると考えられる。口唇部には貝殻腹縁部による刻目を入れている。

る。

1469～1471は口縁部が直線的に外反する一群である。形態、調整、胎土等からXV～XVII類土器に類似すると考えられる。1469・1470は内外面にヘラ状工具による調整痕や指おさえ痕が多数確認できる。胎土に白色粒子を多く含む。調整、胎土等が類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1471は緩やかな波状口縁を呈すると考えられる。外面に繊維状の細い擦痕が確認できる。内外面に指おさえ痕が多数確認できる。胎土に小礫、白色粒子、金雲母を多く含む。

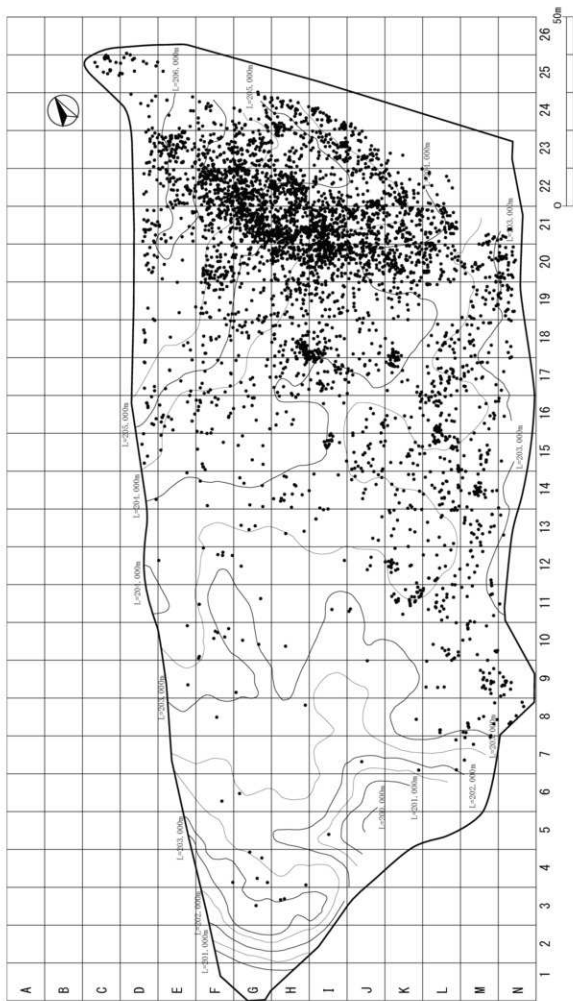
1472は口縁部が直口する円筒形状の器形である。内面に繊維状の細い擦痕や指おさえ痕が確認できる。内外面ともにナデを行う。1473は調整、胎土等が1472と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。

1474～1477は胴部である。1474は頸部から胴部上半付近と考えられる。内外面に繊維状の細い擦痕が確認できる。丁寧なナデを行う。形態、調整、胎土等がXV～XVII類土器に類似する。1475～1477は胴部下付近と考えられる。1475は内外面に指おさえ痕が多数確認でき、丁寧なナデを行う。内面には繊維状の擦痕が一部確認できる。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1476は内面にケズリを行った後、ナデを行う。胎土に白色粒子、金雲母を多く含む。1477は内外面に指おさえ痕が確認できる。内面には横位、斜位の繊維状の擦痕のあるヘラ状工具による調整痕が多数確認できる。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。外面に煤状の炭化物が確認できる。

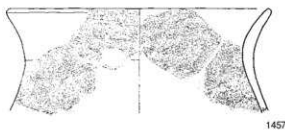
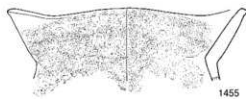
1478～1499は底部である。

1478～1482は上げ底状の底部である。有文土器の施文の及ばない無文部分の可能性もある。調整、胎土等はXV～XVII類土器に類似すると考えられる。1478・1479は内外面ともにケズリを行った後、ナデを行う。底部円盤の外周部分に粘土紐を巻き付け、胴部が外反するように輪積み成形したと考えられる。底部外面より押し出すように成形し、上げ底状の底部を作り出している。胎土に白色粒子を多く含む。1480は胴部内外面ともにナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1481は底面のみである。外面ともに丁寧なナデを行う。底部円盤の外周部分に粘土紐を巻き付け、胴部を輪積み成形したと考えられる。その際、粘土紐を高台状に成形しわずかに上げ底状にしている。1482はやや上げ底状の底部である。底面境付近の胴部外面は、縦位のヘラ状工具による調整痕が確認できる。胴部内面に指おさえ痕が多数確認できる。内外面ともにナデを行う。底部外面にヘラ状工具によるケズリが外周部分に沿うように行われている。灰褐色の付着物が一部確認できる。

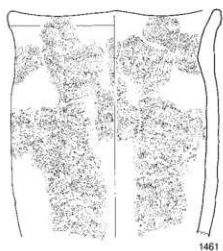
1483～1489は胴部下半が直線的に開く一群である。1483～1485は底部円盤の外周上に粘土紐を乗せ、胴部が外反するように輪積み成形していると考えられる。



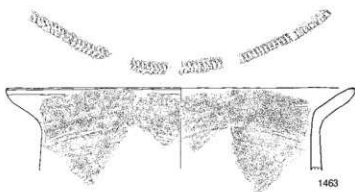
第 446 図 双雄土器出土分布図



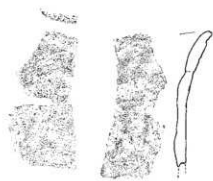
第 447 图 XX 期土器 (1)



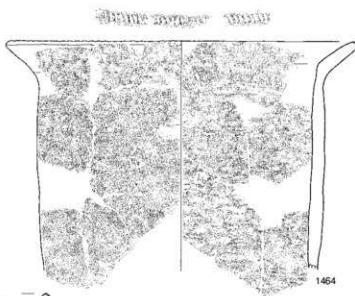
1461



1463



1462



1464



1465



1467



1466



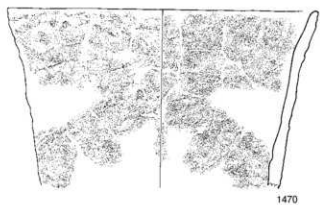
1468



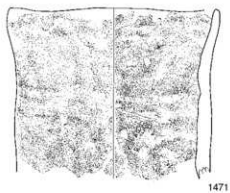
1469



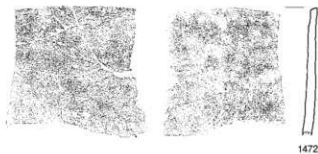
第 448 图 双鬲土器 (2)



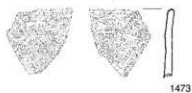
1470



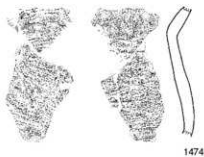
1471



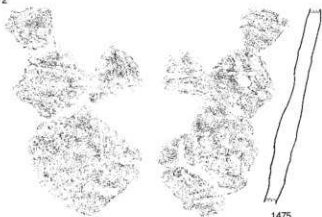
1472



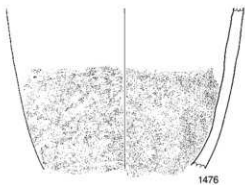
1473



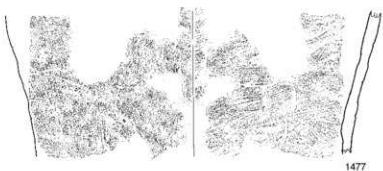
1474



1475



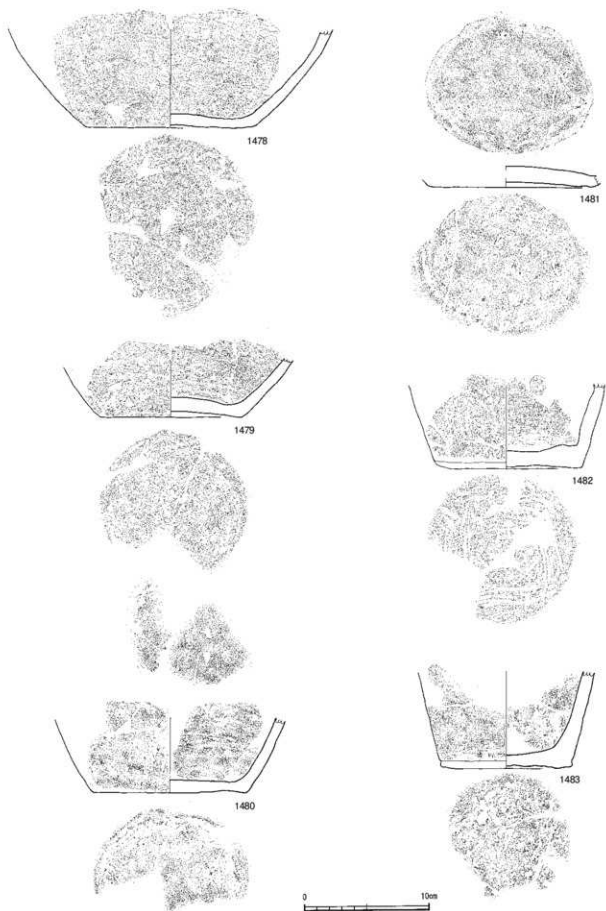
1476



1477



第 449 图 XX 期土器 (3)



第 450 图 双壳土器 (4)



1485



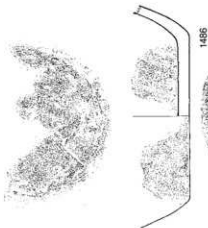
1488



1487



1484



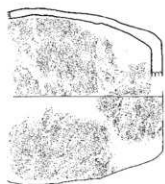
1486



1489



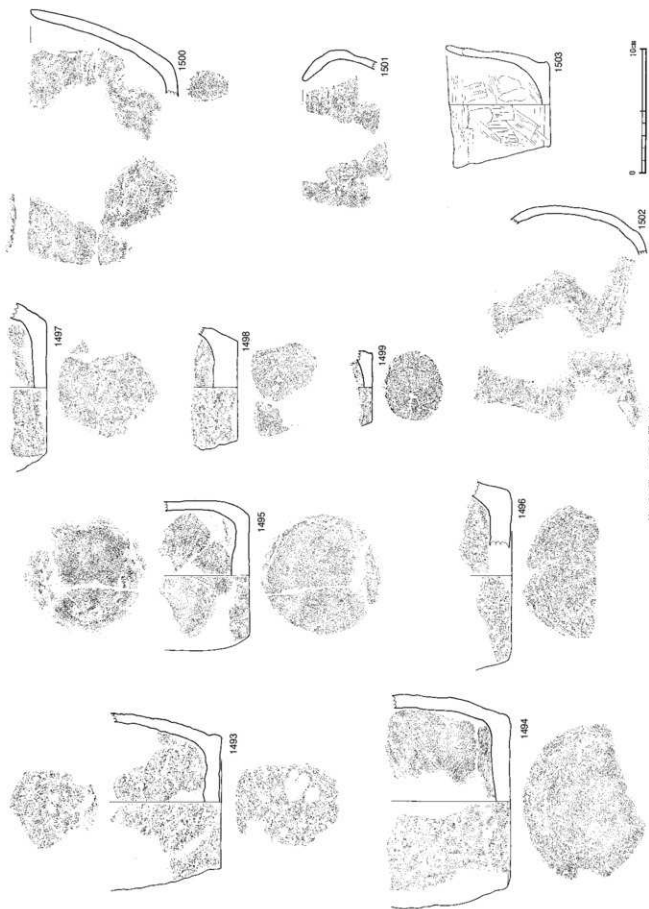
1490



1492



第 451 図 双環土器 (5)



第 452 图 双桥土器 (6)

1483は胴部外面に指おさえ痕が多数確認できる。胴部内面はケズリを行った後、ナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1484は胴部外面が剥落している。胴部内面にナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1483・1484は調整、胎土等がXX類土器に類似すると考えられる。1485は胴部内外面に繊維状の擦痕が多く確認できる。丁寧にナデを行う。胎土に小礫を多く含む。1485は調整、胎土等がXI～XII類土器に類似すると考えられる。1486・1487は安定した平底で、内外面ともにケズリを行った後、丁寧にナデを行う。底部円盤の外周部分に粘土紐を巻き付け、胴部が外反するように輪積み成形したと考えられる。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。調整、胎土等がXV～XVII類土器に類似すると考えられる。1488は胴部外面に指おさえ痕が確認でき、丁寧にナデを行う。胴部内面にナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1489の底面はほとんど残存していないが、底部円盤の外周部分に粘土紐を巻き付け、胴部を輪積み成形したと考えられる。内外面ともに非常に丁寧にナデを行う。胎土に金雲母を多く含む。調整、胎土等がXV～XVII類土器に類似すると考えられる。

1490～1493は胴部下半が曲線状の器形を呈する一群である。1490は胴部外面に指おさえ痕が確認できる。内面は丁寧にナデを行う。胎土に小礫、角閃石を含む。調整、胎土等がXV～XVII類土器に類似すると考えられる。1491は内外面ともに繊維状の擦痕が一部確認でき、ナデを行う。1492は胴部外面に輪積み成形の痕跡と考えられる緩やかな凹凸が確認できる。内外面ともに丁寧にナデを行う。1492・1493は底部円盤の外周上に粘土紐を乗せ、輪積み成形したと考えられる。胴部外面に煤状の炭化物が確認できる。1493は内外面ともにケズリを行う。胎土に小礫、白色粒子を非常に多く含む。1491～1493は調整、胎土等がXVI～XVIII類土器に類似すると考えられる。1494・1495は安定した平底の底部円盤の外周上に粘土紐を乗せ、胴部を輪積み成形したと考えられる。1494は胴部外面に指おさえ痕が確認できる。内外面ともにナデを行う。胎土に小礫、角閃石を含む。底部外面に灰褐色の付着物が確認できる。1495は内外面ともに丁寧にナデを行う。胎土に小礫、角閃石を含む。調整、胎土等がXVIII類土器に類似すると考えられる。

1496～1499は底面を中心とした部分である。1496～1498は底部円盤の外周部分に粘土紐を巻き付け、胴部を輪積み成形したと考えられる。1496は内外面ともに非常に丁寧にナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。調整、胎土等がVI～VIII類土器に類似すると考えられる。底面に灰褐色の付着物が一部確認できる。1497は内外面ともに丁寧にナデを行う。底面に灰褐色の付着物が広く確認できる。胎土に白色粒子を含む。1498は胴部外面にケズリを行った後、ナデを行う。内面、底部

外面は丁寧にナデを行う。胎土に小礫を多く含む。1499は内面はケズリ後、ナデを行う。底部外面は丁寧にナデを行う。胎土に小礫を含む。

1500は鉢形の器形である。内外面ともに繊維状の細かい擦痕、指おさえ痕が確認でき、丁寧にナデを行う。わずかに曲線的な底部円盤の外周部分から上位にかけて粘土紐を巻き付け、外反するように胴部を輪積み成形したと考えられる。口唇部も丁寧にナデを行う。調整、胎土等がXV～XVII類土器に類似すると考えられる。

1501・1502は調整、胎土等が類似することから、同一個体と考えられる。口縁部が内傾する鉢形の器形である。内面はケズリを行った後、丁寧にナデを行う。外面は指おさえ痕が確認でき、丁寧にナデを行う。胎土に小礫、白色粒子、金雲母を多く含む。調整、胎土等がXVIII類土器に類似すると考えられる。

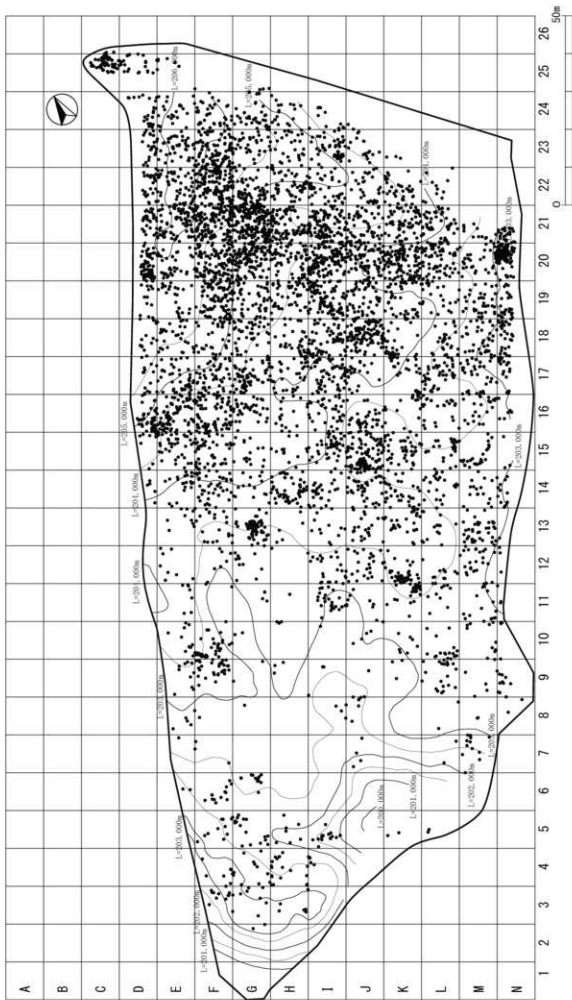
1503は小型の深鉢形土器である。平底の底部円盤に胴部の粘土紐を巻きつけて輪積み成形を行っていると考えられる。底部は口縁部にかけてやや開いた形状である。内外面ともにナデを行う。外面に指おさえ痕、ヘラ状工具による調整痕が確認できる。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。調整、胎土等がXVIII類土器に類似すると考えられる。

(20) XX類土器 (第453～459図 1504～1505)

XX類土器はI～XIII類土器に分類できない一群である。器形、文様、調整等で比較的主まりのあるものごとに分類した。

1504～1518は櫛歯状工具等による細条線を主な文様とする一群である。

1504～1507は横位の細条線で割付けを行い、内部に波状の横位、直線状の縦位の細条線を施文する一群である。1504は口縁部から胴部下付近まで復元することができた。口唇部を舌状に成形し、口縁部が外反し頸部でわずかにくびれる。胴部中央で膨らみ、底部に向けて曲線的にすばまる器形である。幅0.5cm程度の櫛歯状工具による横位の細条線を口縁部上位、頸部に施し、口縁部の割付けを行う。その後、同様の施文具で口縁部に波状の横位の細条線を施す。胴部上半、胴部中央、胴部下半に横位の細条線を間隔を空けて施文し、胴部の割付けを行う。頸部から胴部下半に縦位の細条線を密接に施す。口唇部から内面は非常に丁寧にナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を非常に多く含む。色調は灰褐色である。土器付着の炭化物を年代測定した結果、9,318-9,090caBPの値が得られた。1505・1506は文様、調整、胎土等が1504と類似するため、同一個体の可能性が高いと考えられる。1505は胴部中央から下半付近と考えられる。波状の横位の細条線を間隔を空けて施文した後、波状の横位の細条線間に縦位の細条線を下位まで施す。1506は平底の底部である。底面境付近まで縦位の細条線を施文している。



第 453 圖 XX 類土器出土分布圖

波状の横位の細条線の一部が確認できる。底部円盤の外周部分に粘土紐を巻き付け、胴部が外反するように輪積み成形したと考えられる。1507は底面境近くの胴部下半と考えられる。1504等と調整、胎土、色調等が類似するものの、外面の細条線の施文幅や波状のモチーフ等が異なる。

1508・1509は櫛歯状工具による横位の細条線を施文後に、細条線間に横位、斜位の貝殻刺突文を施す一群である。文様、調整、胎土等が類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1508は口縁部が内傾する器形と考えられる。口唇部の平坦面に非常に丁寧なナデを行い、外端が舌状に肥厚する。外面に横位の細条線を施文した後、細条線の先端部分に横位の貝殻刺突文を2段施す箇所がある。その後、斜位の貝殻刺突文で鋸歯状のモチーフを描く。内面は非常に丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を非常に多く含む。色調は褐灰色である。1509は横位の細条線を施文後に、一部先端部分に横位の貝殻刺突文を1段施す箇所がある。その後、斜位の貝殻刺突文を鋸歯状に施す。内面は非常に丁寧なナデを行う。内面調整、胎土等はVI～VIII類土器に類似すると考えられる。

1510は貝殻刺突文を施した後、口縁部上位に縦位の細条線を施す。口唇部を舌状に成形し、口縁部が直口する器形を呈すると考えられる。口縁部上位より間隔を空けて横位の貝殻刺突文を施した後、口唇部外端部より一部縦位の貝殻刺突文を施し、口縁部上位の割付けを行い、その後櫛歯状工具により縦位の細条線を施す。口縁部下位から胴部は、横位の貝殻刺突文間に斜位の貝殻刺突文を鋸歯状に施す。内面はケズリを行った後、非常に丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。

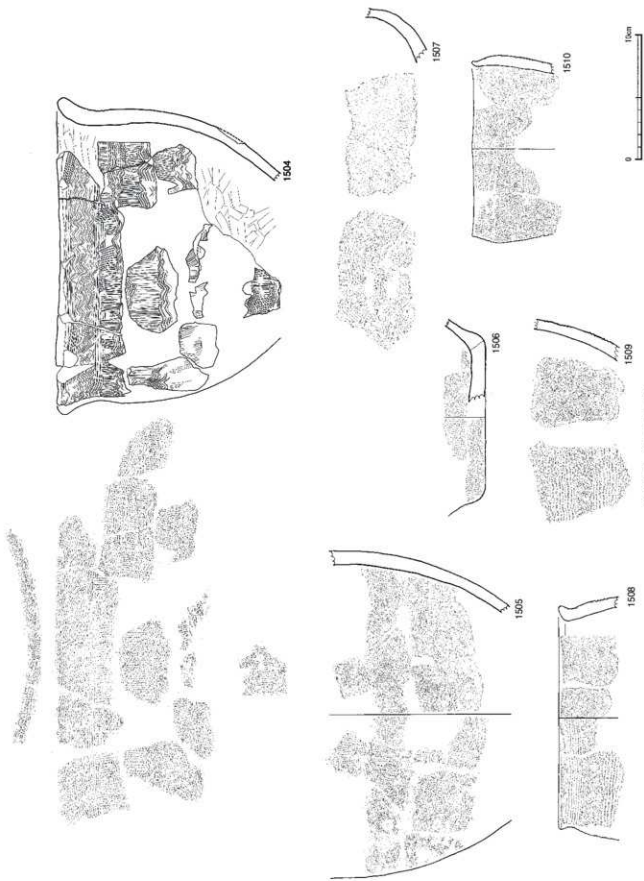
1511は口唇部を舌状に成形し、口縁部が外反する器形を呈すると考えられる。櫛歯状工具による横位の細条線を施す。口唇部、内面ともに非常に丁寧なナデを行う。胎土に白色粒子を多く含む。

1512～1515は櫛歯状工具による細条線を斜位、曲線状に施す一群である。1512～1514は文様、調整、胎土等が類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1512は口縁部がやや外反する器形を呈すると考えられる。幅0.9cmの櫛歯状工具による細条線を斜位、曲線状に施す。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1513は頸部から胴部下半分近くと考えられる。細条線を大きく曲線状に施文した後、斜位の細条線を短く施文している。内面はケズリを行った後、丁寧なナデを行う。1514は底部である。底部円盤の外周部分に粘土紐を巻き付け、胴部を輪積み成形したと考えられる。底面境付近まで斜位の細条線を施す。底部外面は非常に丁寧なナデを行う。1515は底部である。1514と調整、胎土等は類似するが、外面の細条線の施文幅や器壁厚が異なる。

1516～1518は櫛歯状工具による細条線を縦位、斜位に施す一群である。1516は口縁部から胴部中央付近まで復元することができた。口唇部が内傾するように成形し、非常に丁寧なナデを行う。幅広い櫛歯状工具による細条線を縦位、斜位に施す。内面はケズリを行った後、非常に丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。調整、胎土等がVI～VIII類土器に類似すると考えられる。1517は文様、調整、胎土等が1516と類似することから、同一個体の可能性が高いと考えられる。1518は縦位の明瞭な細条線をやや短く施文する。口唇部は舌状に成形し、非常に丁寧なナデを行う。内面はケズリを行った後、非常に丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子、金雲母を多く含む。

1519～1527は条線状の沈線を施す一群である。1519は先端を細く加工した棒状工具による条線状の沈線を間隔を空けて横位に施文する。1519～1521は胎土に小礫、白色粒子を含み、調整、胎土等がVI～VIII類土器に類似すると考えられる。1519は口唇部を内傾するように成形し、非常に丁寧なナデを行う。内面は横位、斜位のケズリを行った後、非常に丁寧なナデを行う。1520は口縁部がやや内湾する器形を呈すると考えられる。口縁部上位に条線状の浅い沈線を施した後、少し間隔を空けて縦位の浅い沈線を施す。口唇部、内面ともに非常に丁寧なナデを施す。1521は口縁部上位に先端を細く加工した棒状工具で横位の押し引き状の浅い連続刺突を2段施した後、縦位の条線状の浅い沈線を施文する。内面に丁寧なナデを行う。1522は波状口縁を呈すると考えられる。やや太めの棒状工具で明瞭な条線状の沈線を縦位に施す。内面はケズリを行った後、ナデを行う。1523の文様、内面調整は1522に類似する。口唇部に非常に丁寧なナデを行う。1524は外面に棒状工具による条線状の沈線を縦位に施す。同様の施文具で口唇部、内面に横位の沈線を施す。内面に指おさえ痕が確認でき、ナデを行う。1525は口縁部が外反する器形を呈すると考えられる。外面に棒状工具で条線状の浅い沈線を縦位に施し、同様の施文具で口唇部に刻目を入れる。内面に横方向の繊維状の細い擦痕が確認でき、ナデを行う。器形、調整、胎土等がXI類土器に類似すると考えられる。1526・1527は外面に明瞭な条線状の沈線を縦位に施文する。内面はケズリを行った後、ナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。

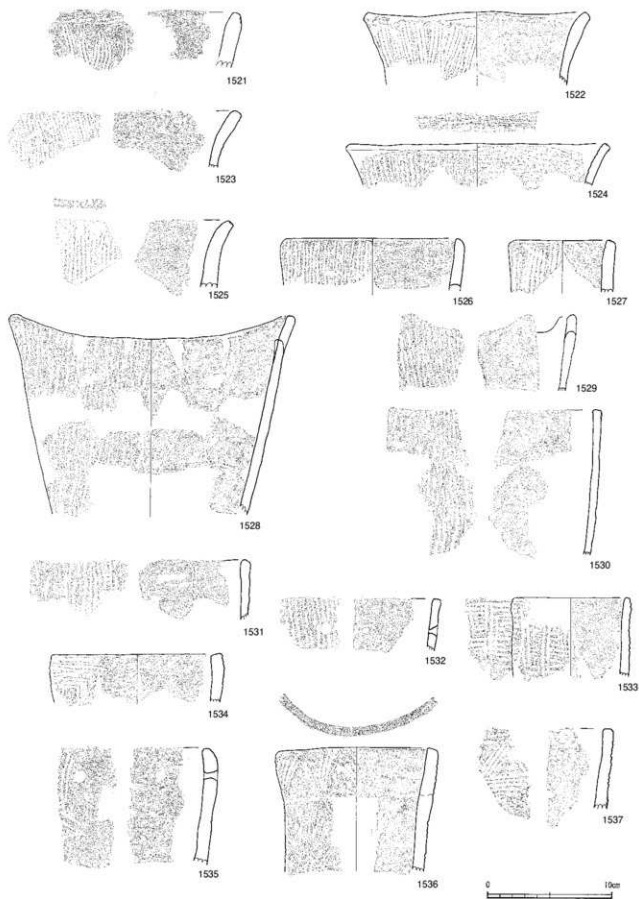
1528～1532は縦位の短沈線を密接に施す一群である。1528・1529・1531は波状口縁を呈すると考えられる。棒状工具による縦位の浅い短沈線を器面全体に施す。口唇部に非常に丁寧なナデを行う。内面に横方向の繊維状の細い擦痕や指おさえ痕が確認でき、丁寧なナデを行う。1530は口縁部上位に刺突状の縦位の短沈線を1段施した後、縦位の浅い短沈線を密接に施文する。内面に横方向の繊維状の細い擦痕が確認でき、非常に丁寧なナデを



第 454 图 XX 双墩土器 (1)



第 455 图 双鬲土器 (2)



第 456 図 XX類土器 (3)

行う。胎土に小礫、白色粒子を含む。1531・1532は縦位の浅い短沈線を密接に施す。内外面ともに丁寧なナデを施す。1531は胎土に白色粒子を多く含む。1532は焼成後に外面から穿孔した円形の補修孔が1か所確認できる。

1533・1534は浅い沈線を横位、縦位に施す一群である。1533は口縁部が直口すると考えられる。口縁部上位に横位の浅い沈線を1条施した後、縦位の浅い沈線を間隔を空けて施文し、器面の割付けを行う。その後、横位の浅い短沈線を施文する。内面はケズリを行った後、ナデを行う。1534は口唇部がわずかに内傾するように成形し、非常に丁寧なナデを行う。外面は口縁部上位に横位の浅い沈線を密接に施した後、縦位の浅い沈線を施す。内面は非常に丁寧なナデを行う。器形、調整、胎土等がVI~VIII類土器に類似すると考えられる。

1535・1536は曲線状の沈線を施す一群である。1535は口縁部が内湾する器形と考えられる。口縁部に先端を細く加工した棒状工具を器面に深く当て、明瞭で細い沈線を斜位、弧状に施文する。内面はケズリを行った後、非常に丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。器形、調整、胎土等がVI~VIII類土器に類似すると考えられる。1536は口縁部がわずかに外反する器形であると考えられる。口縁部に明瞭な沈線で縦長の本葉状のモチーフを描く。内面はケズリを行った後、丁寧なナデを行う。胎土に小礫を多く含む。内面に煤状の炭化物が確認できる。曲線状の沈線で本葉状のモチーフを描く点や調整、胎土等がXVI類土器と類似する部分も多いと考えられる。

1537・1538は斜位の沈線を施す一群である。1537は口縁部が直口すると考えられる。口縁部上位に横位の貝殻刺突文を2段施す。やや間隔を空けて横位の貝殻条痕文を施す。横位の貝殻刺突文と貝殻条痕文の間に斜位の貝殻条痕文で山形のモチーフを描く。横位の貝殻条痕文の下には斜位の貝殻刺突文を施す。内面はケズリを行う。胎土に小礫を多く含む。1538は口縁部が外反する器形と考えられる。口縁部外面に斜位の浅い沈線で山形のモチーフを描く。口唇部に刻目を入れる。口縁部内面に縦位の浅い沈線を施す。内面は丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。焼成後、主に外面から穿孔した円形の補修孔が1か所確認できる。器形、調整、胎土等がXIV類土器に類似すると考えられる。

1539・1540は器面に沈線が施された土器である。1539は胴部上半から底部まで復元することができた。外面に明瞭な斜位の沈線を施す。内外面ともに指おさえ痕が多数確認できる。内面は繊維状の細い痕痕が確認でき、ナデを行う。器形、調整、胎土等がXV類土器に類似すると考えられる。1540は口径8.6cm、底径5.6cm、器高12cmの小型ではあるが、完形に復元できた深鉢形土器である。口縁部が外反し、頸部がわずかにくびれ、胴部上半

でやや膨らみながら、底部に向けて直線的にすぼまる器形である。口縁部から胴部上半に斜位の明瞭な沈線を施す。内外面に指おさえ痕が多数確認でき、ナデを行う。器形、調整、胎土等がXVI類土器に類似すると考えられる。

1541~1547はVI~VIII類土器に多く見られる貝殻条痕部による刺突文を模した棒状工具による刺突文を施す一群である。1541・1542は波状口縁を呈すると考えられる。先端を細く加工した棒状工具で円形の刺突を口縁部上位に横位に数段施した後、1541は縦位に、1542は斜位に施文する。口唇部、内面に非常に丁寧なナデを行う。胎土に白色粒子を多く含む。1543も1542と同様の施文、調整、胎土である。1544~1547は胴部である。1542等と同様に外面に斜位の刺突を施す。貝殻条痕部を模したようにわずかに弧状に施文している箇所もあるが一様でない。内面はケズリを行った後、丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1544は斜位の刺突で「く」の字状のモチーフを描く。内面にヘラ状工具による調整痕が確認でき、ナデを行う。胎土に白色粒子を多く含む。

1548~1554は棒状工具による列点状の刺突を縦位に施す一群である。内面は丁寧なナデを施す。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。器形、調整、胎土等がVI~VIII類土器に類似すると考えられる。

1548~1551は口縁部である。1548・1549は口唇部を内傾するように成形する。1548は一部斜位に施す箇所がある。1550・1551は内面にケズリを行った後、ナデを行う。

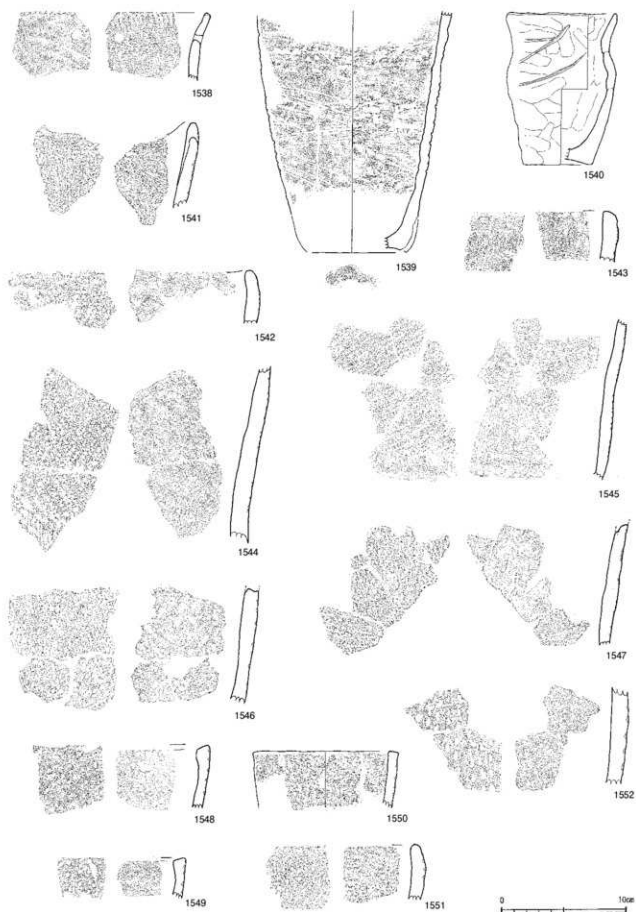
1552・1553は胴部である。1552はやや縦長の列点状の刺突を行う。内面はケズリを行った後、ナデを行う。1553は胴部下半付近と考えられる。列点状の刺突を縦位に施すが、一部施文が乱れる箇所がある。内面はヘラ状工具による調整痕が確認でき、ナデを行う。

1554は底部である。底部円盤の外周上よりやや内側に粘土紐を乗せ、胴部を輪積み成形したと考えられる。胴部外面に縦位の列点状の刺突を施すが、底部境付近は非常に丁寧なナデを行い、無文である。内面はケズリを行った後、ナデを行う。

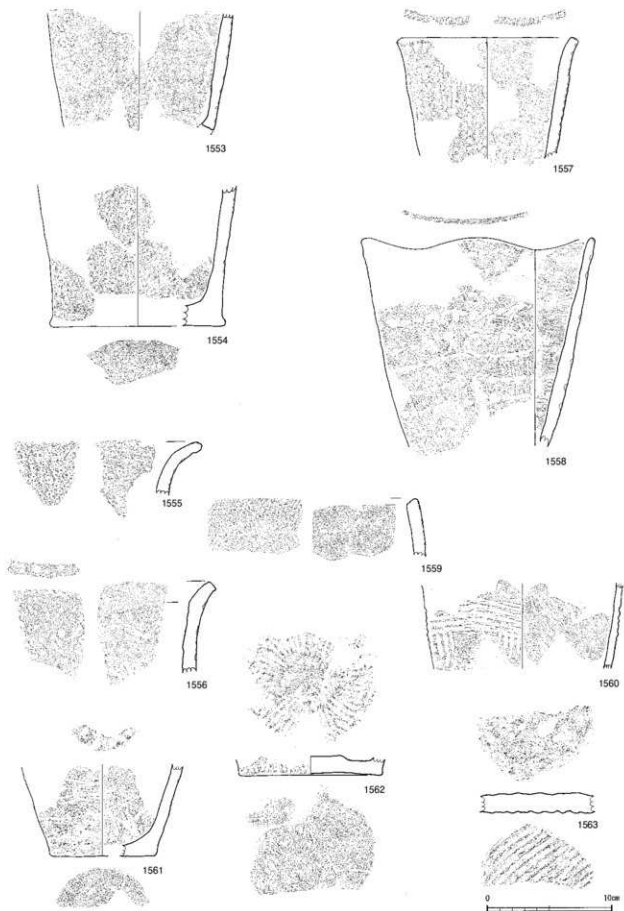
1555は口縁部が外反する器形と考えられる。外面に竹管状の工具の端部を器面に対して直行するように当て、円形の刺突を縦位に密接に施す。内面はナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。器形、調整、胎土等がXI類土器に類似すると考えられる。

1556は口縁部がわずかに外反する器形と考えられる。外面に棒状工具によるやや大さめの刺突文を縦位に施す。口縁部内面に明瞭な横線を成形し、横より下はケズリを行う。胎土に小礫、金雲母を多く含む。器形、調整、胎土等がXI類土器の短枝回転施文を行う一群に類似すると考えられる。

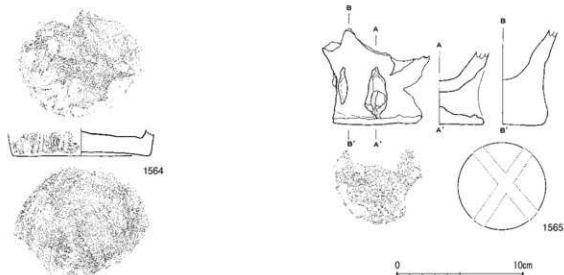
1557は口縁部から胴部下半まで復元することができ



第 457 图 XX 类土器 (4)



第 458 图 XX 类土器 (5)



第459図 XX類土器(6)

る。口縁部がわずかに外反し、頸部でやや膨らみ直線的にすばまる器形と考えられる。口縁部にやや斜位の、胴部に縦位の貝殻刺突文を密接に施す。口唇部にヘラ状工具による縦位の浅い刻目を入れる。内面は丁寧なナデを行う。器形、調整、胎土等からV類土器に類似すると考えられる。

1568は口縁部から胴部下半まで復元することができる。4単位の波状口縁を呈すると考えられる。口縁部から底部に向けて直線的にすばまる器形と考えられる。外面に斜位の繊維状の擦痕が多く確認できる。口縁部上位は棒状工具による押し引き状の短沈線を横位に1段施し、それより下は同じ施文具による横位の短沈線を間隔を空けて施す。内面は貝殻条痕を横位、斜位に施す。口唇部外端に浅い刻目を入れる。器形、調整、胎土等からX類土器に類似すると考えられる。

1569は口唇部を内傾するように成形し、非常に丁寧なナデを行う。口縁部上位に貝殻の腹縁部を縦に当て横方向へ刺突を1段～2段行う。貝殻刺突を逆「く」の字状に施す。その下に無筋斜縄文Rを横位に施す箇所がある。内面はケズリを行った後、非常に丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。

1560は胴部下付付近と考えられる。原体はやや判然としないが、太めの0段1の撚りを軸に右巻き後、左巻きした網目状捺糸文を横位に施した後、縦位に施したと考えられる。内面は丁寧なナデを行う。胎土に白色粒子を多く含む。調整、胎土等がX類土器と類似すると考えられるが、網目状捺糸文の原体はX類土器と異なり非常に大振りである。

1561～1565は底部である。

1561は胴部下半から底部である。外面に浅い横位の沈線を施す。底部円盤の外周上に粘土紐を乗せ、胴部を輪積み成形したと考えられる。内面は丁寧なナデを行う。胎土に小礫、白色粒子を含む。色調が明褐色を呈する。

1562は底部内面に貝殻刺突文を円形に施し、ナデを行っている。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。1563は底部外面に明瞭な貝殻条痕文を施す。内面に指おさえ痕やヘラ状工具により調整痕が確認できる。胎土に小礫、白色粒子を多く含む。

1564は胴部外面に一部貝殻条痕文が確認できる。底部内面はヘラ状工具による調整痕が確認できる。底部円盤の外周部分に粘土紐を巻き付け、胴部を輪積み成形したと考えられる。わずかに上げ底状を呈している。底部外面はケズリを行った後、ナデを行っている。

1565は脚台付の深鉢形土器である。VI層から出土しているが、地層横転の影響を受けていることや形状・胎土等から縄文時代後期該当の土器とも考えられる。ここでは、型式不明土器として取り扱うこととした。脚台部分と胴部の一部と考えられる。底径は6.4cm、残存高は7.7cmである。脚台部分に、径1cm程度の丸い棒状工具を底部側面に突き刺して貫通させることで、4か所の透かし孔を作り出している。その結果、脚台的な底部を形成することとなったと考えられる。棒状工具は2方向から突き刺し、底部中央部で交差している。また、棒状工具の先端を鋭利に加工していた痕跡が透かし孔部分の調整痕から確認できる。

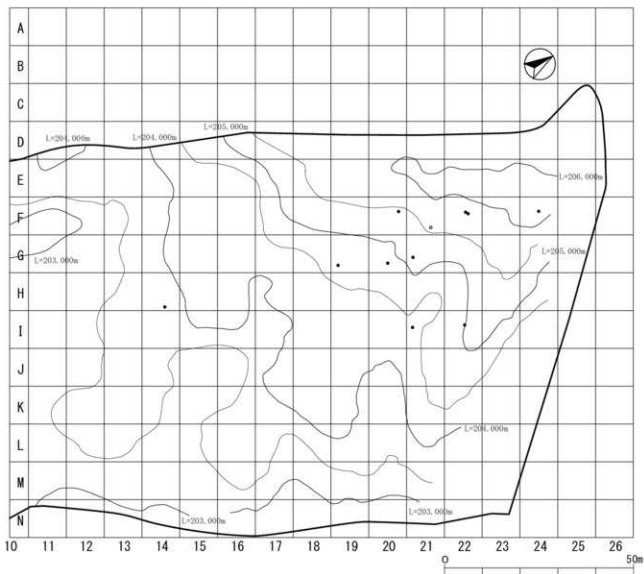
2 土製品

(1) 耳栓状土製品 (第 461 図 1566 ~ 1568)

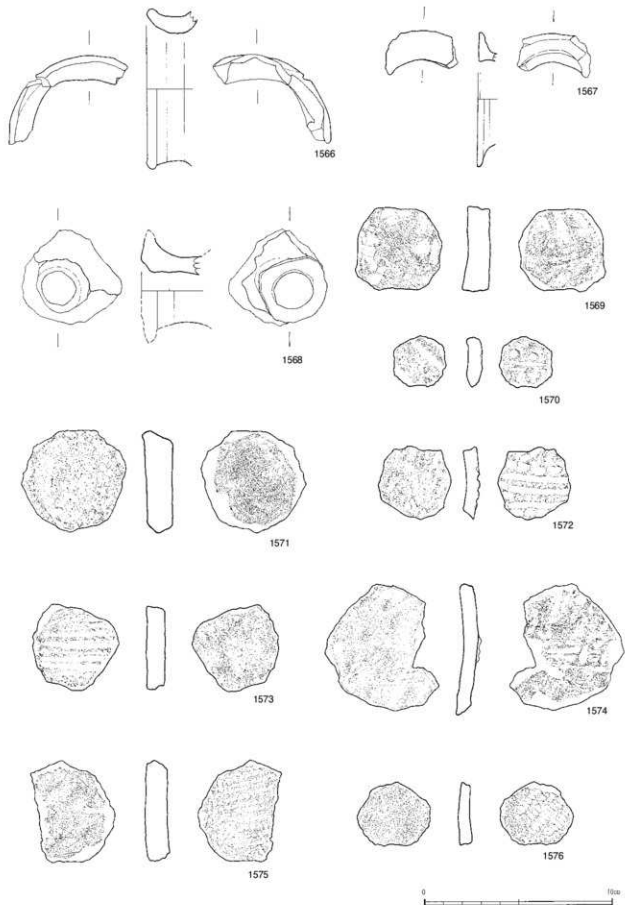
耳栓状土製品は3点出土した。いずれも環状を呈する輪状耳栓である。有孔の滑車形であるが、大半が欠損しており、全容は明らかではない。1566と1567は器壁が薄く、外面には抉りをもち内面には稜を有する。1568は器壁が厚く、外面には抉りをもち、内面には上下に稜を有する。

(2) 円盤状土製加工品 (第 461 図 1569 ~ 1576)

土器片を再利用した円盤状土製加工品は8点出土した。周辺部を円形に打ち欠いて、二次加工したものである。利用部位は1569と1571が底部であり、1573は無文の頸部で、その他5点については胴部である。1570は刺突文、1572は刺突文と沈線文、1573は条痕文、1574は刻目突帯文、1575は貝殻刺突文、1576は単節斜縄文LRを施す。文様要素が1570、1572、1574はXV類土器、1575はVI類土器と共通すると考えられる。



第 460 図 土製品出土分布図



第 461 圖 土製品

第 51 表 XV類土器観察表 (2)

※ () は推定

68図 番号	掲載 番号	分類	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)		主文様・調整		新土				色調		備考			
							口径	底径	器高	外面	内面	白色 転写	黒色 転写	両面 右	右裏	裏底		裏右	外面	内面
421	1348	XV	深鉢	K 17	VI	口縁部		(10.30)	貝殻条痕文・沈澱文	ケズリ		○	○	○	灰褐色	にぶい黄褐色	スス付着			
	1349	XV	深鉢	J 18	VI	口縁部		(10.1)	沈澱文	ナデ・ケズリ		○	○	○	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	スス付着			
	1350	XV	深鉢	G 18	VI	口縁部		(7.3)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○		○	○	灰黄褐色	にぶい黄褐色				
	1351	XV	深鉢	J 14	VI	口縁→胴部	27.4	(9.5)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ			○	○		灰黄褐色	にぶい黄褐色			
	1352	XV	深鉢	J 19	VI	口縁部	32.6	(20.3)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	黒	にぶい黄褐色	縦溝孔有り スス付着			
422	1353	XV	深鉢	W 13	VI	口縁→胴部		(9.3)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	黒褐色	にぶい黄褐色				
	1354	XV	深鉢	I 14	VI	口縁部		(4.4)	貝殻条痕文・沈澱文	ナデ・指跡状文様		○	○	○	黒褐色	黒褐色				
	1355	XV	深鉢	N 19	VI	口縁→胴部	32.9	(12.7)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ・指跡状文様		○	○	○	黒褐色	にぶい黄褐色	スス付着			
	1356	XV	深鉢	J 20	Vb	口縁部		(3.4)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・指跡状文様		○	○	○	浅黄褐色	浅黄褐色				
	1357	XV	深鉢	I 17	VI	口縁→胴部	19.1	(10.7)	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ・指跡状文様		○	○	○	黒	にぶい黄褐色				
423	1358	XV	深鉢	J 17	Va	口縁部		(7.2)	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ・指跡状文様		○	○	○	黒	にぶい黄褐色				
	1359	XV	深鉢	M 14	VI	口縁部	30.9	(15.4)	沈澱文	ナデ・ケズリ		○	○	○	黒	にぶい黄褐色				
	1360	XV	深鉢	W 12	VI	口縁部		(11.4)	沈澱文	ナデ・ケズリ・指跡状文様		○	○	○	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	スス付着			
	1361	XV	深鉢	W 14	Va	口縁→胴部	18.3	(22.7)	波状文・波状文・波状文	ナデ・指跡状文様		○	○	○	黒	灰黄褐色				
	1362	XV	深鉢	H 14	Vb	口縁→胴部	19.3	(24.7)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ		○	○	○	黒	にぶい黄褐色				
424	1363	XV	深鉢	K 19	VI	口縁部	25.1	(11.8)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ・指跡状文様		○	○	○	明赤褐色	にぶい黄褐色				
	1364	XV	深鉢	K 18	VI	口縁部		(10.6)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ・指跡状文様		○	○	○	明赤褐色	にぶい黄褐色				
	1365	XV	深鉢	L 19	VI	口縁部		(16.1)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ		○	○	○	明赤褐色	にぶい黄褐色				
	1366	XV	深鉢	K 10	VI	口縁→底面	21.2 8.9	23.6	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ・指跡状文様		○	○	○	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				
	1367	XV	深鉢	I 22	VI	口縁部	30.9	(12.7)	沈澱文	ナデ・ケズリ・指跡状文様		○	○	○	明赤褐色	明赤褐色				
425	1368	XV	深鉢	W 13	VI	口縁部		(9.2)	沈澱文	ナデ・ケズリ		○	○	○	灰褐色	黒褐色	スス付着			
426	1369	XV	深鉢	L 20	VI	胴部→底面		(10.8)	貝殻条痕文・沈澱文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	明赤褐色	灰黄褐色				
	1370	XV	深鉢	J 19	VI	胴部		(10.0)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・指跡状文様		○	○	○	黒褐色	灰褐色				
	1371	XV	深鉢	J 15	VI	胴部		(23.7)	波状文・波状文・波状文	ケズリ		○	○	○	黒	灰褐色				
	1372	XV	深鉢	K 18	VI	胴部		(16.2)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	明赤褐色	黒褐色				
	1373	XV	深鉢	K 18	VI	胴部		(2.5)	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	明赤褐色	黒褐色				
427	1374	XV	深鉢	F 21	VI	口縁→胴部		(21.8)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ・指跡状文様		○	○	○	黒	にぶい黄褐色	スス付着			
	1375	XV	深鉢	H 21	VI	口縁部		(10.4)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	灰褐色	灰黄褐色				
	1376	XV	深鉢	G 22	Vb	胴部		(8.7)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ケズリ		○	○	○	黒	にぶい黄褐色				
	1377	XV	深鉢	L 18	VI	胴部		(14.4)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・指跡状文様	○	○	○	○	にぶい黄褐色	黒褐色				
	1378	XV	深鉢	J 19	VI	胴部		(14.3)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	明赤褐色	にぶい黄褐色	スス付着			
428	1379	XV	深鉢	W 15	VI	胴部		(15.5)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ・指跡状文様		○	○	○	黒	黒				
	1380	XV	深鉢	I 16	横紋	口縁→胴部	26.2	(12.9)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ・指跡状文様		○	○	○	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				
	1381	XV	深鉢	I 11	V	口縁部		(10.0)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ		○	○	○	○	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色			
	1382	XV	深鉢	K 15	VI	胴部		(12.1)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・ケズリ		○	○	○	○	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色			
	1383	XV	深鉢	W 13	VI	胴部		(11.4)	貝殻条痕文・貝殻条痕文	ナデ・指跡状文様	○	○	○	○	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				
429	1384	XV	深鉢	J 14	Vb	胴部		(20.8)	貝殻条痕文・沈澱文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				
430	1385	XV	深鉢	L 15	Vb	胴部		(14.3)	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ		○	○	○	黒	黒				
	1386	XV	深鉢	I 14	VI	胴部		(13.0)	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	にぶい黄褐色	明褐色				
	1387	XV	深鉢	I 14	VI	胴部		(16.7)	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ		○	○	○	○	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色			
	1388	XV	深鉢	J 14	V	胴部		(17.8)	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ		○	○	○	○	にぶい黄褐色	明赤褐色			
	1389	XV	深鉢	J 14	V	胴部		(21.7)	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				
431	1390	XV	深鉢	W 16	Vb	胴部		(12.4)	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ		○	○	○	灰黄褐色	灰黄褐色				
	1391	XV	深鉢	N 19	VI	胴部		(8.9)	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ		○	○	○	黒	黒褐色				
	1392	XV	小型 浅鉢	I 11	VI	胴部		(7.4)	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	明褐色	明褐色				
	1393	XV	深鉢	I 16	VI	胴部		(11.7)	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	黒	横紋				
	1394	XV	深鉢	K 21	VI	胴部		(11.1)	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ・指跡状文様		○	○	○	黒	にぶい黄褐色				
	1395	XV	深鉢	L 21	VI	胴部		(27.5)	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				
	1396	XV	深鉢	K 21	Vb	胴部		(11.2)	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	灰褐色	黒褐色				
	1397	XV	深鉢	K 21	Vb	胴部		(6.7)	貝殻条痕文	ナデ	○	○	○	○	明褐色	明褐色				
431	1398	XV	深鉢	G 17	VI	胴部→底面	12.6	(27.9)	貝殻条痕文	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				

第52表 XⅡ類土器観察表(3)

※()は推定

探跡 番号	掲載 番号	分類	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)			主文様・調飾		新土					色調		備考		
							口径	底径	器高	外面	内面	白色 粘土	黄色 粘土	角閃 石	石英	雲母	長石	外面		内面	
																					口縁
431	1399	XⅡ	深鉢	J	16	Ⅵ	底部	10.2	(7.90)	貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい黄緑	灰黄緑
	1400	XⅡ	深鉢	K	11	Ⅵ	胴部～底部	15.8	(10.09)	貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	赤褐色	黒褐色
	1401	XⅡ	深鉢	J	13	Ⅵ	底部	12.0	(6.33)	貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい緑	灰褐色
	1402	XⅡ	深鉢	N	16	Ⅵ	底部		(6.25)	貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい緑	にぶい緑
	1403	XⅡ	深鉢	K	14	Ⅵ	底部	8.2	(3.3)	貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい緑	明褐色
432	1404	XⅡ	深鉢	M	19	ⅥF	胴部～底部	11.9	(22.4)	貝殻条線文	ナデ、ナズリ、指おき文	○		○	○	○	○	○	○	明赤褐色	にぶい緑
	1405	XⅡ	深鉢	L	16	Ⅵ	口縁～胴部	13.3	(10.7)	貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	緑	緑
	1406	XⅡ	深鉢	K	18	Ⅵ	底部	11.6	(5.99)	貝殻条線文	ナデ、ナズリ、指おき文	○		○	○	○	○	○	○	緑	にぶい黄緑
	1407	XⅡ	深鉢	G	22	Ⅵ	胴部～底部	10.0	(13.3)	貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	緑	にぶい黄緑
	1408	XⅡ	深鉢	L	15	Ⅵ	胴部～底部	10.8	(9.80)	貝殻条線文	ナデ、ナズリ、指おき文	○		○	○	○	○	○	○	緑	緑
433	1409	XⅡ	深鉢	J	14	Ⅵ	口縁～胴部	12.0	(4.6)	貝殻条線文・波線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい緑	にぶい緑
	1410	XⅡ	深鉢	K	16	Ⅵ	胴部～底部	9.0	(13.3)	貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい緑	にぶい赤褐色

第53表 XⅡ類土器観察表

探跡 番号	掲載 番号	分類	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)			主文様・調飾		新土					色調		備考			
							口径	底径	器高	外面	内面	白色 粘土	黄色 粘土	角閃 石	石英	雲母	長石	外面		内面		
																					口縁	底縁
435	1411	XⅡ	深鉢	K	14	Ⅵ	口縁～胴部	31.5	(35.0)	割目突帯、貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	緑	緑	
	1412	XⅡ	深鉢	J	16	V	口縁～胴部	31.0	(33.7)	割目突帯、貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	緑	にぶい黄緑	
437	1413	XⅡ	深鉢	N	20	Ⅵ	口縁～胴部	32.0	(26.6)	割目突帯、貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	緑	にぶい黄緑	
	1414	XⅡ	深鉢	L	20	Ⅵ	口縁～胴部	19.0	(10.7)	割目突帯、貝殻条線文	ナデ、指おき文	○		○	○	○	○	○	○	明赤褐色	にぶい黄緑	割付孔有り
	1415	XⅡ	深鉢	L	14	Ⅵ	口縁部		(8.90)	割目突帯、貝殻条線文	ナデ、指おき文	○		○	○	○	○	○	○	にぶい緑	にぶい黄緑	
	1416	XⅡ	深鉢	L	15	Ⅵ	口縁～胴部	20.6	(18.3)	貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい赤褐色	灰褐色	
	1417	XⅡ	深鉢	L	15	Ⅵ	口縁～胴部	20.4	(17.7)	貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい赤褐色	黒褐色	
438	1418	XⅡ	深鉢	K	20	Ⅵ	胴部	25.0	(25.80)	割目突帯、貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい黄緑	灰黄緑	
	1419	XⅡ	深鉢	L	20	Ⅵ	胴部	12.0	(12.0)	割目突帯、貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい黄緑	にぶい黄緑	
	1420	XⅡ	深鉢	L	20	Ⅵ	胴部	19.0	(19.4)	割目突帯、貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	緑	灰褐色	
	1421	XⅡ	深鉢	N	21	Ⅵ	胴部	16.0	(16.80)	割目突帯、貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい緑	にぶい黄緑	
	1422	XⅡ	深鉢	K	16	Ⅵ	胴部	7.0	(7.80)	割目突帯、貝殻条線文	ナデ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい黄緑	灰黄緑	
439	1423	XⅡ	深鉢	K	19	Ⅵ	胴部	7.0	(7.90)	割目突帯、貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい緑	緑	
	1424	XⅡ	深鉢	K	20	Ⅵ	胴部	13.0	(13.4)	割目突帯、貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	明赤褐色	にぶい黄緑	
	1425	XⅡ	深鉢	L	20	Ⅵ	胴部	10.0	(10.90)	割目突帯、貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	明赤褐色	にぶい黄緑	
	1426	XⅡ	深鉢	K	17	Ⅵ	胴部	4.0	(4.80)	割目突帯、貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい黄緑	灰黄緑	
	1427	XⅡ	深鉢	L	19	Ⅵ	胴部	17.0	(17.80)	割目突帯	ナデ、指おき文	○		○	○	○	○	○	○	にぶい黄緑	にぶい黄緑	
	1428	XⅡ	深鉢	L	19	Ⅵ	胴部	6.0	(6.40)	割目突帯	ナデ、指おき文	○		○	○	○	○	○	○	緑	緑	

第54表 XⅡ類土器観察表(1)

探跡 番号	掲載 番号	分類	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)			主文様・調飾		新土					色調		備考				
							口径	底径	器高	外面	内面	白色 粘土	黄色 粘土	角閃 石	石英	雲母	長石	外面		内面			
																					口縁	底縁	器底
441	1429	XⅡ	深鉢	G	22	Ⅵ	口縁～胴部	34.0	(26.99)	貝殻条線文	貝殻条線文	○		○	○	○	○	○	○	黒褐色	にぶい緑		
	1430	XⅡ	深鉢	G	23	Ⅵ	口縁～胴部	27.8	(16.2)	貝殻条線文	貝殻条線文	○		○	○	○	○	○	○	灰褐色	緑		
	1431	XⅡ	深鉢	F	22	Ⅵ	口縁～胴部	14.0	(14.6)	貝殻条線文	貝殻条線文・ナデ	○		○	○	○	○	○	○	灰褐色	にぶい緑		
442	1432	XⅡ	深鉢	J	15	Ⅵ	口縁～胴部		(14.0)	貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	灰褐色	にぶい黄緑		
	1433	XⅡ	深鉢	G	17	Ⅵ	口縁～胴部	31.7	(27.4)	細線条線文	ナデ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい黄緑	にぶい黄緑		
	1434	XⅡ	深鉢	L	19	V	口縁部	30.0	(31.4)	貝殻条線文・線条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	灰褐色	灰褐色	スス付着	
	1435	XⅡ	深鉢	N	20	Ⅵ	口縁～底部	26.8	(11.6)	割目突帯、貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい緑	にぶい緑		
443	1436	XⅡ	深鉢	L	16	V	口縁～胴部	16.4	(17.0)	貝殻条線文、貝殻条線文	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	○	緑	黒褐色	
	1437	XⅡ	深鉢	G	21	V	口縁～胴部	11.2	(9.1)	貝殻条線文・割目突帯	ナデ、ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	○	にぶい黄緑	灰黄緑	スス付着
	1438	XⅡ	深鉢	G	21	V	口縁部		(4.25)	貝殻条線文	ナデ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい黄緑	暗灰黄		
	1439	XⅡ	深鉢	L	19	Ⅵ	口縁部		(4.6)	貝殻条線文	ナデ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい緑	にぶい黄緑		
	1440	XⅡ	深鉢	G	6	V	口縁部		(4.3)	貝殻条線文	貝殻条線文	○		○	○	○	○	○	○	灰黄	にぶい黄緑		
1441	XⅡ	深鉢	H	14	V	口縁～胴部		(14.7)	貝殻条線文	貝殻条線文	○		○	○	○	○	○	○	○	灰褐色	灰黄緑	スス付着	

第 55 表 XX類土器観察表 (2)

※ () は推定

研究 番号	掲載 番号	分類	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)		土文様・調整		新土				色調		備考		
							口径	底径	器高	外面	内面	白色 粘土	黒色 粘土	向 右	石質	質 良		石 質	外面
443	1442	Ⅷ	深鉢	B 14	V a	口縁部		(6.8)		貝殻条痕文	貝殻条痕文・帯おさえ痕		○	○			灰黄褐色	暗灰黄	
	1443	Ⅷ	深鉢	B 26	IV a	口縁部		(6.1)		貝殻条痕文	貝殻条痕文		○	○			黒褐色	灰黄褐色	スス付着
	1444	Ⅷ	深鉢	L 11	Ⅷ上	口縁部		(7.3)		沈線文	ナゲ			○	○	○	に高い黄褐色	暗灰黄	スス付着
	1445	Ⅷ	深鉢	H 19	IV	口縁部		(7.7)		沈線文・細条線文	貝殻条痕文			○	○	○	に高い褐色	に高い褐色	
	1446	Ⅷ	深鉢	L 20	VI	口縁部		(5.7)		沈線文	ナゲ	○			○		灰褐色	褐色	
	1447	Ⅷ	深鉢	L 20	VI	口縁部		(7.1)		沈線文	ナゲ	○		○	○	○	明褐色	明褐色	
	1448	Ⅷ	深鉢	H 17	Ⅷ上	胴部～底部	12.0	(24.0)		貝殻条痕文	貝殻条痕文	○			○		褐色	褐色	
444	1449	Ⅷ	深鉢	I 7	Ⅷ	胴部～底部	6.2	(25.3)		細条線文	ナゲ・ケズリ	○		○	○	○	に高い褐色	に高い黄褐色	スス付着
445	1450	Ⅷ	深鉢	G 4	Ⅷ	胴部～底部	13.2	(25.5)		条痕文	ナゲ	○		○	○		褐色	に高い黄褐色	
	1451	Ⅷ	深鉢	J 20	VI	胴部～底部	8.8	(8.8)		貝殻条痕文	貝殻条痕文	○			○		明赤褐色	明褐色	

第 56 表 XX類土器観察表 (1)

※ () は推定

研究 番号	掲載 番号	分類	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)		土文様・調整		新土				色調		備考			
							口径	底径	器高	外面	内面	白色 粘土	黒色 粘土	向 右	石質	質 良		石 質	外面	内面
447	1452	Ⅷ	深鉢	I 24	VI	口縁～胴部	23.3	(7.3)		ナゲ・指おさえ痕	ナゲ・指おさえ痕	○		○	○		明赤褐色	明褐色		
	1453	Ⅷ	深鉢	F 20	V a	口縁～胴部	22.2	(6.8)		ナゲ・指おさえ痕	ナゲ・指おさえ痕	○		○	○		明赤褐色	明褐色		
	1454	Ⅷ	深鉢	I 21	VI	口縁部	17.6	(6.5)		ナゲ	ナゲ	○		○	○		に高い褐色	灰黄褐色		
	1455	Ⅷ	深鉢	B 24	Ⅷ a	口縁部	18.1	(5.7)		ナゲ	ナゲ・指おさえ痕	○		○	○		黒褐色	に高い黄褐色		
	1456	Ⅷ	深鉢	H 23	VI	口縁部	32.9	(9.0)		ナゲ	ナゲ	○		○	○	○	に高い黄褐色	に高い黄褐色		
	1457	Ⅷ	深鉢	G 21	VI	口縁部	20.4	(8.3)		ナゲ	ナゲ	○		○	○		に高い褐色	褐色		
	1458	Ⅷ	深鉢	H 20	VI	口縁～胴部	31.7	(11.9)		ナゲ	ナゲ・ケズリ	○		○	○		に高い褐色	褐色		
	1459	Ⅷ	深鉢	F 20	Ⅷ	口縁部	27.2	(5.4)		ナゲ	ナゲ・ケズリ	○		○	○		灰褐色	に高い黄褐色		
	1460	Ⅷ	深鉢	F 20	VI	口縁～胴部		(8.6)		ナゲ	ナゲ・ケズリ	○		○	○		褐色	に高い黄褐色		
	448	1461	Ⅷ	深鉢	L 12	VI	口縁～胴部	16.7	(18.0)		ナゲ・ケズリ	ナゲ・ケズリ	○		○	○		明赤褐色	明赤褐色	
1462		Ⅷ	深鉢	N 19	Ⅷ上	口縁～胴部		(10.7)		ナゲ・ケズリ	ナゲ・ケズリ・指おさえ痕	○		○	○		に高い黄褐色	に高い黄褐色		
1463		Ⅷ	深鉢	F 22	VI	口縁部	27.8	(6.4)		ナゲ	ナゲ	○		○	○		黄褐色	暗灰黄		
1464		Ⅷ	深鉢	H 21	V a	口縁～胴部	27.4	(18.2)		ナゲ	ナゲ・ケズリ	○		○	○		に高い黄褐色	暗灰黄		
1465		Ⅷ	深鉢	J 17	VI	口縁部		(7.6)		ナゲ	ナゲ・指おさえ痕	○		○	○		に高い黄褐色	暗灰黄		
1466		Ⅷ	深鉢	L 19	V	口縁部		(7.6)		ナゲ・指おさえ痕	ナゲ・指おさえ痕	○		○	○		に高い黄褐色	に高い黄褐色		
1467		Ⅷ	深鉢	I 18	VI	口縁部		(4.2)		ナゲ・指おさえ痕	ナゲ・指おさえ痕	○		○	○		黒褐色	黒褐色		
1468		Ⅷ	深鉢	K 19	VI	口縁部		(4.8)		ナゲ・指おさえ痕	ナゲ・指おさえ痕	○		○	○		に高い黄褐色	に高い黄褐色		
1469		Ⅷ	深鉢	I 17	VI	口縁～胴部	25.0	(17.3)		ナゲ・指おさえ痕	ナゲ・指おさえ痕	○		○	○		に高い黄褐色	灰黄褐色		
449		1470	Ⅷ	深鉢	H 18	VI	口縁～胴部	25.0	(14.0)		ナゲ・指おさえ痕	ナゲ・指おさえ痕	○		○	○		に高い黄褐色	に高い黄褐色	
	1471	Ⅷ	深鉢	N 19	Ⅷ上	口縁～胴部	16.6	(13.4)		ナゲ・指おさえ痕	ナゲ・指おさえ痕	○		○	○		明赤褐色	灰黄褐色		
	1472	Ⅷ	深鉢	M 17	Ⅷ	口縁部		(10.1)		ナゲ・指おさえ痕	ナゲ・指おさえ痕	○		○	○		灰褐色	暗赤褐色		
	1473	Ⅷ	深鉢	K 13	Ⅷ	口縁部		(5.3)		ナゲ・指おさえ痕	ナゲ・指おさえ痕	○		○	○		黒褐色	黒褐色		
	1474	Ⅷ	深鉢	F 20	VI	口縁～胴部		(10.3)		ナゲ	ナゲ	○		○	○		褐色	に高い黄褐色		
	1475	Ⅷ	深鉢	J 17	VI	胴部		(15.5)		ナゲ・指おさえ痕	ナゲ・指おさえ痕	○		○	○		に高い褐色	黒褐色		
	1476	Ⅷ	深鉢	J 23	VI	胴部		(12.8)		ナゲ	ナゲ	○		○	○		に高い黄褐色	灰黄褐色		
	1477	Ⅷ	深鉢	I 15	VI	胴部		(11.4)		ナゲ・指おさえ痕	ナゲ・指おさえ痕	○		○	○		灰褐色	に高い赤褐色	スス付着	
	1478	Ⅷ	深鉢	E 24	VI	底部		(3.6)	(7.8)		ナゲ・ケズリ	ナゲ・ケズリ	○		○	○		に高い黄褐色	に高い黄褐色	
	1479	Ⅷ	深鉢	G 21	VI	底部		(1.3)	(4.7)		ナゲ・ケズリ	ナゲ・ケズリ	○		○	○		に高い赤褐色	に高い褐色	
450	1480	Ⅷ	鉢	I 18	Ⅷ	底部		(2.0)	(6.0)		ナゲ	ナゲ	○	○	○		褐色	褐色		
	1481	Ⅷ	深鉢	F 21	VI	底部		(2.5)	(1.7)		ナゲ	ナゲ	○		○	○		明赤褐色	明赤褐色	
	1482	Ⅷ	深鉢	M 11	VI	底部		(1.6)	(6.7)		ナゲ・ケズリ	ナゲ・ケズリ	○		○	○		褐色	灰褐色	
	1483	Ⅷ	深鉢	K 16	VI	胴部～底部		(0.4)	(7.7)		ナゲ・指おさえ痕	ナゲ・ケズリ	○		○	○		に高い黄褐色	灰黄褐色	
451	1484	Ⅷ	深鉢	N 19	Ⅷ上	胴部～底部		(0.4)	(8.0)		調整しているため不明	ナゲ	○		○	○		明褐色	明褐色	
	1485	Ⅷ	深鉢	L 16	VI	底部		(8.0)		ナゲ・指おさえ痕	ナゲ	○		○	○		明赤褐色	灰黄褐色		
	1486	Ⅷ	鉢	-	VI	底部		(3.0)	(4.5)		ナゲ・ケズリ	ナゲ・ケズリ	○		○	○		明赤褐色	明赤褐色	
	1487	Ⅷ	深鉢	F 20	Ⅷ	底部		(3.2)		ナゲ・ケズリ	ナゲ・ケズリ	○		○	○		に高い褐色	に高い褐色		

第57表 XX類土器観察表(2)

※()は推定

探検 番号	掲載 番号	分類	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)			正文部・調整		新土				色調		備考			
							口径	底径	器高	外面	内面	白色 粘土	黒色 粘土	陶質 石	石英	炭石	長石		外面	内面	
451	1488	XX	深鉢	L 20	VI	胴部～底部	15.0	(6.3)		ナデ・指おき文様	ナデ	○		○	○	○	○	黄	灰黄褐		
	1489	XX	小型 F	22	VI	底部	8.0	(5.3)		ナデ	ナデ	○		○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐	スス付着	
	1490	XX	小型 F	20	VI	底部	6.0	(4.3)		ナデ・指頭圧痕	ナデ	○	○	○	○	○	○	黄	黄		
	1491	XX	小型 G	16	VI	胴部～底部	8.4	(10.0)		ナデ	ナデ	○		○	○	○	○	黄	黄		
452	1492	XX	深鉢	J 16	VI	胴部～底部	8.6	(12.4)		ナデ	ナデ	○		○	○	○	○	にぶい黄	にぶい黄	スス付着	
	1493	XX	深鉢	K 11	VI	胴部～底部	10.6	(8.3)		ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	明赤褐	明赤褐	スス付着	
	1494	XX	深鉢	L 21	VI	胴部～底部	12.4	(9.3)		ナデ	ナデ	○		○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄		
	1495	XX	深鉢	K 18	VI	底部	9.6	(6.7)		ナデ	ナデ	○		○	○	○	○	黄	にぶい黄褐		
	1496	XX	深鉢	J 18	VI	底部	11.8	(3.2)		ナデ	ナデ	○		○	○	○	○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
	1497	XX	深鉢	N 20	VI	底部	10.0	(2.9)		ナデ	ナデ	○		○	○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
	1498	XX	深鉢	F 16	VI	底部	7.8	(2.7)		ナデ・ケズリ	ナデ	○	○	○	○	○	○	○	にぶい黄	黄	
	1499	XX	小型 F	18	VI	底部	5.4	(1.2)		ナデ	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	灰黄褐	灰黄褐	
	1500	XX	鉢	K 19	VI	口縁～底部		11.7		ナデ・指おき文様	ナデ・指おき文様	○		○	○	○	○	○	にぶい赤褐	黄	
	1501	XX	小型 K	12	VI	口縁部		6.0		ナデ・指頭圧痕	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	明赤褐	明赤褐	
1502	XX	小型 K	12	VI	胴部		(10.8)		ナデ・指頭圧痕	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	明赤褐	明赤褐		
1503	XX	小型 N	20	VI	口縁～底部	9.6	6.5	8.2	ナデ・指頭圧痕	ナデ	○		○	○	○	○	○	にぶい黄	にぶい黄		

第58表 XX類土器観察表(1)

探検 番号	掲載 番号	分類	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)			正文部・調整		新土				色調		備考				
							口径	底径	器高	外面	内面	白色 粘土	黒色 粘土	陶質 石	石英	炭石	長石		外面	内面		
454	1504	XX	深鉢	F 17	Ⅴ	口縁～胴部	24.3	(17.6)		細条線文	ナデ	○		○	○	○	○	黄	オリーブ黒	スス付着		
	1505	XX	深鉢	F 20	VI	胴部		(14.4)		細条線文	ナデ	○		○	○	○	○	黄	オリーブ黒	スス付着		
	1506	XX	深鉢	F 20	VI	底部	11.6	(3.2)		細条線文	ナデ	○		○	○	○	○	黄	オリーブ黒			
	1507	XX	深鉢	G 22	Ⅴ	胴部		(5.0)		細条線文	ナデ	○		○	○	○	○	○	黒褐	黒褐		
	1508	XX	深鉢	F 9	Ⅴ	口縁部	17.6	(4.8)		貝殻刻文文・細条線文	ナデ	○		○	○	○	○	○	黄	黒		
	1509	XX	深鉢	G 11	Ⅴ	胴部		(6.8)		貝殻刻文文・細条線文	ナデ	○		○	○	○	○	○	黄	黒褐		
	1510	XX	深鉢	I 14	VI	口縁～胴部	13.6	(6.3)		貝殻刻文文・細条線文	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	にぶい黄	黄		
455	1511	XX	深鉢	D 25	VI	口縁部		(4.6)		細条線文	ナデ	○		○	○	○	○	○	黒褐	灰黄褐		
	1512	XX	深鉢	E 19	Ⅴ	底部		(7.7)		細条線文	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	黒褐	灰黄褐		
	1513	XX	深鉢	E 19	Ⅴ	胴部～胴部		(23.8)		細条線文	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	にぶい黄	黒褐		
	1514	XX	深鉢	F 24	VI	底部	12.6	(3.2)		細条線文	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	にぶい黄	黒褐		
	1515	XX	深鉢	F 23	Ⅴ	底部	17.0	(3.3)		細条線文	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	黄	黒褐		
	1516	XX	深鉢	D 17	Ⅴ	口縁～胴部	19.6	(16.5)		細条線文	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	にぶい黄	暗褐		
	1517	XX	深鉢	E 17	Ⅴ	口縁～胴部		(7.3)		細条線文	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	黄	黒褐		
	1518	XX	深鉢	I 15	VI	口縁部		(3.7)		細条線文	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	黄	黒褐		
	1519	XX	深鉢	E 21	VI	口縁部		(5.2)		沈線文	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	黄	にぶい黄褐		
	1520	XX	深鉢	F 23	Ⅴ	口縁部		(6.4)		沈線文	ナデ	○		○	○	○	○	○	にぶい黄褐	黒褐		
456	1521	XX	深鉢	J 21	Ⅴ	口縁部		(4.4)		沈線文	ナデ	○		○	○	○	○	○	黄	黄		
	1522	XX	深鉢	F 16	VI	口縁部	17.3	(5.8)		沈線文	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	にぶい黄	にぶい黄		
	1523	XX	深鉢	H 18	VI	口縁部		(4.3)		沈線文	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	黒褐	にぶい黄		
	1524	XX	深鉢	D 20	VI	口縁部	20.4	(3.3)		沈線文	沈線文・ナデ	○		○	○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐		
	1525	XX	深鉢	H 17	Ⅴ	口縁部		(5.3)		沈線文	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
	1526	XX	深鉢	I 12	Ⅴ	口縁部	13.8	(3.7)		沈線文	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	にぶい黄	黒褐	
	1527	XX	深鉢	D 20	Ⅴ	口縁部	7.4	(4.1)		沈線文	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	黒褐	黒褐	
	1528	XX	深鉢	J 15	VI	口縁～胴部	22.4	(15.8)		沈線	ナデ・指おき文様	○		○	○	○	○	○	○	黄	黄	
	1529	XX	深鉢	J 15	Ⅴ	口縁部		(6.0)		沈線	ナデ・指おき文様	○		○	○	○	○	○	○	黒褐	黒褐	
	1530	XX	深鉢	J 15	VI	口縁部		(11.6)		沈線文	ナデ	○		○	○	○	○	○	○	黄	黄	
1531	XX	深鉢	J 16	VI	口縁部		(4.8)		沈線文	ナデ	○		○	○	○	○	○	○	暗黄	にぶい黄		
1532	XX	深鉢	J 15	VI	口縁部		(4.2)		沈線文	ナデ	○		○	○	○	○	○	○	黄	暗黄	暗黄孔有り	
1533	XX	深鉢	G 16	Ⅴ	口縁～胴部	8.8	(6.3)		沈線文	ナデ・ケズリ	○		○	○	○	○	○	○	黄	にぶい黄		

第59表 XX類土器観察表(2)

※()は推定

地域 番号	発掘 番号	分類	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)		土文様・調整				胎土				色調		備考			
							口径	底径	器高	外面	内面	白色 粘土	黒色 粘土	内間 石	石灰	炭石	灰石	外面		内面		
456	1534	XX	深鉢	B 23	VII	口縁部	13.4	(13.8)	沈澱文	ナゾ												
	1535	XX	深鉢	B 18	VII	口縁部		(9.3)	沈澱文	ナゾ・ケズリ												
	1536	XX	深鉢	W 12	VII	口縁→胴部	11.9	(9.8)	沈澱文	ナゾ・ケズリ											スス付着	
	1537	XX	深鉢	F 23	VII	口縁部		(6.4)	貝殻刺突文・貝殻刺突文	ケズリ												
	1538	XX	深鉢	W 16	VII	口縁部		(5.5)	沈澱文	ナゾ												細粒孔有り
	1539	XX	深鉢	N 18	VII	胴部	8.0	(19.1)	沈澱文	ナゾ・指おさえ痕												
	1540	XX	小型	W 10	VI	口縁→底部	8.6	5.6	12.0	沈澱文	ナゾ・指おさえ痕											
	1541	XX	深鉢	B 18	VII	口縁部		(6.8)	刺突文	ナゾ												
	1542	XX	深鉢	L 17	VII	口縁部		(4.2)	刺突文	ナゾ												
	1543	XX	深鉢	K 12	VI	口縁部		(4.1)	刺突文	ナゾ												
1544	XX	深鉢	L 16	VII	胴部		(14.0)	刺突文	ナゾ													
1545	XX	深鉢	J 13	VII	胴部		(12.8)	刺突文	ナゾ													
1546	XX	深鉢	G 19	VII	胴部		(9.2)	刺突文	ナゾ													
1547	XX	深鉢	K 11	VI	胴部		(9.6)	刺突文	ナゾ													
1548	XX	深鉢	F 9	VII	口縁部		(5.0)	刺突文	ナゾ													
1549	XX	深鉢	F 10	VI	口縁部		(3.3)	刺突文	ナゾ													
1550	XX	深鉢	H 19	VII	口縁部	11.0	(4.5)	刺突文	ナゾ・ケズリ													
1551	XX	深鉢	H 21	VI	口縁部		(4.5)	刺突文	ナゾ・ケズリ													
1552	XX	深鉢	I 22	VI	胴部		(7.7)	刺突文	ナゾ・ケズリ													
1553	XX	深鉢	E 10	VII	胴部		(9.2)	刺突文	ナゾ													
1554	XX	深鉢	H 19	VI	底部	13.8	(11.2)	刺突文	ナゾ・指おさえ痕													
1555	XX	深鉢	B 25	VII	口縁→胴部		(4.2)	刺突文	ナゾ													
1556	XX	深鉢	F 25	VII	口縁部		(7.2)	刺突文	ケズリ													
1557	XX	深鉢	H 17	VII	口縁→胴部	13.6	(9.6)	刺突文	ナゾ													
1558	XX	深鉢	H 22	VI	口縁→胴部	16.0	(16.0)	刺突文	貝殻刺突文													
1559	XX	深鉢	E 19	VI	口縁部		(4.6)	刺突文・刺突文	ナゾ・ケズリ													
1560	XX	深鉢	G 13	VII	胴部		(7.9)	刺突文・刺突文	ナゾ													
1561	XX	深鉢	N 18	VII	底部	8.4	(7.2)	沈澱文	ナゾ													
1562	XX	深鉢	G 22	VII	底部	11.4	(1.6)	ナゾ	貝殻刺突文													
1563	XX	深鉢	H 20	VII	底部		(1.6)	貝殻刺突文	ナゾ・指おさえ痕													
1564	XX	深鉢	G 21	VII	底部	10.6	(2.1)	貝殻刺突文	ナゾ													
1565	XX	深鉢	H 22	VI	底部	6.4	(7.7)	ナゾ	ナゾ													

第60表 土製品観察表

※()は推定

地域 番号	発掘 番号	分類	器種	出土区	層位	法量 (cm)		重量 (g)	土文様・調整				胎土				色調		備考			
						表面径	厚さ		外面	内面	白色 粘土	黒色 粘土	内間 石	石灰	炭石	灰石	外面	内面				
461	1566	—	耳栓状土製品	G 20	VI	(8.0)	(2.4)	25.5	ナゾ	ナゾ												
	1567	—	耳栓状土製品	G 21	VII	(7.2)	(1.0)	6.2	ナゾ	ナゾ												
	1568	—	耳栓状土製品	F 22	VI	(6.0)	(3.3)	43.7	ナゾ	ナゾ												
	1569	—	円盤状土製品	I 22	VII	4.5	1.2	38.0	ナゾ	ナゾ												
	1570	—	円盤状土製品	H 21	胴部	2.7	0.8	7.9	刺突文	ナゾ											一部欠損小型	
	1571	—	円盤状土製品	F 20	VII	4.9	1.4	52.9	ナゾ	ナゾ												
	1572	—	円盤状土製品	F 22	VI	4.1	0.7	15.2	刺突文・沈澱文	ナゾ												
	1573	—	円盤状土製品	H 14	VII	4.5	1.0	23.2	条痕文	ナゾ												
	1574	—	円盤状土製品	F 24	VI	5.3	0.9	38.8	貝殻刺突文・刺突文	ナゾ												一部欠損
	1575	—	円盤状土製品	I 21	VI	5.3	1.2	38.5	貝殻刺突文	ナゾ												
1576	—	円盤状土製品	G 19	VI	3.7	0.7	12.3	縄文	ナゾ													

3 石器

石器はⅦ・Ⅵ層とも調査区の北東側を中心に出土した。調査区内には数箇所の石器集中域がみられるが、エリア認定には至らなかったため、ここでは層位及び器種ごとに報告する。

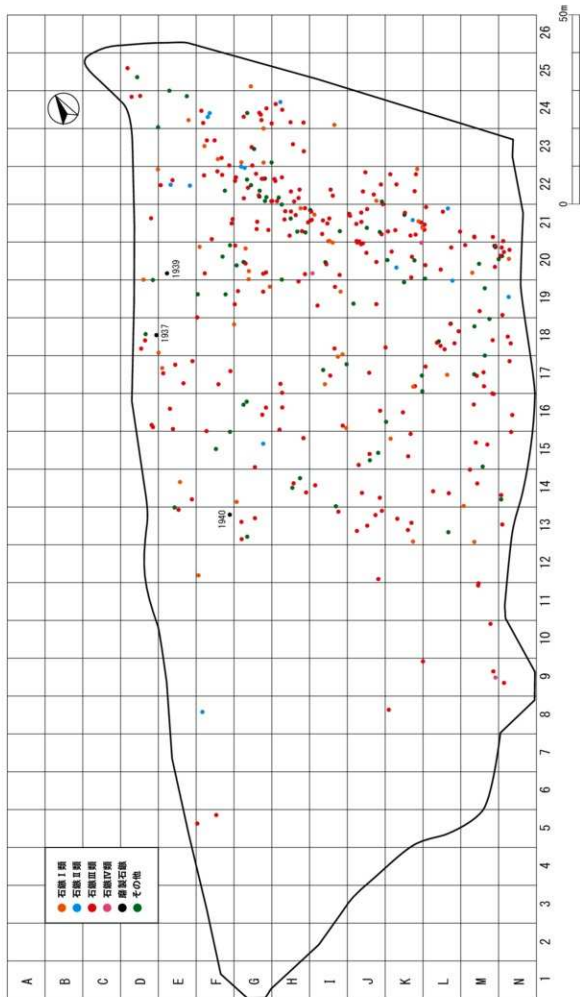
また、石材分類及び石器組成は第 61・62 表、出土状況はⅦ層が第 462・463 図、Ⅵ層が第 512・513 図のとおりである。

第 61 表 天神段遺跡における石材分類

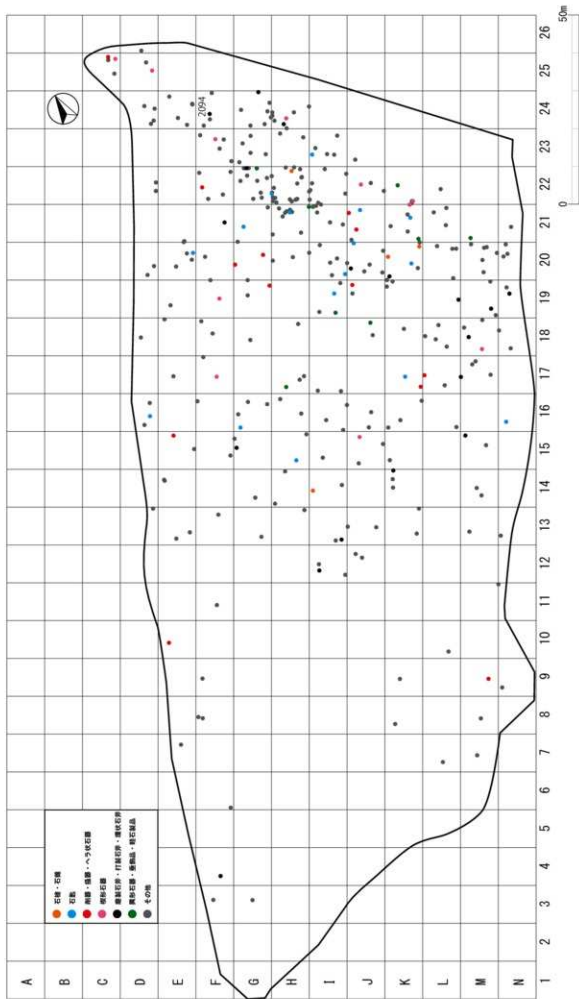
石材	分類	特徴
黒曜石	OB 1	黒色でほとんど光を透過せず、透明感がないもの。わずかに不純物を含む。土牛鼻
	OB 2	粒径の小さい不純物が均一に入る。黒色～灰色で織状の構造を有するものもある。日東・五女木
	OB 3	粒径のやや大きい不純物がまばらに入る。黒色～灰色を基本とし、わずかにアメ色を帯びるものもある。三船
	OB 4	不純物を少量あるいはほとんど含まず、透明度が高い。アメ色～黒色を呈する。桑ノ木津留
	OB 5	不純物をほとんど含まず、良質。黒色でガラス質の光沢を有する。腰岳
	OB 6	不純物をほとんど含まず、良質。青灰色を呈し、透明度は低い。針尾・宍塚
	OB 7	不純物をほとんど含まず、良質。乳白～灰色を呈し、やや透明感がある。姫島
	OB 8	上記の分類に当てはまらず、判別が困難なもの。不明
安山岩 チャート	AN	黒灰色を主体に色調は様々で、緻密なものや多孔質のものがあり、共通して珪晶が目立つ。
	CH	黒灰・灰・青灰色。油脂光沢があり、黒色・灰色・白色の筋が入る。
玉髓	CC 1	赤褐色あるいは明黄褐色で硬質。節理面に結晶構造が残存するものはあるが、ほとんどが不純物を含まず、硬質かつ良質で光沢をもつ。メノウ、鉄石英を含む。
	CC 2	灰白・乳白色。不純物をほとんど含まず、硬質。筋状あるいは斑状に黒～灰色の色調を含むものもある。
	CC 3	灰白・乳白・赤白色。結晶構造が明瞭で、不均質。節理面には石英が発達する。
頁岩	SH	黒～暗灰色。硬質で緻密なものや、節理が発達するものなど様々である。
ホルンフェルス	HF	黒灰～青灰色。やや粒子の粗く、節理が発達し層状に剥落するもの。
粘板岩	CL	灰～青灰色。層状構造をなし、薄く剥落するもの。
水晶	CR	基質が透明もしくは白色で透明感があり、良質なものや、基質が白色でやや粗質なもの。
花崗岩	GR	石英・カリ長石・雲母・角閃石・輝石などを主成分鉱物として含む。
砂岩	SA	砂粒・石英粒が集まって固まった堆積岩の一種。
凝灰岩	TU	気泡を多く含み、密度が低く軽い。軟質。

第 62 表 Ⅶ・Ⅵ層出土石器組成表

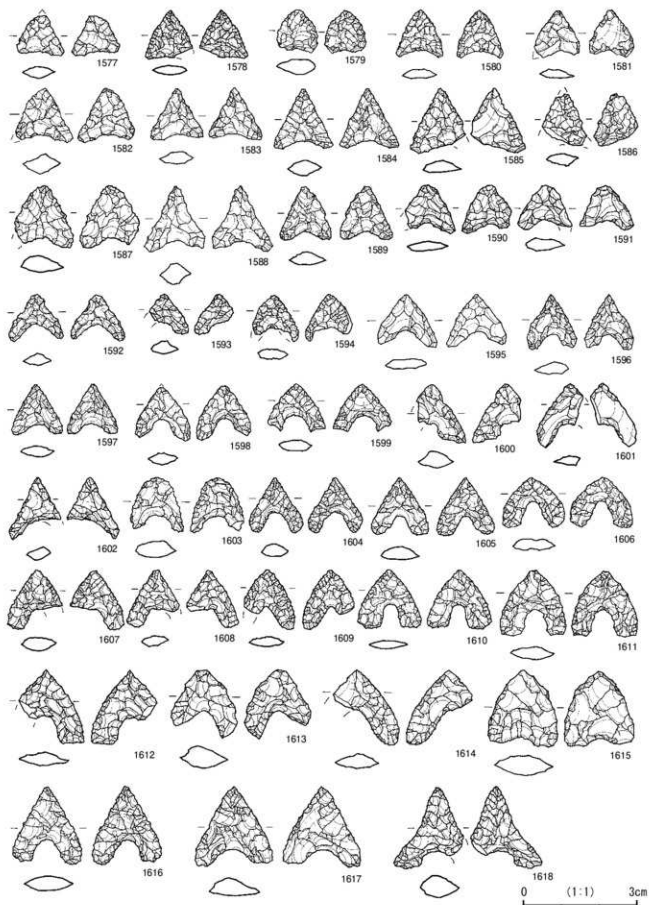
器種	Ⅶ層												Ⅵ層											
	OB	AN	CH	CC	SH	HF	CL	CR	GR	SA	TU	不明	OB	AN	CH	CC	SH	HF	CL	CR	GR	SA	TU	不明
打製石鏃	111	106	93	16	31			2			1		308	353	209	23	54	2					5	
磨製石鏃				1	3								1			1								
石槍		2											2			1								
石錐		2											3	3		1								
小型両面加工石器													2	2	2	1	4						2	
石匙	2	11	3										3	41	12	2	5	2	1					
削器		3	3	1	1	1							4	13	4	1	1	3						
鏃器				1							1		1		1									
フタミ状石器													1											
彫器																2	2		1					
ヘラ状石器		1														2			1					
楔形石器	3	2	4			1		1					7	5	3									
二次加工剥片	11	15	17	1	6					1			26	41	16	1	7	2						
鏃器		4				7					2		4			1	5					4		
石槌類	17	4		3	2	1		1					14	2	1		4	1		1		1		
磨製石斧		2			4	7											3	14				1		1
打製石斧					1	4									1			1	4					
環状石斧					1																			
石皿		2							2	1	6											4	1	13
砥石																							1	3
石錘					1																			3
砥石		39			3	1		1	2							10		1	1					5
磨・砥石		23						6	12	1						55						2	12	1
磨石		51						2	11	1						55						3	2	2
異形石器	2	2														1	4		1					
垂飾品					3																			1
ペットストーン																1								
軽石製品											1													3
合計	148	267	120	22	57	22	0	5	12	27	10	1	370	595	250	28	85	36	1	8	10	32	16	5



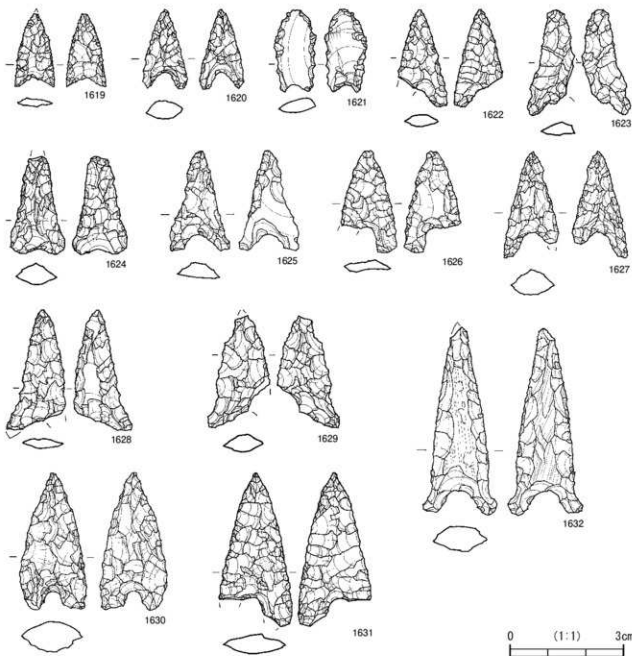
第 462 図 V層出土石器出土分布図 (石器)



第 463 図 ヨ Yayoi 出土石器出土分布図 (石鐮以外)



第 464 图 VI 层出土石器 (1)



第 465 図 VII層出土石器 (2)

VII層出土の石器 (第 464 ~ 511 図)

(1) 打製石鏃 (第 464 ~ 477 図 1577 ~ 1936)

剥片を素材とし、両側縁部に両面から押圧剥離を施す、小型から中型の三角形状の石器群を石鏃とした。そのうち、打製石鏃は欠損品や未製品も合わせて 360 点図化した。形態的特徴や大きさなどから、以下のように分類した。この分類はVI層出土の打製石鏃も共通する。

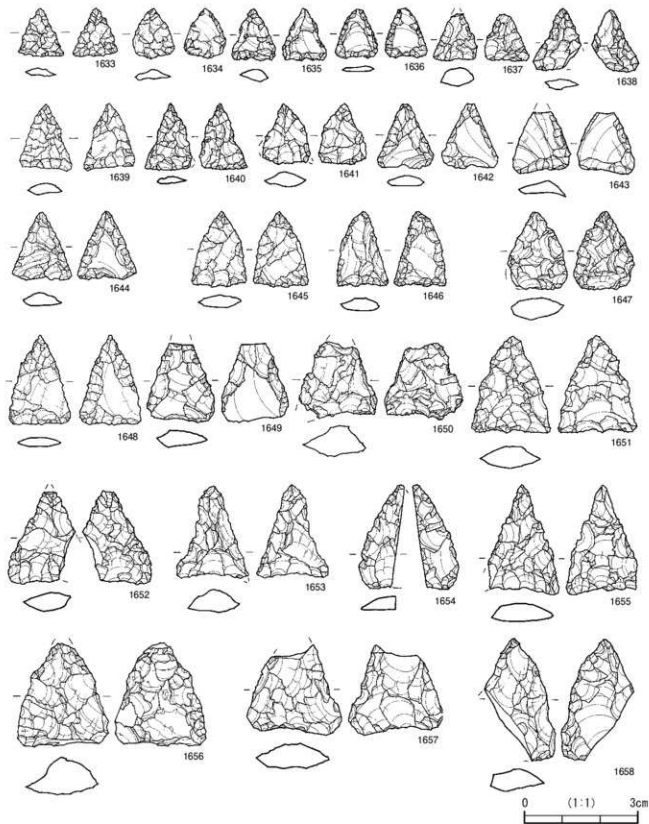
- I 類 正三角形鏃
- II 類 長身鏃
- III 類 二等辺三角形鏃
- IV 類 五角形鏃

V 類 欠損品

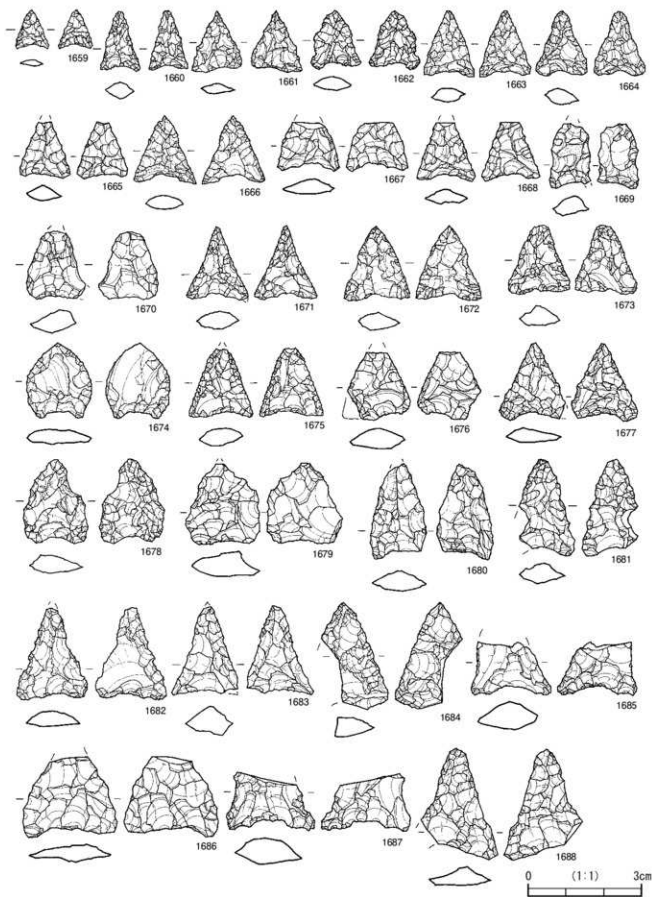
VI 類 未製品

さらに、I ~ IV 類は基部の形態から 5 つに細分した。

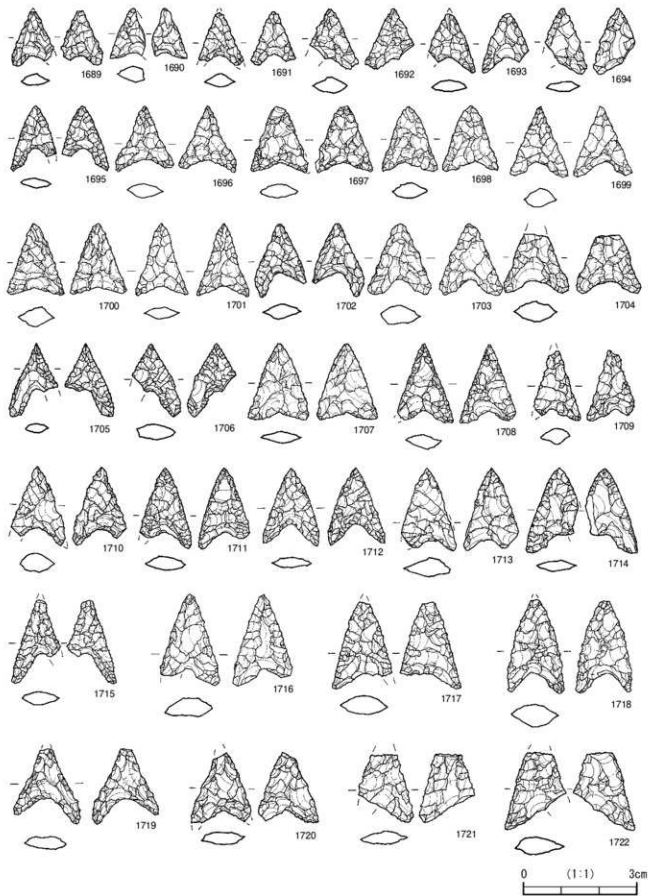
- a 基部が平坦で抉りのないもの
- b 基部の抉りが浅いもの
- c 基部の抉りが外に開き、脚部の先端が尖るもの
- d 基部の抉りが「U」字形で、脚部の先端が平らなもの
- e 基部の抉りが「U」字形で、脚部の先端が尖るものの



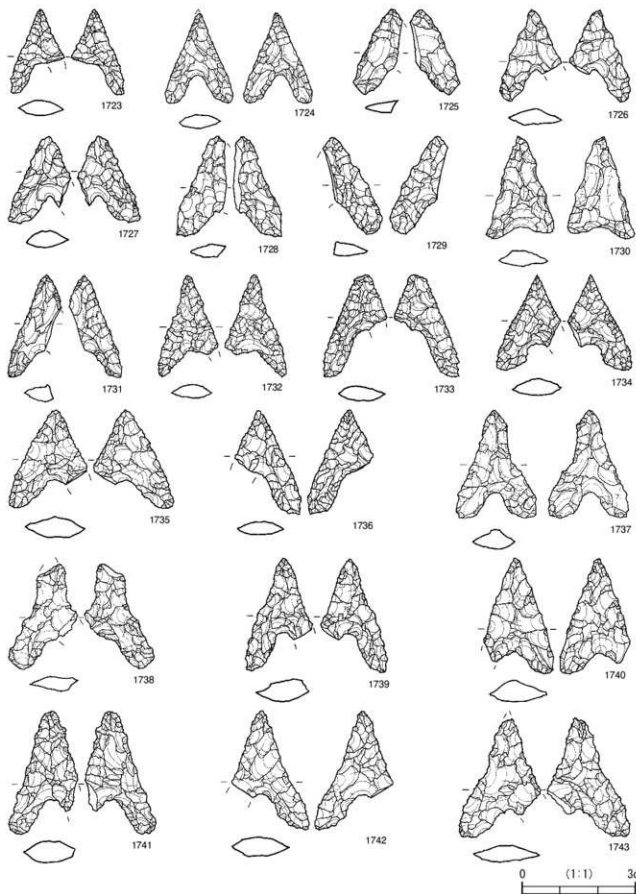
第 466 图 VII 层出土石器 (3)



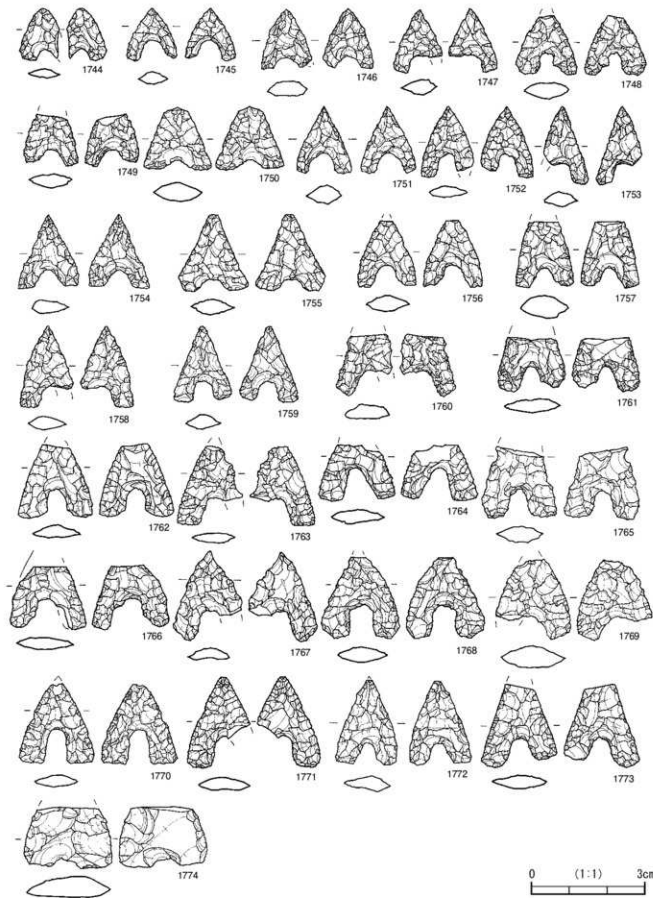
第 467 图 VII 层出土石器 (4)



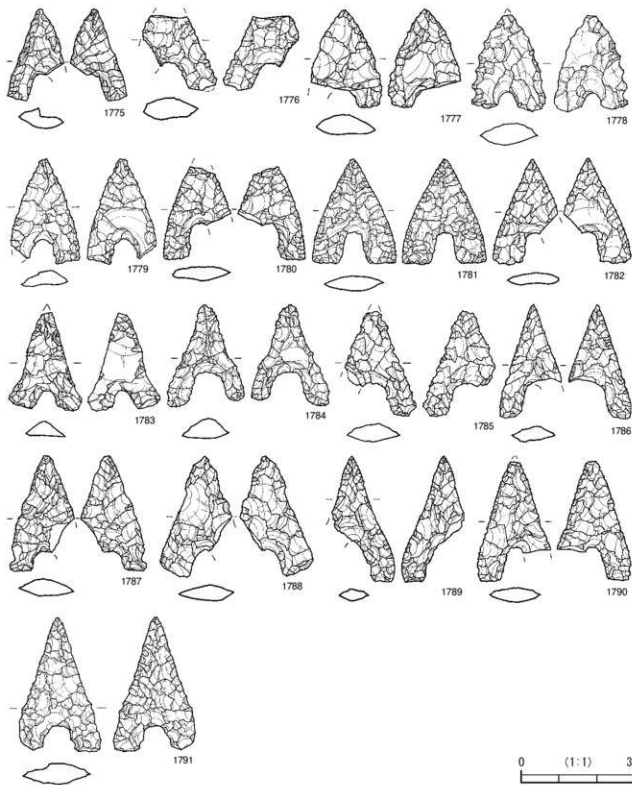
第 468 图 VII 层出土石器 (5)



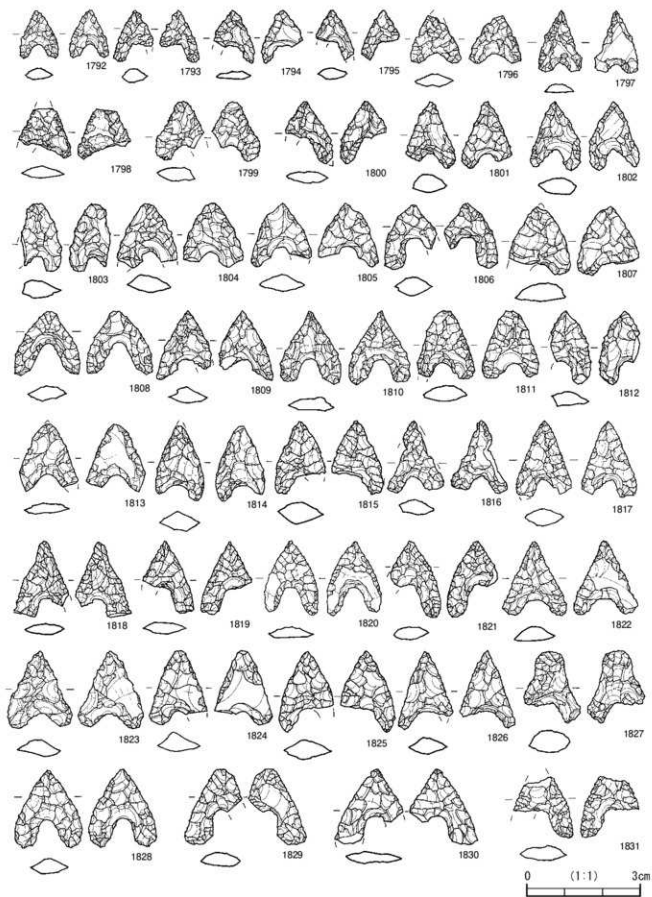
第 469 图 VII 层出土石器 (6)



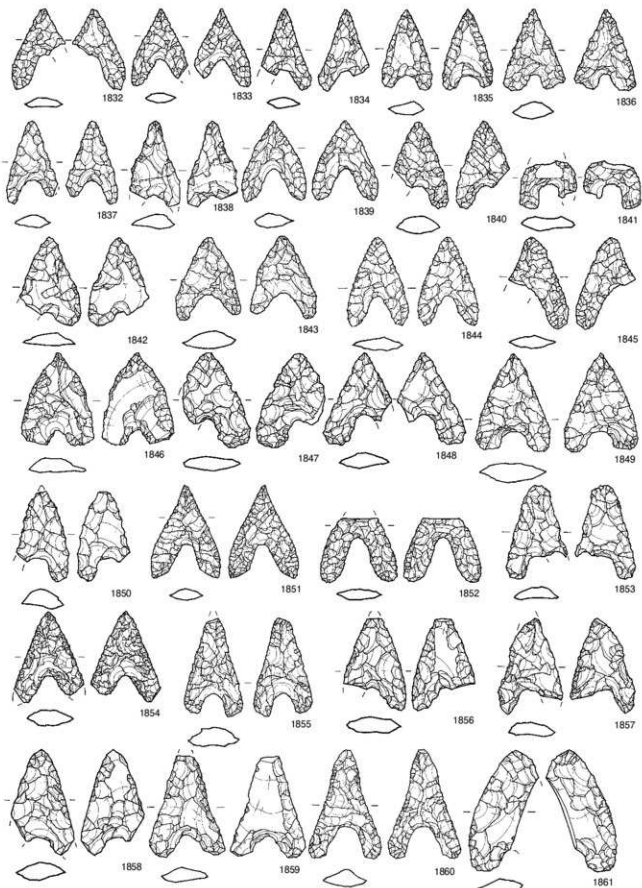
第 470 图 VII 层出土石器 (7)



第 471 图 VII 层出土石器 (8)

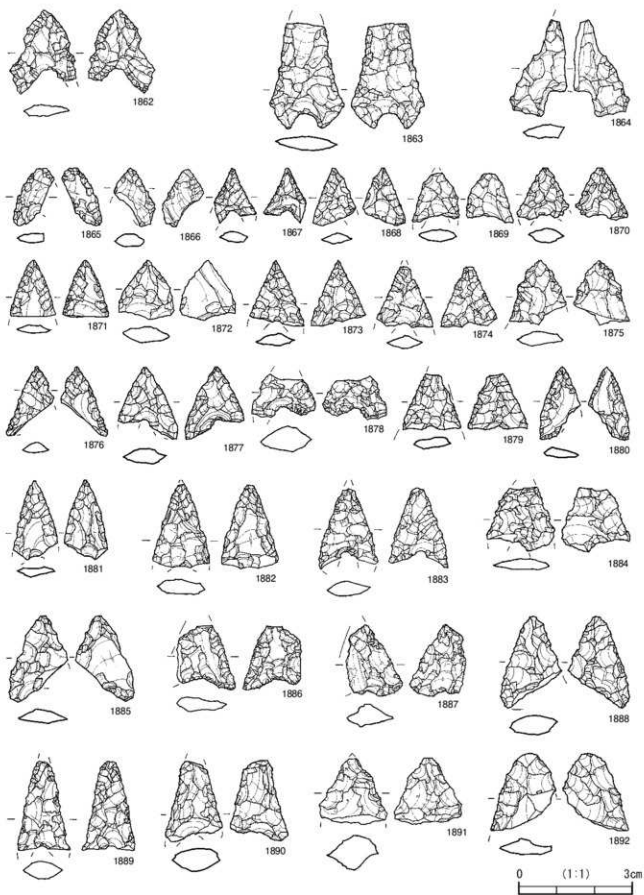


第 472 图 VII 层出土石器 (9)

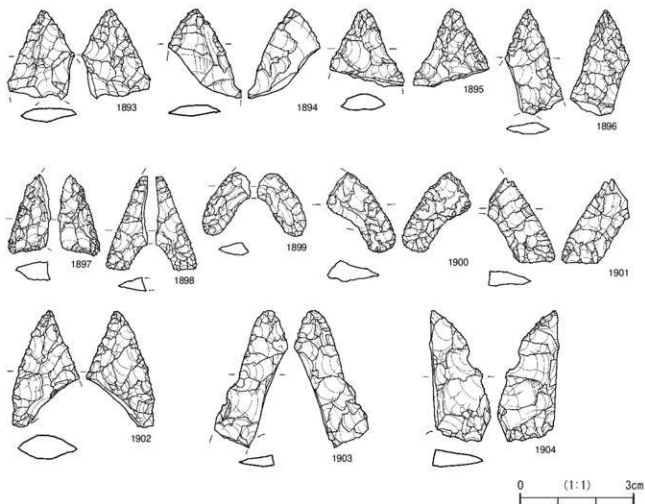


第 473 图 VII 层出土石器 (10)





第 474 图 VII 层出土石器 (11)



第 475 図 VII層出土石器 (12)

I類 (第 464 図 1577 ~ 1618)

I類は全体の形状が正三角形を呈するもので、42点図化した。桑ノ木津留や上牛鼻、針尾・淀姫、腰岳産の黒曜石のほか、安山岩やチャート、玉髓等を素材とする。基部の形態は1577～1579はa類、1580～1591・1615はb類、1592はc類、1610～1612・1618はd類、残りはe類である。側縁部が直線的なものだけでなく、1606・1610～1615のように丸味を帯びるものや、1618のようにくびれるものも見られる。1603の先端部は丸く作出し、1610・1612はチャート製の鍔形織である。

II類 (第 465 図 1619 ~ 1632)

II類は側縁部の長さが幅の2倍以上あるもので、全体の形状が二等辺三角形を呈するものを長身織とし、14点図化した。安山岩を素材とするものが多く、a類は見られない。1632は先端部が欠損しているものの、長さが4.94cmあり、V・VI類を除くと最大長である。基部は「U」字状の挟りを持ち、脚部の先端は丸く作り出すことから、トロトロ石器の可能性が高い。

III類 (第 466 ~ 473 図 1633 ~ 1861)

III類は側縁部の長さが幅を上回る形状で、全体の形状は二等辺三角形を呈するものを二等辺三角形織とし、229点図化した。安山岩とチャートを素材とするものが多いが、上牛鼻や日東、三船、桑ノ木津留、腰岳、針尾・淀姫、姫島産黒曜石も使用し、玉髓と頁岩は少ない。

III a類 (第 466 図 1633 ~ 1658)

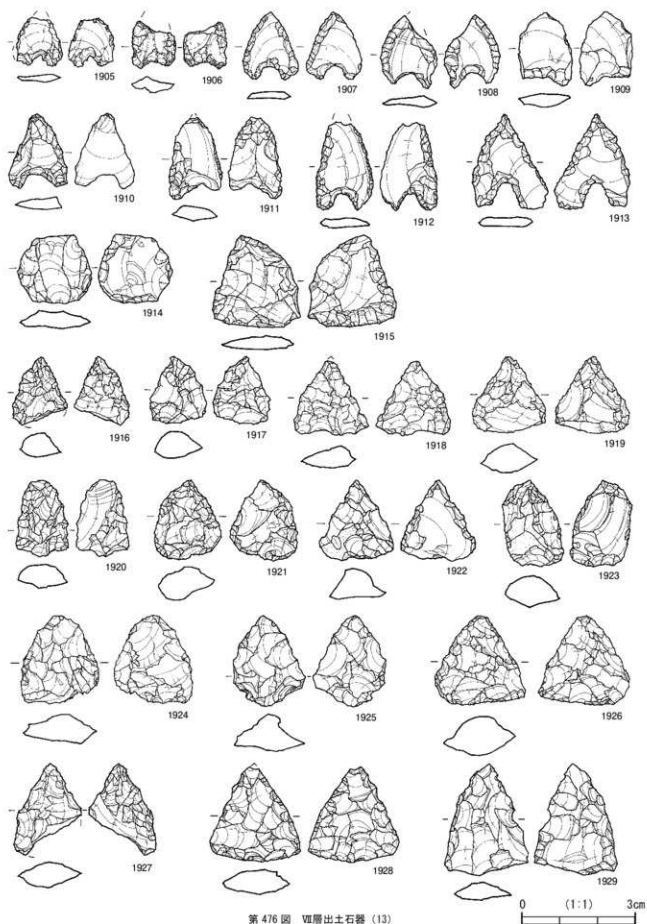
1633～1658は基部が平坦で、挟りが無いものである。1633～1635は桑ノ木津留産黒曜石を使用する。1641・1646は非対称である。1656は基部の一部が欠損し、基部の厚みも1.1cmあるため、III a類ではない可能性がある。

III b類 (第 467 図 1659 ~ 1688)

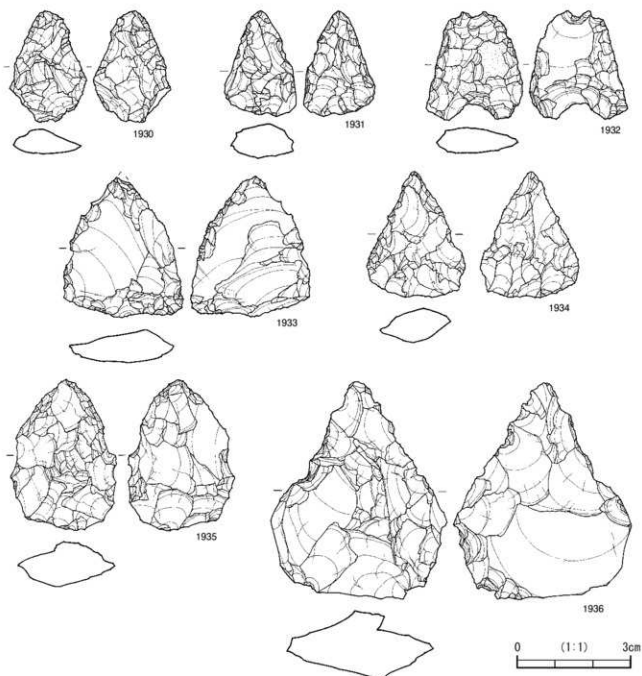
1659～1688は基部の挟りが浅いものである。1659はVII・VI層出土の石織の中で最小であり、長さは1.0cmである。1674は側縁部が丸味を帯び、押圧剝離は表面に集中し、裏面は主要剝離面を残す。

III c類 (第 468・469 図 1689 ~ 1743)

1689～1743は基部の挟りが外に開き、脚部の先端が尖るものである。長さ2cm前後のものが多く、側縁部も直線的である。1702は非対称で、1718は厚みがある。



第 476 图 VII 层出土石器 (13)



第 477 図 VII層出土石器 (14)

III d 類 (第 470・471 図 1744 ~ 1791)

1744 ~ 1791 は基部の抉りが「U」字状で、脚部の先端が平らなもので、鉾形鏃を含む。安山岩とチャート以外では、針尾・淀姫産黒曜石を素材とするものが多い。先端部は鋭いものが多く、側縁部は直線的だが、脚部付近では丸味を帯びる。また、基部の抉りは 1774 のように浅いものから、深いものまである。1778 は側縁部が鋸歯状になる。

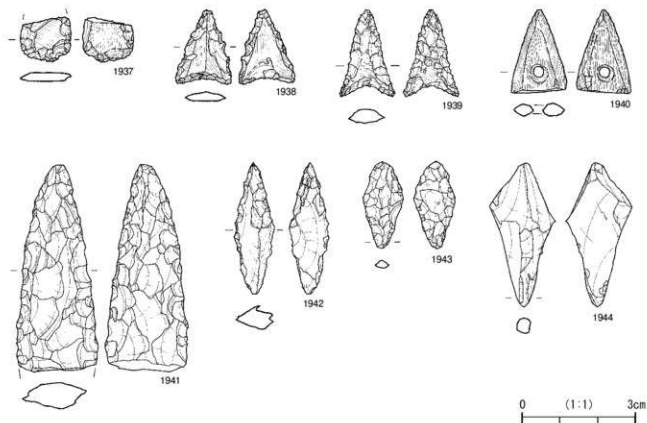
III e 類 (第 472・473 図 1792 ~ 1861)

1792 ~ 1861 は基部の抉りが「U」字状で、脚部の先

端が尖るものである。側縁部は直線的なものも多く、先端部は錐状に鋭いものもある。1800 と 1810 は相似し、1811 と 1827 は先端部が丸い。1824 や 1859 のように裏面に主要剥離面を大きく残すものもある。1843 は左右非対称で、1844 は赤褐色の玉髓を素材とする。

IV 類 (第 474 図 1862 ~ 1864)

IV 類は全体の形状が五角形を呈するものである。3 点図化した。1862 は腰岳産黒曜石の五角形鏃で、基部のほか側縁部にも抉りをもつ。1863 は頁岩を使用し、先端部は欠損している。1864 は大部分を欠損するが、腰部の位



第478図 VII層出土石器(15)

置等から五角形鏃に含めた。

V類 (第474・475図 1865～1904)

V類はI～IV類に当てはまらないもの及び欠損のため全体の形状が不明なものを一括した。1865～1896・1902～1904は基部や脚部等が欠損し、1897～1901は脚部のみ残存する。

VI類 (第476・477図 1905～1936)

VI類は未製品の資料で、1905～1910は体部は薄く、剥離面を多く残し、剥片鏃に近い。1905～1913は基部に抉りをもち、1914・1915は平基である。1911～1913は脚部の形状が左右で異なる。

1916～1936は体部に厚みがあり、剥離面を多く残す。1922・1923・1932は表面に自然面を残す。1925・1930は基部が凸基となる。1936は頁岩を素材とし、長さ5.75cm、厚さ1.8cmを測り、Ⅶ・Ⅵ層出土の打製石鏃の中で最大である。

(2) 磨製石鏃 (第478図 1937～1940)

磨製石鏃は剥片を素材とし、そのまま研磨して仕上げられるものと、剥離調整を施した後に研磨仕上げを行うものがある。4点図化し、1937～1939は局部磨製石鏃である。1937は先端部が欠損し、1937・1938は頁岩、1939は玉髓を素材とする。表裏面とも丁寧に研磨され、両側縁及び基部は鋸歯状に加工が施される。1940は頁岩を使用し、

両面は丁寧に研磨され、体部に穿孔を施す。

(3) 石槍 (第478図 1941・1942)

剥片を素材とし、両面調整加工により断面凸レンズ状に仕上げ、先端部を作出したものを石槍とし、2点図化した。1941・1942は安山岩を使用し、1941は下部が欠損するが、柳葉状を呈すると考えられる。1942はナイフ形石器の可能性もある。

(4) 石鏃 (第478図 1943・1944)

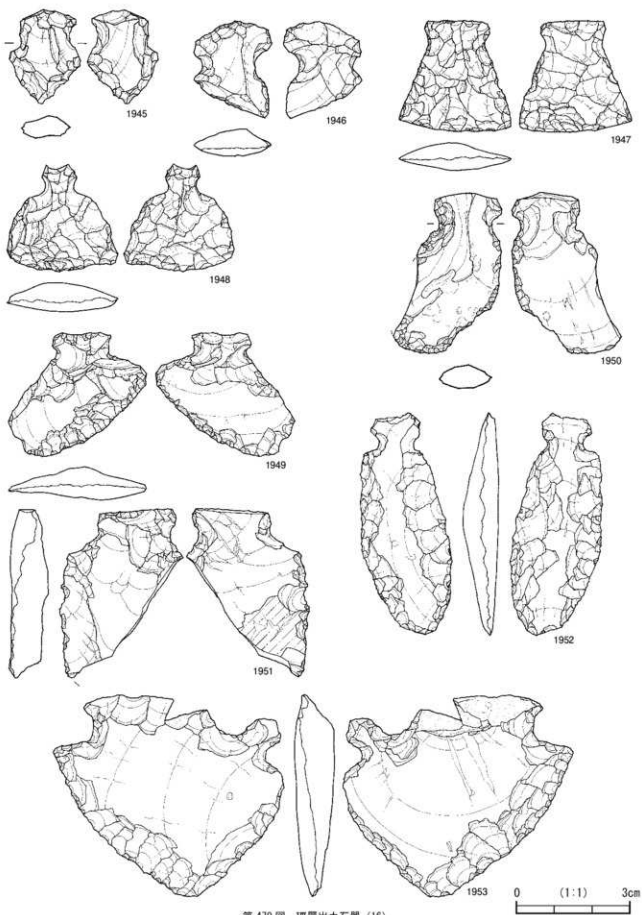
小振りな先端部を作り出して成形し、錐部とする石器群を石鏃とした。1943は安山岩、1944は日東産黒曜石を使用し、先端部に摩耗痕が残る。

(5) 石匙 (第479・480図 1945～1960)

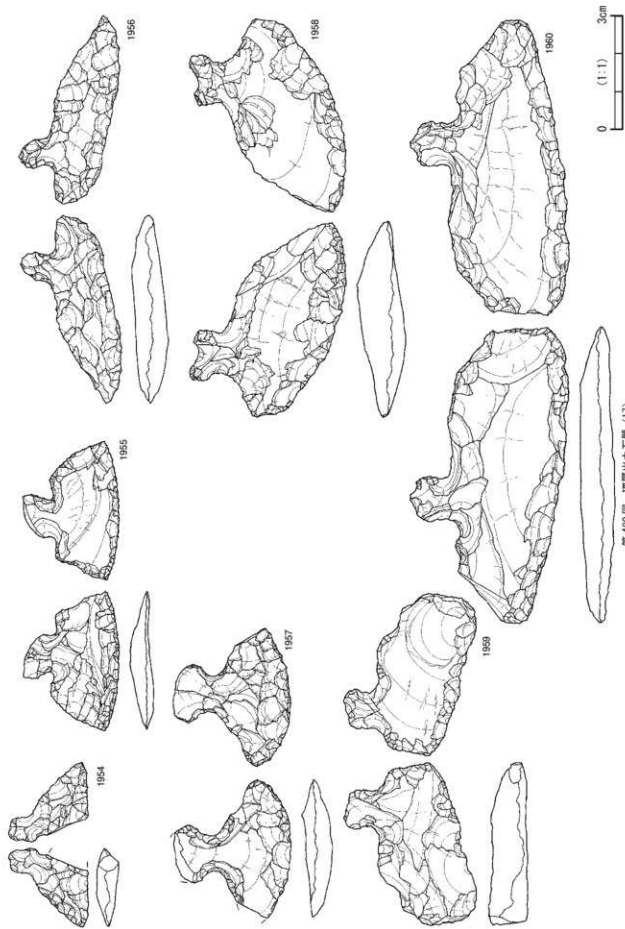
剥片を素材とし、つまみ部を作出するための左右対称となるノッチ状の抉りがあり、押圧剥離により片面もしくは両面調整の刃部を有するものを石匙とした。16点図化し、1945～1953は縦型、1954～1960は横型である。使用石材は安山岩及びチャートであり、1954のみ針尾・淀姫産黒曜石である。1946はリダクション石器と考えられ、1948・1958はつまみ部の頂部にも抉りをもつ。体部の大部分を欠損した1951・1954を除くと、刃部は直刃・丸刃・斜刃のそれぞれが見られる。

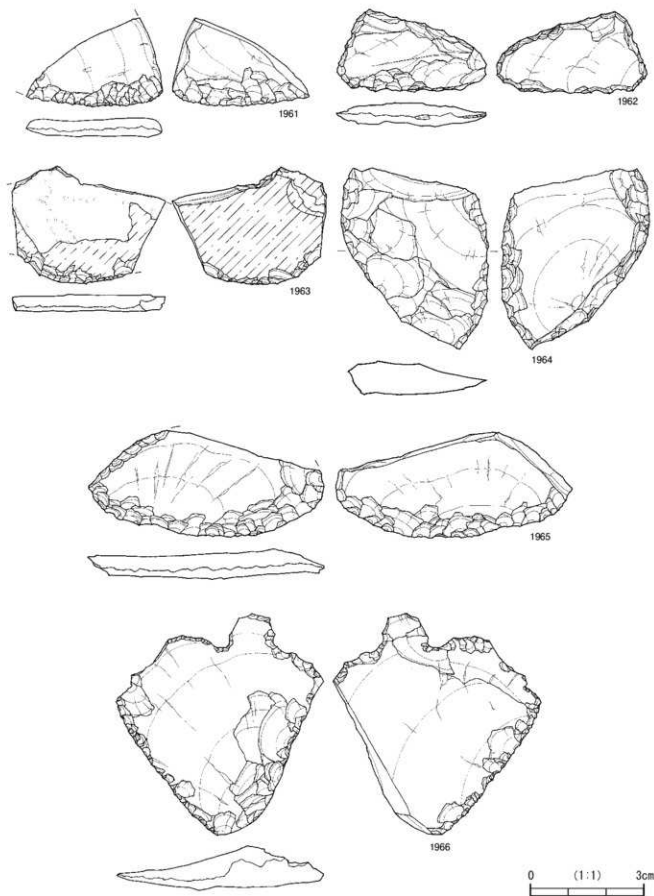
(6) 削器 (第481・482図 1961～1969)

剥片の縁辺部などに二次加工を行い、刃部整形を施

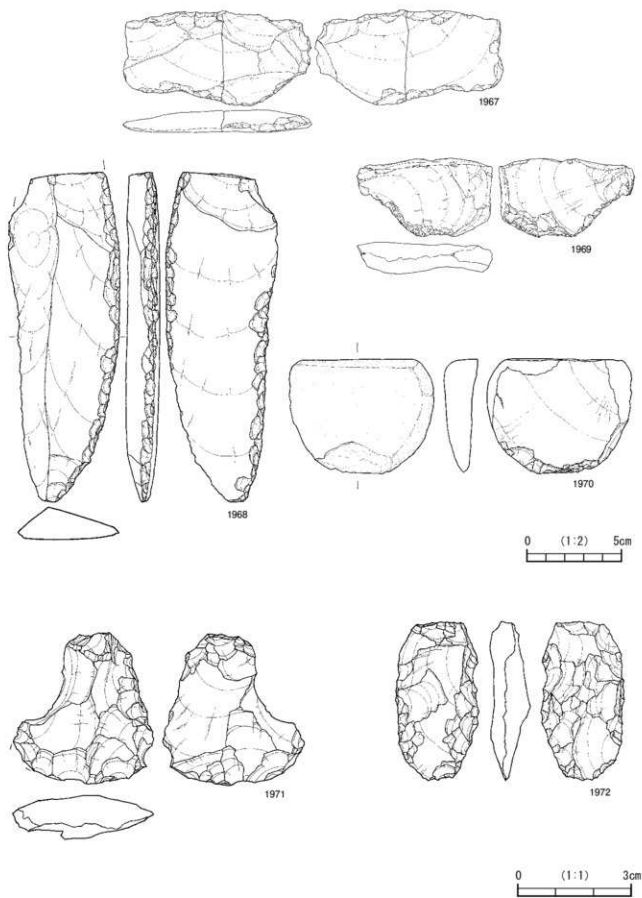


第 479 图 VII 层出土石器 (16)

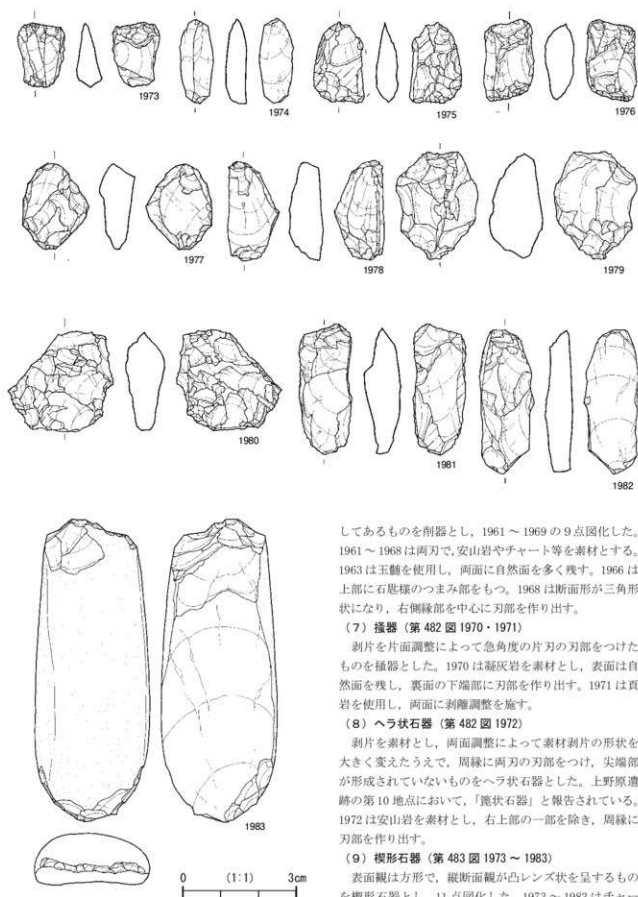




第 481 图 VII 层出土石器 (18)



第 482 图 VII 层出土石器 (19)



第483図 VII層出土石器(20)

してあるものを削器とし、1961～1969の9点図化した。1961～1968は両刃で、安山岩やチャート等を素材とする。1963は玉髄を使用し、両面に自然面を多く残す。1966は上部に石匙様のつまみ部をもつ。1968は断面形が三角形形状になり、右側縁部を中心に刃部を作り出す。

(7) 掻器(第482図1970・1971)

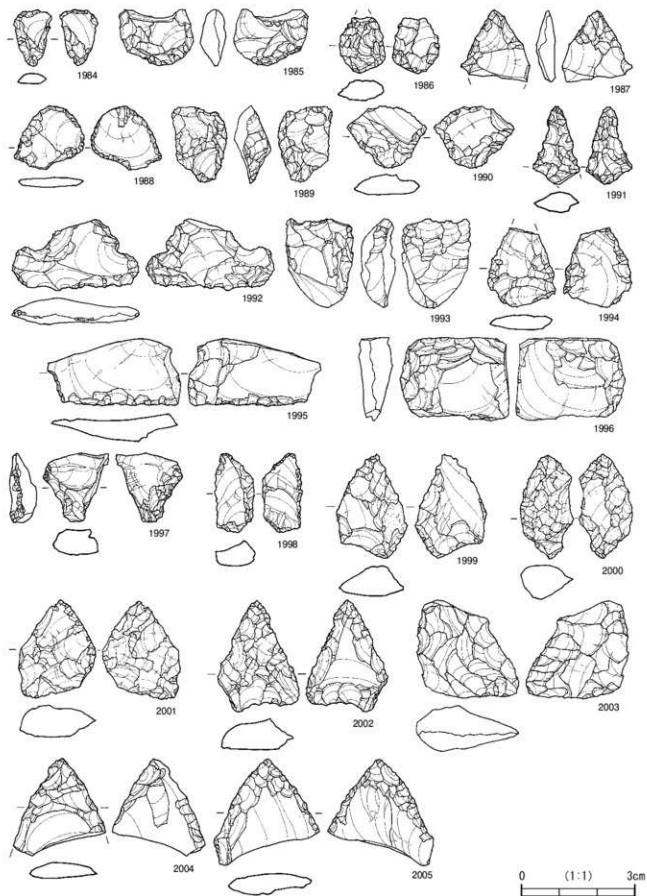
剥片を片面調整によって急角度の片刃の刃部をつけたものを掻器とした。1970は凝灰岩を素材とし、表面は自然面を残し、裏面の下端部に刃部を作り出す。1971は頁岩を使用し、両面に剥離調整を施す。

(8) ヘラ状石器(第482図1972)

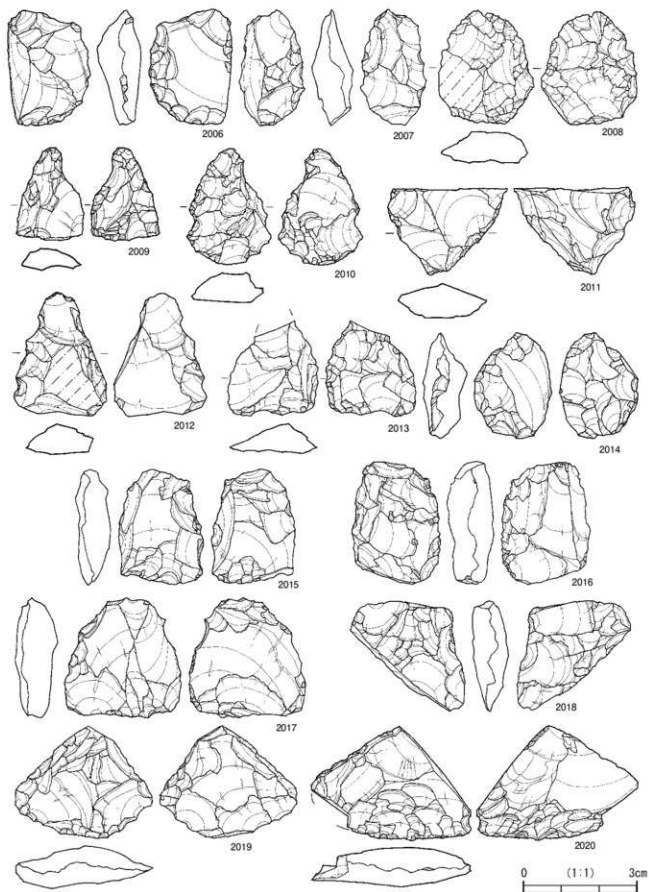
剥片を素材とし、両面調整によって素材剥片の形状を大きく変えたうえで、周縁に両刃の刃部をつけ、尖端部が形成されていないものをヘラ状石器とした。上野原遺跡の第10地点において、「筥状石器」と報告されている。1972は安山岩を素材とし、右上部の一部を除き、周縁に刃部を作り出す。

(9) 楔形石器(第483図1973～1983)

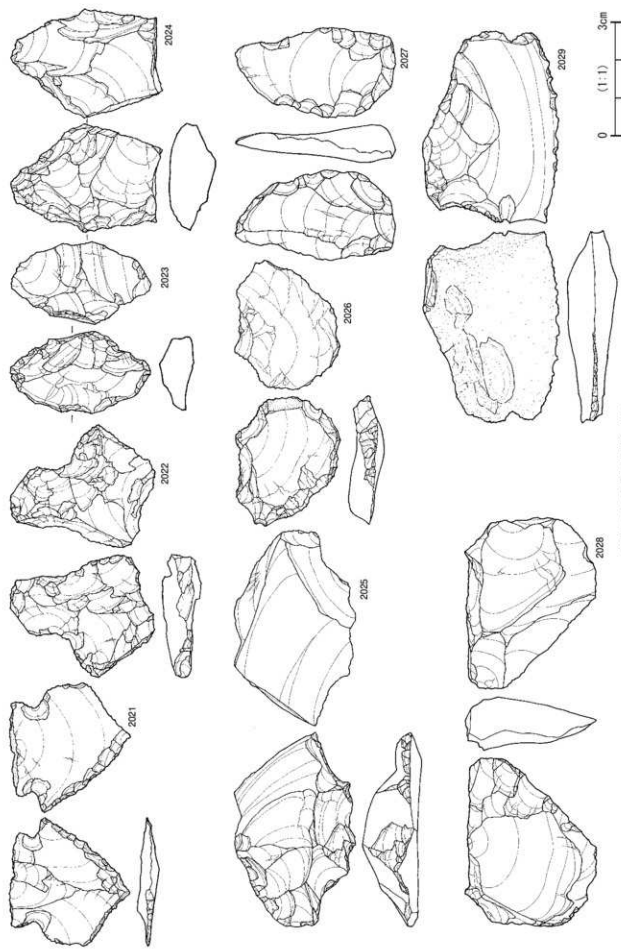
表面観は方形で、縦断面観が凸レンズ状を呈するものを楔形石器とし、11点図化した。1973～1983はチャートや安山岩、水晶、日東産黒曜石等を素材とする。1975



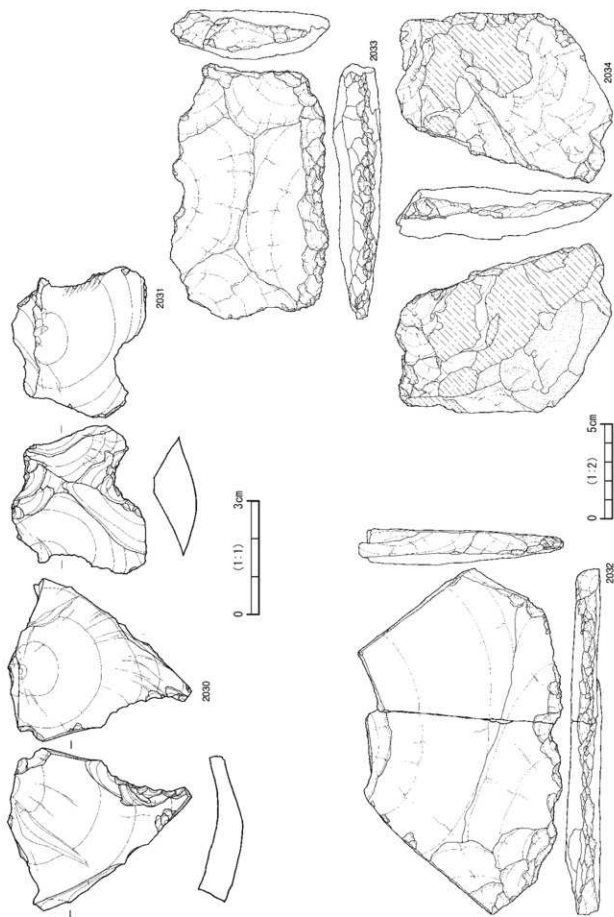
第 484 图 VII 层出土石器 (21)



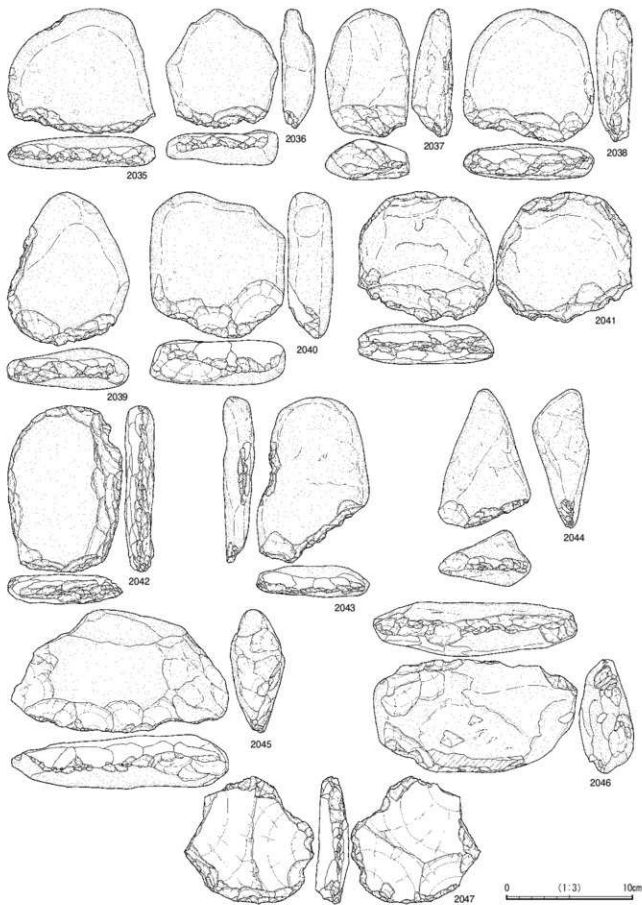
第 485 圖 VII層出土石器 (22)



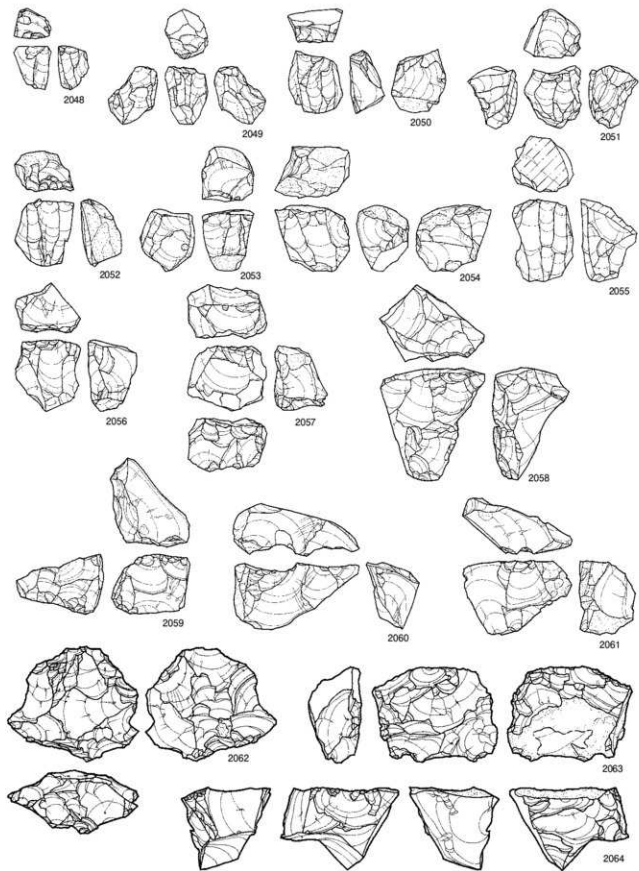
第 486 図 Ⅴ層出土石器 (23)



第 487 図 VI 階出土石器 (24)

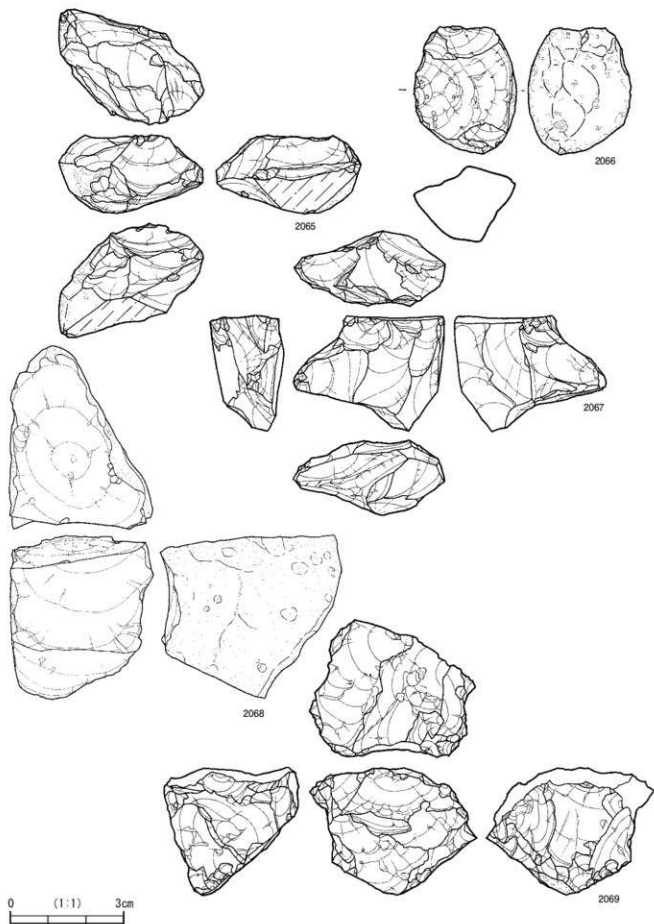


第 488 图 VII 层出土石器 (25)

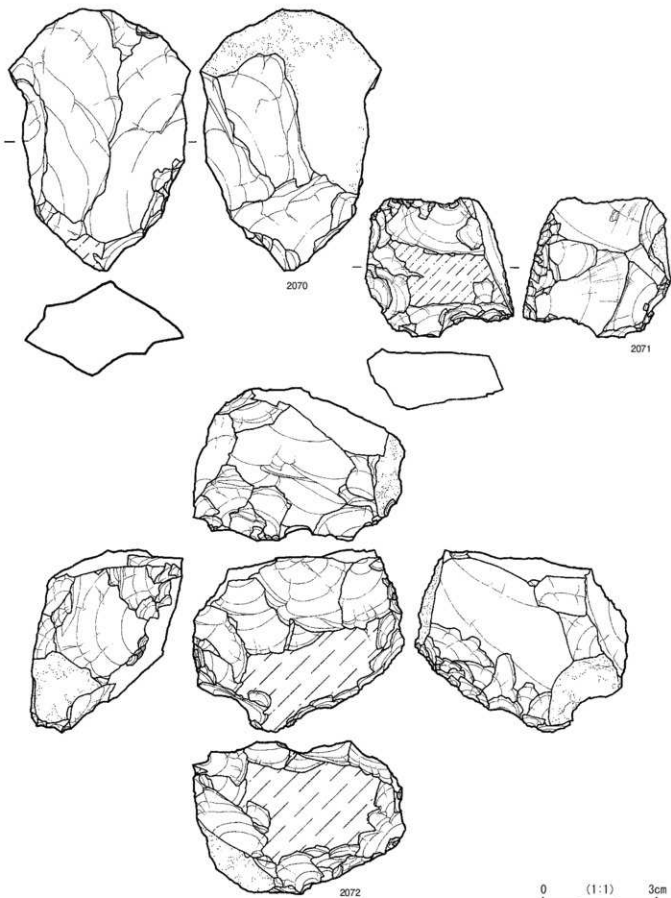


0 (1:1) 3cm

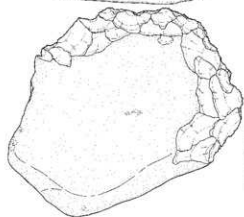
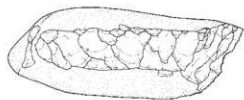
第 489 图 VII 层出土石器 (26)



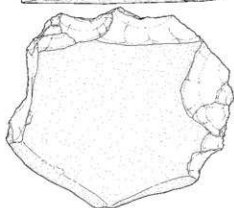
第 490 图 VII 层出土石器 (27)



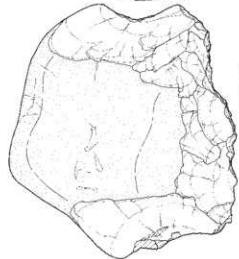
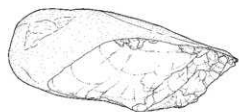
第 491 图 VII 层出土石器 (28)



2073



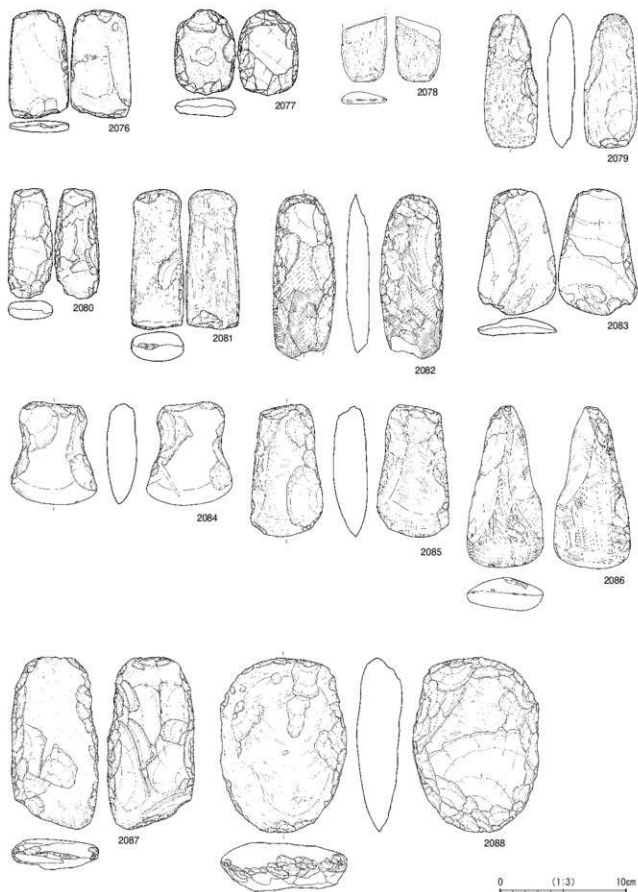
2074



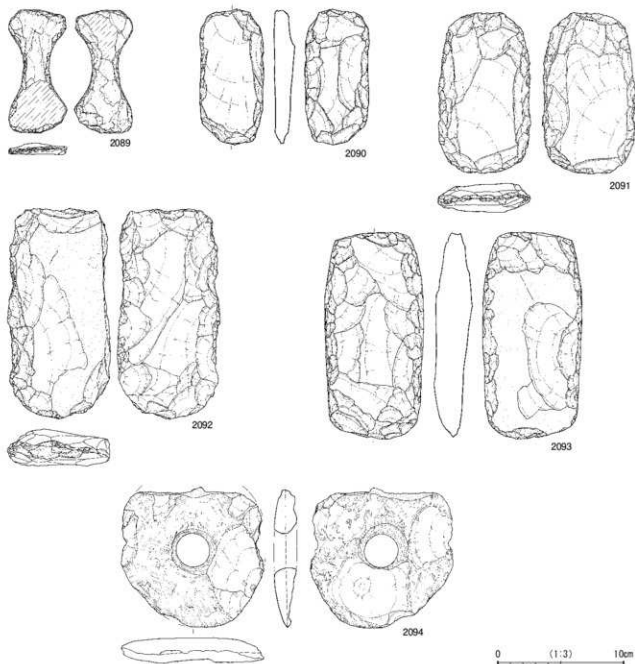
2075

0 (1:2) 5cm

第492图 VII层出土石器(29)



第 493 图 Ⅶ层出土石器 (30)



第494図 VII層出土石器(31)

は右側縁部, 1980は左側縁部が欠損し, 1979は上端部及び下端部に潰れが認められる。1983はホルンフェルス素材とし, 表面は自然面を残し, 長さ8.0cmを測る。上下両端に剥離痕がみられる点から楔形石器に含めたが, 他の資料とは一線を画する。

(10) 二次加工剥片(第484～487図1984～2034)

剥片の縁辺部などに二次加工を行い, 刃部整形が認められないものを二次加工剥片とし, 1984～2034の51点を図化した。一部は削器や搔器などに含まれるものもある。1988は薄い剥片の周縁に微細な剥離痕がみられる。

1992は石匙, 1994は打製石鏃の欠損品の可能性がある。1995は下端部に刃部加工がみられる。2008はほぼ全周を加工し, 2010・2012は打製石鏃の未製品の可能性がある。2019・2020は下端部に刃部加工がみられる。2021・2022・2031は抉りもち, 2025・2026は搔器の可能性はある。2030は先端部に摩耗痕が残り, 2032・2033は下端部に刃部加工がみられる。

(11) 礫器(第488図2035～2047)

礫もしくは厚みのある剥片の片面もしくは両面に剥離を加え刃部とするものを礫器とし, 2035～2047の13点

図化した。石材はホルンフェルスが半数を占め、残りは安山岩と砂岩である。2041・2042は周縁部に剥離を加え、2047は安山岩の素材剥片を使用する。

(12) 石核類 (第 489 ~ 492 図 2048 ~ 2075)

剥片石器素材の剥片を採取した残存石材を石核とし、28 点図化した。そのうち 2048 ~ 2055 の 8 点は細石核の可能性が高い。2048 ~ 2053 は腰岳や上牛鼻・桑ノ木津留産黒曜石、2054 は安山岩、2055 は玉髄を使用する。2056 ~ 2075 は石核である。2063 の裏面は自然面、2064 は自然面を打面とする。2065 は水晶、2066 は三船産黒曜石の円礫を使用し、2068 は安山岩の扁平な重円礫の残核と考えられる。2069 は三船産黒曜石、2070 は白色の玉髄、2071 は赤褐色の玉髄、2072 は頁岩の角礫の分割礫である。2073 ~ 2075 は安山岩及びホルンフェルスの扁平な重円礫を使用し、自然面を打面とする。

(13) 磨製石斧 (第 493 図 2076 ~ 2088)

礫もしくは厚みのある剥片に剥離調整や敲打調整を加えて形を整え、砥石で磨いた斧状の石器を磨製石斧とし、14 点図化した。2076 ~ 2088 はホルンフェルスが半数を占め、次いで頁岩や安山岩を使用する。短冊形が多いが、2083 ~ 2086 は楕形もしくは分銅形であり、2088 は楕円形を呈する。2076・2078・2083 は扁平な剥片に研磨加工を施す。2079 は上下逆であり、研磨は刃部を中心に行われる。2081 は両面とも丁寧に研磨されるが、両側縁部の上部に敷きによる若干の挟りがみられ、刃部は潰れ欠損している。2087 は刃部が斜刃になり、2088 は周縁部や裏面に剥離による再加工を行っており、642g と重い。

(14) 打製石斧 (第 494 図 2089 ~ 2093)

剥片や扁平な礫の周縁から剥離調整で加工された斧状の石器を打製石斧とし、5 点図化した。これらは磨製石斧の素材の可能性もある。2089 ~ 2093 はホルンフェルスもしくは頁岩を素材とし、短冊形を呈する。2089 は厚さ 0.9cm の剥片を使用し、両側縁部を大きく挟る。

(15) 環状石斧 (第 494 図 2094)

円盤状を呈し、中央に円孔を穿ち、周縁に刃部が形成されるものを環状石斧とした。本遺跡からは 1 点出土した。2094 は頁岩を使用した環状石斧であり、上部は欠損している。表裏面とも剥離痕が見られ、裏面の左上の剥離痕には研ぎ直しの形跡が見られる。中央部の穿孔は両側から回転して行われ、外孔径は表面が 3.5 ~ 3.9cm、裏面が 3.8 ~ 4.0cm、内孔径が 2.7cm を測る。器幅は 5.15cm で、穿孔を中心にするると、環状石斧の外径は約 13cm と推定され、残存する周縁から平面形を想定すると、やや楕円形となる。

(16) 石皿 (第 495 ~ 497 図 2095 ~ 2105)

礫を利用し、磨面や凹面などの使用面を有するものを石皿とし、2095 ~ 2105 の 11 点図化した。石材は凝灰岩が多く、次いで安山岩・花崗岩・砂岩がある。2095 はⅦ・

Ⅵ層出土の石皿の中で最重量である。凝灰岩を素材とし、中央部が大きく凹む。2096・2104 は厚みが 10cm を超える。2098・2100 は安山岩の扁平な素材を使用する。2099 は砂岩を素材とし、およそ半分を欠損するが、両面に使用面が見られる。2103・2105 は花崗岩を素材とし、2105 は平面形が方形を呈する。

(17) 石錘 (第 497 図 2106)

左右一対の挟り部を有するものを石錘とした。2106 は頁岩製の石錘で、扁平な小判形を呈し、相対する側縁を剥離して挟りを形成している。

(18) 敲石 (第 498 ~ 500 図 2107 ~ 2152)

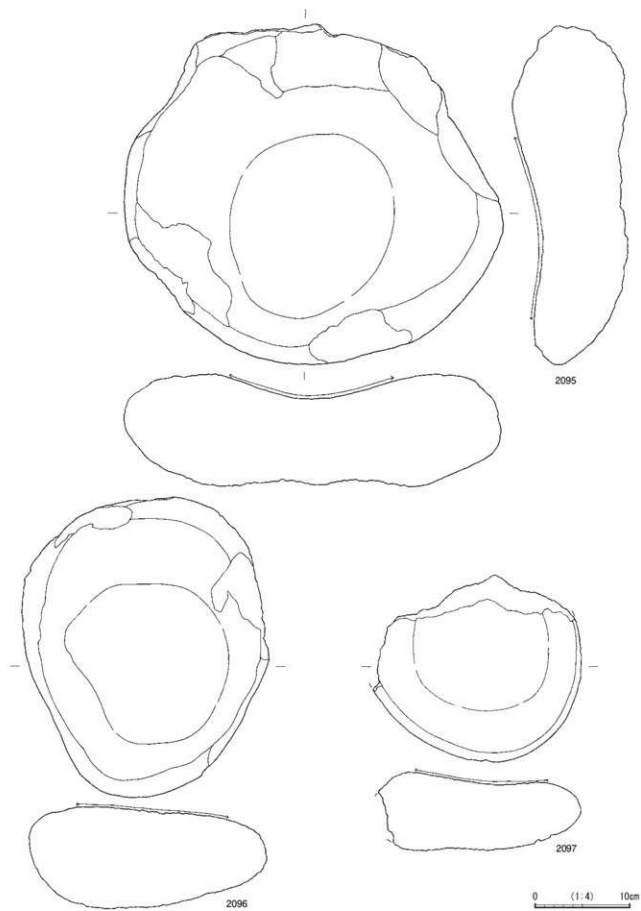
礫を素材とし、全面的もしくは部分的に敲打痕が見られるものを敲石とし、2107 ~ 2152 の 46 点図化した。2151・2152 のみ棒状敲石である。石材は多孔質な安山岩が多く、砂岩や花崗岩も使用する。2107・2108 は 2cm 大の円礫であり、2108 は重さが 13.6g とⅦ層出土の敲石、磨・敲石、磨石の中で最重量である。2109 ~ 2131 は長さが 3 ~ 7cm 大の扁平な円形や卵形を呈する。2117・2119・2121 ~ 2123・2125 は側面のほぼ全周に、2118・2126・2128 は両端に使用痕が残される。2127 は白色で結晶構造が明瞭な水晶を使用し、側面の一部に使用痕が残る。2132 ~ 2147 は長さが 7 ~ 10cm 大である。2134 は多孔質な安山岩を使用し、被熱により赤化している。2136 は隅丸方形を呈し、表裏面の中央が敲打により凹む。2148 は頁岩、2149 は安山岩と石材は異なるが、大きさ等が類似する。2150 は表面は自然面、裏面は節理面を使用し、下部部に剥離痕が残る。2151 はホルンフェルス製、2152 は頁岩製の棒状敲石であり、2152 は両端に使用痕が残される。

(19) 磨・敲石 (第 501 ~ 506 図 2153 ~ 2194)

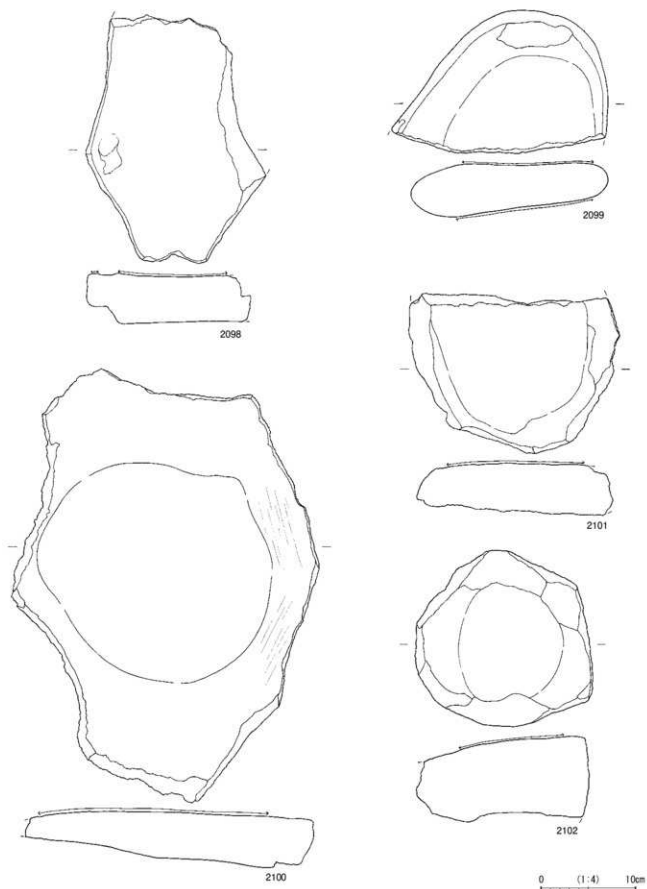
礫を素材とし、全面的もしくは部分的に磨面を有し、平坦面や側縁に敲打痕が見られるものを磨・敲石とし、2153 ~ 2194 の 42 点図化した。石材は多孔質な安山岩が多く、砂岩や花崗岩も使用する。長さが 7 ~ 10cm 大のものが多く、肉厚な楕円形を呈する。2154 ~ 2156・2158 ~ 2162・2164・2167 ~ 2169・2171・2174・2176・2178 ~ 2182・2187 は側面の全域に敲打痕を残し、表裏面は磨面となり平滑である。2160・2166 は下半部、2172・2175 は上半部が欠損し、2178・2181 は被熱により赤化している。2186 は溝鉾状を呈する。

(20) 磨石 (第 506 ~ 510 図 2195 ~ 2259)

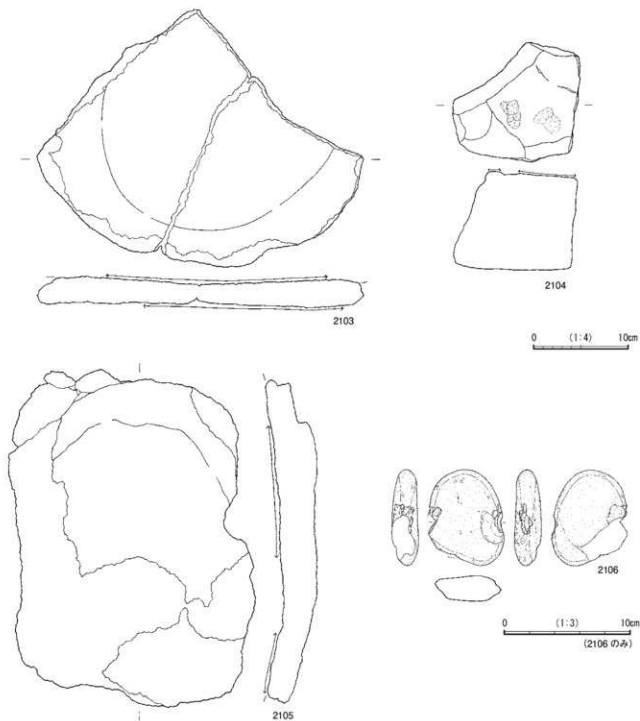
礫を素材とし、全体的もしくは部分的に磨面のみを有し、敲打痕は不明瞭なものも磨石とし、2195 ~ 2259 の 65 点図化した。石材は多孔質な安山岩が多く、砂岩や花崗岩も使用する。長さが 7 ~ 10cm 大のものが多く、扁平な円形や肉厚な卵形を呈する。2195 は 3cm 大、2196 は 4cm 大、2215 は 7cm 大の円礫の全面に磨面がみられる。ほとんどのものは表裏面を磨面とするが、2203・2207・2226・2233・2240 は裏面のみである。2213・2219 は溝



第 495 图 VII 层出土石器 (32)



第 496 图 VII 层出土石器 (33)



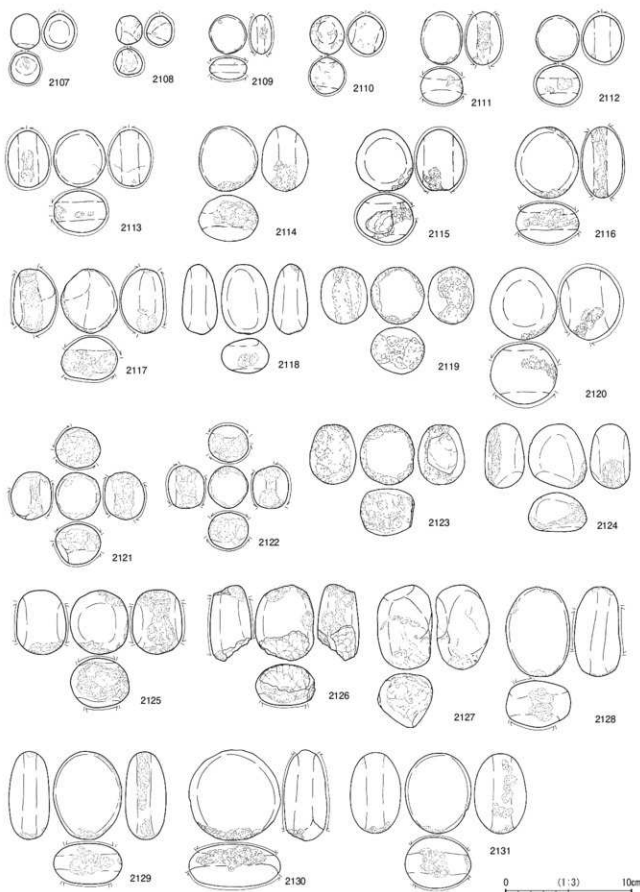
第497図 VII層出土石器(34)

鈍状を呈し、2248は被熱により赤化している。2254は表面が凹面となり、断面形が逆三角形である。2250～2253・2255・2257～2259は長さが11cm超を測り、2256・2257は重さが1,000gを超える。

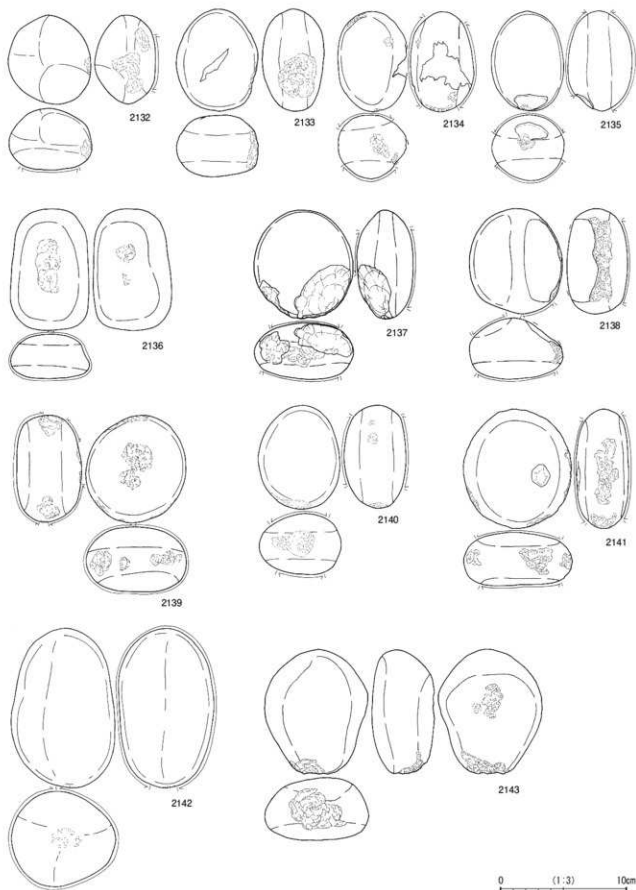
(21) 異形石器(第511図2260～2263)

二次加工により整形された石器でありながら、その機

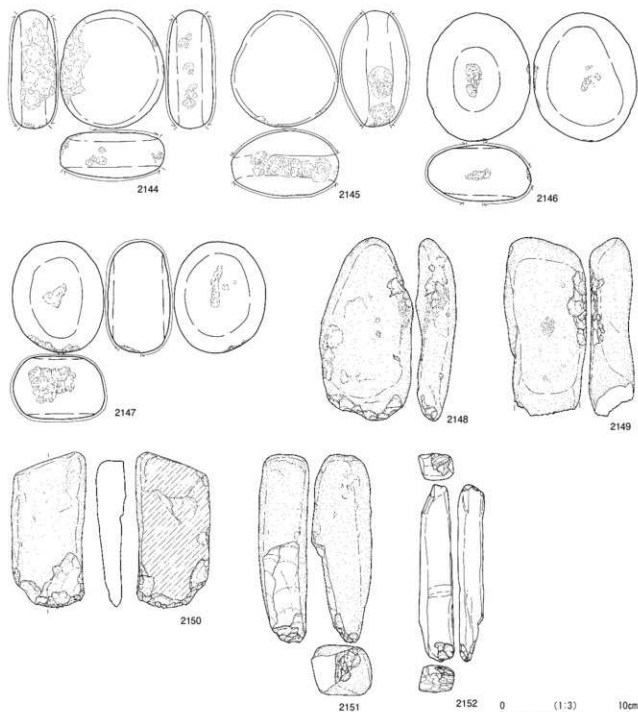
能・用途が不明なものを異形石器とし、4点図化した。2260は腰岳産黒曜石を素材とし、両側縁部及び下端部に抉りをもつ。2261～2263は安山岩を素材とし、表裏面とも主要剥離面を残す。2261は両側縁部及び上下端部に抉りを施すことで、「X」字状を呈する。2262は下部が欠損しているため形状は不明だが、抉りの位置などが



第 498 图 VII 层出土石器 (35)



第 499 图 VII 层出土石器 (36)



第500図 VII層出土石器(37)

2263に類似する。2263は右側縁部が欠損するが、上端部には1か所、下端部には3か所、両側縁部には左右対称に3か所の抉りをもつと考えられる。両側縁部の上部及び下端部中央の抉りは「U」字状に深く施される。

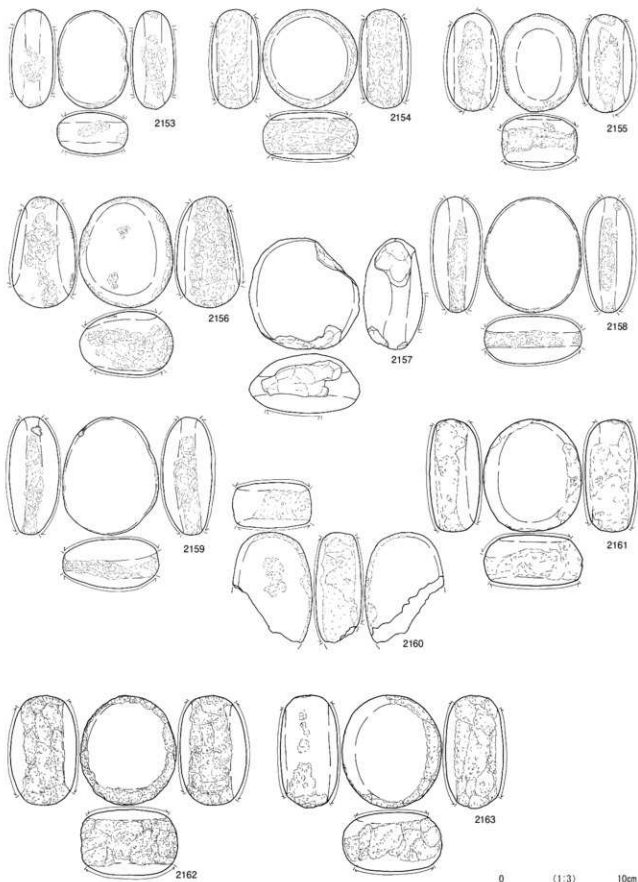
(22) 垂飾品(第511図2264～2266)

垂飾品は3点図化した。2264～2266は頁岩の小円礫を素材とし、表裏面から回転穿孔による穿孔を行い、全

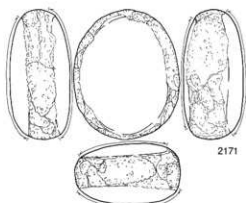
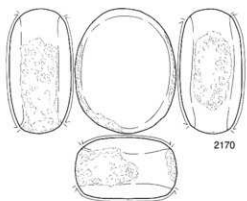
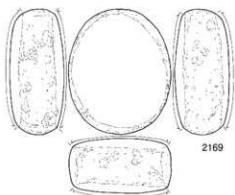
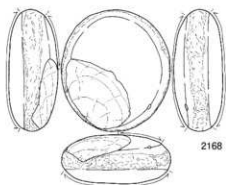
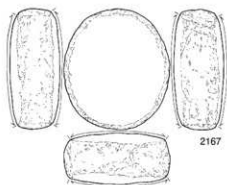
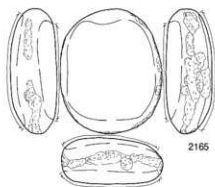
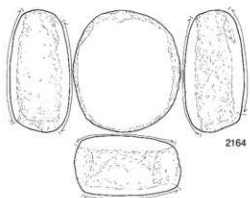
面に研磨を施す。2266は左側縁部に刻みがみられる。

(23) 軽石製品(第511図2267)

軽石を素材とし、穿孔や凹み、研磨などの加工痕が残るものを軽石製品とした。2267は楕円形状を呈し、左側面はやや尖る。表裏面に凹みを有するが、貫通はしていない。

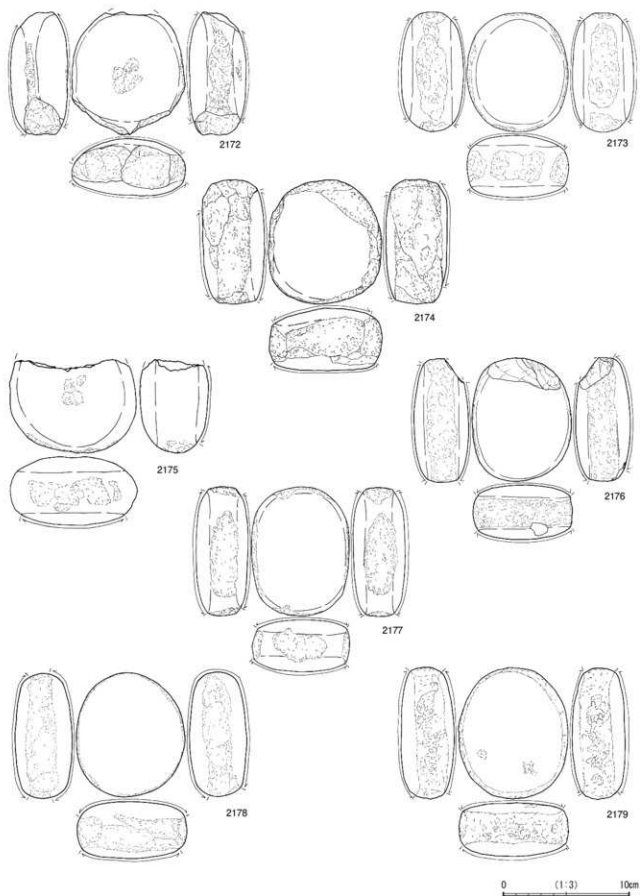


第 501 图 VII 层出土石器 (38)



0 (1:3) 10cm

第 502 图 VII 层出土石器 (39)



第 503 图 VII 层出土石器 (40)